多摩大学の1000日

野田一夫
中村秀一郎

TAMA INSTITUTE OF MANAGEMENT & INFORMATION SCIENCES
多摩大学

目　次

はじめに…… 7
TIMIS－1　狭き門より入れ …… 8
－2　keep TIMIS Clean …… 9
－3　café timis …… 10
－4　惜しまれつつ …… 11
－5　多摩大学総合研究所の目指すもの …… 12
－6　たった一回の人生 …… 13
－7　知之者・好之者不如楽之者 …… 14
－8　真の産学協同に向って …… 15
－9　苦情でなく提案を …… 16
－10☆十字路に立つ大学（その一） …… 17
－11☆十字路に立つ大学（その二） …… 18
－12　学部ないし学科新設構想 …… 19
－13　Some 17 years olds go to Paris to…… …… 20
－14　深夜の遡航 …… 21
－15　知識と表現力 …… 22
－16　開学式典後の２大工事 …… 23
－17☆ネットワーク型研究組織 …… 24
－18　バッハをショパンのように…… …… 25
－19　憂うべき求人競争 …… 26
－20☆私語をどうする（その一） …… 27
－21☆私語をどうする（その二） …… 28
－22　TIME IS MORE THAN MONEY …… 29
－23　TIMIS 会員600名 …… 30
－24　シンガポールの教訓 …… 31
－25　パールマンを聴きながら …… 32
－26　“高齢化”と教育 …… 33
－27　学長の仕事 …… 34

— 28 高齢しか遺しえぬもの ……35
— 29 Rapport 通算 100 号
—会員名簿作成へのご協力のお願い— ……36
— 30 游 於 藝 ……37
— 31 読書の秋 ……38
— 32 横山寛彰君の死を悼む ……39
— 33 現代の若者たち ……40
— 34 “ブーム”の中で…… ……41
— 35 ことばの重み ……42
— 36 “麦畑”現象 ……43
— 37 驚いたことにUFOが…… ……44
— 38 “利休の年”逝く ……45
— 39 新年は「卒業」から ……46
— 40☆KASTの誕生 ……47
— 41☆再びKAST ……48
— 42☆技術と技能 ……49
— 43 学長の鈴 ……50
— 44 Hanakoのおかげで…… ……51
— 45 早治大学唯野教授 ……52
— 46 老いてなおジャンヌ・モロー ……53
— 47 海図なき航行 ……54
— 48 憂鬱な季節 ……55
— 49 “海の都”の教訓 ……56
— 50 規模の不利を超えて ……57
— 51 道は果てしなく遠くとも ……58
— 52 開学一年を顧みて ……59
— 53 21世紀を拓く ……60
— 54 學問要從非學問來 ……61
— 55 “退学勧告”をめぐって ……62
— 56 教育とは何か ……63

— 57 競争の精神 …… 64
— 58 今　なぜか多摩大学が…… …… 65
— 59☆東欧の旅から …… 66
— 60 ギャラクシー賞 …… 67
— 61☆ハンガリーの経済・経営学者たち …… 68
— 62 16日　18時10分 …… 69
— 63☆多摩大の敵は多摩大である …… 70
— 64 Ask not what your country can do for you, …… 71
— 65 時は移ろい，人変らず …… 72
— 66 喜んでばかりはいられない …… 73
— 67 君は　坂の上に　雲を見るか …… 74
— 68 TIMISの壁 …… 75
— 69 再び「多摩大の敵は多摩大」 …… 76
— 70 われ思う、故にわれ在り …… 77
— 71 上岡龍太郎の話芸 …… 78
— 72 ブリスベンで考えること …… 79
— 73 天城会議 …… 80
— 74 コミュニティカレッジ発足 …… 81
— 75 青年よ大志を抱け …… 82
— 76 排すべき"閉鎖性" …… 83
— 77 ネットワーク・パワー …… 84
— 78 3先輩に脱帽！ …… 85
— 79 鼓腹撃壤の気分 …… 86
— 80☆モスクワ大学　ビジネススクールにて …… 87
— 81☆モスクワ—何が変ったか— …… 88
— 82 広報努力空しからず …… 89
— 83 中国とモナコ …… 90
— 84☆Voice調査委員会 …… 91
— 85 二通の手紙 …… 92
— 86 教え甲斐のある学生 …… 93

— 87　品格と表現力 …… 94
— 88　THE ENIGMA …… 95
— 89　春の時代を迎える大学 …… 96
— 90　多摩大学の光と影 …… 97
— 91　今年の主役は学生だ! …… 98
— 92☆　大学設置基準の大綱化 …… 99
— 93　理想は遠のいていないか …… 100
— 94　41歳寿命説 …… 101
— 95　そんな少年よ …… 102
— 96　内は福、外は鬼？ …… 103
— 97　哀れなるかな“生涯現役” …… 104
— 98　“良い・悪い”から“好き・嫌い”へ …… 105
— 99☆　大学設置制限への疑問 …… 106
— 100　アッシー・メッシーの時代 …… 107
— 101　パラダイム変換 …… 108
— 102　コミュニティ・カレッジ'91 …… 109
— 103☆　ボイス（学生の声）調査の所見 …… 110
— 104　“大量留年”に想う …… 111
— 105　第3回入学式 …… 112
— 106　怒鳴り合い …… 113
— 107　2冊の本 …… 114
— 108　阪神タイガース …… 115
— 109　飽食と飢餓 …… 116
— 110　燃えつきて …… 117
— 111　いたずらにすまじきもの …… 118
— 112　アスペンを想う …… 119
— 113　時代は“多摩紀” …… 120
— 114☆　夏休みの勧め …… 121
— 115☆　地域からみた企業者活動 …… 122
— 116　3種類の卒業生 …… 123

— 117　東京夢幻図絵 …… 124
— 118☆ 東南アジアの日本企業 …… 125
— 119　偏差値を考える …… 126
— 120　男も愛嬌 …… 127
— 121　花数寄 …… 128
— 122　例の仲間 …… 129
— 123☆ 東南アジア大都市交通 …… 130
— 124　ひとつの不条理 …… 131
— 125　今、縄文ブーム …… 132
— 126　大学史はついに…… …… 133
— 127　成功の甘いワナ …… 134
— 128　石井和子さんのこと …… 135
— 129　移ろいやすきは人の心 …… 136
— 130　当世就職事情 …… 137
— 131　上々のスタート …… 138
— 132　人はオカシクあるべきだ …… 139
— 133　りえ・エフワン・学園祭 …… 140
— 134　山気佳日夕 …… 141
— 135　Miss Saigon …… 142
— 136　萬里の長城 …… 143
— 137　永平寺　晩秋 …… 144
— 138　それぞれの青春 …… 145
— 139☆ 本田宗一郎さんを偲ぶ …… 146
— 140☆ ファッション・ファクトリー・ブテック …… 147
— 141☆ コミュニティ・カレッジの明日 …… 148
— 142　栄華の巷・偸安の夢 …… 149
— 143　第２の創業期 …… 150
— 144　レニ・リーフェンシュタール …… 151
— 145　親の心子知らず …… 152
— 146　“いき”と“獣性” …… 153

— 147　新しいトビウオ ……154
— 148　リーダーの今日的条件 ……155
— 149☆「学ぶコミュニティへの発信　自由人・専門人
そして市民」 ……156
— 150　Other People's Money ……157
— 151　多摩大はまだ目覚めない ……158
— 152　希わくは惜しまれつつ ……159
— 153　一流ホテルで一流の講義を ……160
— 154　鈴屋の入社式 ……161
— 155　小さなスペース，大きな友垣 ……162
—最終号　けふもまたこころの‥‥ ……163

（注）☆印は中村秀一郎が執筆致しました。

おわりに ……164

ハガキ通信TIMISは、多摩大学学長室よりTIMIS会員に対して毎週金曜日に発送されております。ご意見、ご提案、あるいは新規入会の件等々で事務局にご連絡されたい場合には、何卒下記へお願い申し上げます。

住　所　　多摩市聖ケ丘4-1-1（〒206）
　　多摩大学学長室TIMIS係
電　話　　0423－37－7141
ＦＡＸ　　0423－37－7103

はじめに

野田一夫

この小冊子は，平成元年4月14日より同4年4月3日まで約3年にわたって，毎週金曜日にTIMIS会員に対して小生(または中村秀一郎氏）よりお送りしたハガキ通信TIMIS 156週分を集成したものです。TIMISは申すまでもなく多摩大学の英文名の略ですが，上記期間中このハガキ通信を定期的に購読される方々（TIMISの会会員）こそは，卒業生のいない新設の多摩大学にとって最も大切な精神的後援者でした。したがって，何事につけ多摩大学に関して起ったことや私どもが考えていること等を毎週お報らせしたり，ご理解をいただき，また時にはご批判を仰ぐことが，TIMISの目的でした。

このハガキ通信の前身はRapportと呼ばれておりました。Rapportは，小生が多摩大学の設立の責任者であった2年4カ月のうちとくに多忙であった後半の期間，次第に増加していく関係者・協力者の方々に対して毎週火曜日にお送りしつづけた往復ハガキ通信でした。したがって，本書とともに「多摩大学設立の歩み」を併読して頂けますと，多摩大学開学以前から開学後に至る4年半，責任者が何を考え，何をなし，また何をなそうとしていたかが，よく理解して頂けるものと信じます。

小さいながら大きな理想を持って発足した多摩大学ですが，日本の大学の因習を打破するような形で私共がつぎつぎに打出した施策は逐一マスコミによって報道されつづけた結果，本学に対する世間の評価と知名度だけは驚くほど高まりました。しかし，こうした場合，えてしてイメージと実態との格差はひろがらざるをえません。私どもは，多摩大学の現状に決して満足することなく，常に自らを戒め，地道に所期の理想の実現を目ざし努力をつづける所存です。

狭き門より入れ

各　位

野　田　一　夫

この10日「パルテノン多摩」で多摩大学と同附属高校合同の「入学のつどい」が行われました。冒頭のスピーチで小生は，新入生諸君に対して希いをこめて，聖書マタイ伝の中にある「狭き門より入れ」の言葉を贈りました。

小さい多摩大学は大きな理想を掲げて出発しました。この理想を最も簡潔に表現すればそれは「21世紀を拓く」という七文字に集約されます。20世紀は人類の歴史において最も充実した時代でした。前半2度にわたる大戦が世界の多くの人々に災禍をもたらしたものの，科学技術の進歩，経済の繁栄，国際協調体制の整備……といった成果には素晴らしいものがあったからです。しかし所詮は人間のなせる業，何かにつけて成功は成熟を生み，成熟は頽廃を導きます。成功の20世紀も世紀末を迎えた現在，頽廃の様相は否定すべくもありません。政治的腐敗の進行，社会的無気力の蔓延，国際的摩擦の増大……，20世紀はこれら全てを好ましからざる遺産として，21世紀に残す筈です。

とすれば，21世紀を20世紀に劣らぬ輝かしい世紀として拓くために必要な人間的属性は，練磨された知性と肉体だけではありません。真に必要なものは，理想に燃え，進んで艱難と戦う強い意志をもった人材です。多摩大学は実にこういう頼もしい人材を育てようとして設立されたのです。このため，古い歴史をもち，20世紀にどっぷりつかった名門大学が，もろもろのしがらみの故に望んでもできない革新的措置や行動を，新生の多摩大学はどしどし実行に移していきます。

ただ問題は学生側の対応でありましょう。多摩大学の創設者として小生が今切に心に念ずるのは，私共の期待に応え，彼らが理想のために進んで艱難に挑戦し，壁にぶつかっても決して他人を責めない崇高な精神の持主に育ってくれることのみです。

Keep *TIMIS* Clean

各　位

野　田　一　夫

多摩大学の校舎建設工事はようやく最終段階を迎えました。内装・外構工事もほぼ終り，あとは植栽工事を残すのみです。教職員にも，学生にも校舎の評判は上々のようで，責任者としてホッと胸をなで下しています。でき上ってみると，スポーツ・アリーナは予想以上に大きな空間であるばかりか，雰囲気そのものがいかにも洗練されているではありませんか。

3～4階をカーブのあるしゃれた階段で結んだ図書館も，受付，ラウンジ，閲覧室とも ゆとりがあり，あかぬけしていて，そして使いやすそうですが，何といってもインテリアと設備に凝りに凝ったキャフェテリアは圧観で，必らず多摩大生の自慢の場所になる筈，そのオープンが待たれます。個室を排しパーティションを使って高級オフィス風につくられた研究室も，教員の方々には喜んで頂いていますから，このスタイルがこれからは日本の他の大学にも普及していくでしょう。

ところで問題は，このように美しくでき上った建物をどうやって美しく保っていくかということです。何しろ12,800㎡の延床面積の室内空間は広すぎて，基本的には専門業者の知識・技術・労力に依存せざるをえないのは当然です。しかし，大学の予算にも限りがありますから，清掃のために過大な出費はできません。そこで是非実行に移したいのが，ボランティーアによる清掃を目ざすＫＴＣ（Keep *TIMIS* Clean）運動です。

中村学部長や日下教授のように教員の中にもすでに趣旨に賛同して参加を申込まれた方もいますが，近く学生にも呼びかけ，各人があいている時間，お揃いのファッショナブルなスポーツウェアの制服に着がえ，専門業者に協力して，校内はもとより，周辺まで，環境美化につとめようというわけです。近く詳細を発表致しますので，奮ってご参加下さい。

TIMIS －3（速報版）

平成元年4月25日
（平成元年4月28日分）

café timis

各　位

野　田　一　夫

お気づきになりましたか？ *TIMIS* の先号で多摩大学の誇る食堂“café timis”について小生が記した文章のくだりで，“圧巻”という言葉が“圧観”と誤って印刷されていました。それを見つけて恐縮するやら苦笑するやらでじっと“圧観”という字を見つめているうちに，この新語もなかなか味があるように思えてきました。

“café timis”の内装工事は昨日（４月２４日）完了し，夕刻業者から引渡し式が行われました。工事中週２回程度は見て廻っていた場所ですが，こうして化粧が終って見わたしてみると，その内装はたしかに圧観(?)です。日本では大学はもとより，官庁も病院もひどく“食堂”を軽視してきました（会社ですら10年ほど前までは同じでしたが…）。欧米人が驚くほどのインテリア感覚の貧しさ，食事の不味さ，サービスの低さが当り前のようにまかり通ってきたのです。とくに大学の“学食”は一般にひどいもので，日本のエリートは毎日毎日このような雰囲気の中で食事をしてもみじめな気持にもならないタフな神経の持主に育てられてきたと思われます。

しかし結果としてそのことが，日本が“国際化”とか“文化”とかを国是として実行に移していく際，最大の障害になったと思われます。そういう反省のもとにつくられた多摩大の食堂は，“学食”のイメージを大きく変える筈です。“豊かな時代”“感性の時代”の到来の中で在来的な“学食”はも早多くの大学生からも見放されていっていますが，多摩大の食堂は都会的ライフスタイルを好む多摩大生に愛されるばかりでなく，多摩大を支えてくれることになる周辺の地域社会の人々からも愛される場所になると信じます。「タイミス（キャフェ）に立寄らずしてタイミス（多摩大）を語ることなかれ！」

惜しまれつつ

各　位

野　田　一　夫

先週は竹下首相の辞意表明というニュースをめぐって，日本中が揺れました。大方の国民の支持を失って久しい竹下氏の退陣は，マスコミの酷な表現―“野たれ死に”“満身創痍”“四面楚歌”…―に端的に示されています。氏自身は「後世の歴史家の評価を待つ」という心境でしょうが，それにしても，世論調査の数字は氏自身が辞め時を失ったことをはっきり示しています。

責任ある地位にいる人間の辞め方としては“惜しまれて”という状態が理想であると，小生は信じます。しかし古今東西の歴史をふり返ると，こういう辞め方をした人はきわめて少ないようです。むしろ竹下氏のような例の方が稀ではありません。それほど極端ではなくて，自分は“惜しまれて”と信じながら，思わず地位に長居をした人々の例は，大小無数にあるといえましょう。

そこで最も無難でかつ賢明なのが“任期”とか“定年”で責任ある地位での在任期間をしばるというやり方です。もっとも，任期中または定年までの間に“野たれ死に”すれば致し方ありませんが，それでも任期を短かく，または定年を早くしておいて，絶対にそれらを守れば，辞めていく人が“惜しまれて”去れる確率は格段に高くなる筈です。

こう考えて小生は，理事長に進言申しあげ，多摩大学の学長任期を原則1期かつ再々任は絶対に認めず，と規定化して頂きました。ところで専任教授の定年ですが，創立時就任者は60歳代なら70歳，50歳代，40歳代，30歳代，20歳代なら，それぞれ69歳，68歳，67歳，66歳とし，更に今後は当面一律に65歳としつつ，次第にそれを早めていってはどうでしょうか。是非とも「惜しまれつつ勇んで去る」というのを多摩大学教職員の晩年の美学としたいものです。

多摩大学総合研究所の目指すもの

各　位

中　村　秀一郎

多摩大総研は，.大学開設と同時に誕生し活動を開始した。その目的は大学の「21世紀を拓く」という理念のもとに，革新に挑戦しようとする行政や産業との効果ある協力関係を開発することにある。

わが国の大学には研究所が付置されているケースは多いが，そのほとんどすべては，国・自治体の予算や大学当局の援助に依存するのを当然のこととしている。

これに対してわが総研は，みずからの研究・運営費用は，みずから稼ぎ出すという基本方針を貫こうとしている。それだけではない。より充実した教育のために，学校法人の収益にも，いささかの貢献を計ろうとしているのである。

総研は民間のシンクタンク，コンサルタント・ビジネスと全く同じ自前主義を原則としている。その理由は社会的ニーズに対応することにおいてはじめて可能となる経済的自立なくして，研究機関としての自立性なしとする判断にもとづいている。もちろんわれわれは，総研の研究・教育方針にご賛同いただける各方面からのご支援を拒むものではないが，それはあくまで自前主義を貫いた結果と考えている。

総研の特徴は，まず大学に結集した，学際性・実際性・国際性ある経済・経営・情報・文化にわたる各分野の一流研究者を擁していることであろう。第二に，時代の要求を先取りする調査研究・教育研修プロジェクトの立案実行能力を持っていることだ。第三に多様化し高度化するニーズに応えるべく，幅広い人的ネットワークにより，学外の一流研究者との協力体制を展開しうることである。

われわれは，既成の大学研究所　シンクタンクとは異質の，開かれた組織であることで，研究・教育・ネットワークの核として機能することによって，独自の存在理由を持つと思う。

たった一回の人生

各　位

野　田　一　夫

TIMISの先号は中村秀一郎氏が始めて執筆されました。早速友人何人かから「病気休筆でもしたの？」と見舞の電話を貰い，恐縮しました。幸い先週も元気で跳び廻っていましたが，すでに一部の方々には予告させて頂きましたように，TIMIS は今後中村秀一郎氏と２人で執筆をつづけるつもりです。

さて，多摩大学では小生が念願していた通り，活気に満ちたキャンパスライフが毎日くりひろげられています。ひと月前オリエンテーションの場で全学生に対し，小生はこう呼びかけました。「……第一志望校に合格できなくて多摩大に来た諸君は，是非ともこの１週間のうちにその学校へ行き，設備なり，授業の様子なり，キャンパスの雰囲気をつぶさに観察していらっしゃい。そして，どうしてもまだ未練が残ったら，どうか多摩大学をやめて，来年その大学へ入るための受験勉強に全力を傾けなさい。人生は１回しかないのです。他校に未練を残しつつ多摩大学で学ぶことは不幸です。私を含め，多摩大学の先生方は，誰一人として，落ちぶれてこの大学に来たのではありません。大きな理想をみんなで実現しようと，それぞれに恵まれた地位を捨てて進んでここへ来たのです。……」と。

１週間後，退学者は只の１人もいませんでした。行き交う学生に相手かまわず尋ねてみました。「いやぁ多摩大学が断然いい。設備もさることながら，教授陣にやる気がみなぎっている。……」という元気のいい答えが異口同音に返ってきました。小生にとってこの時ほど嬉しかったことはありません。たった１回の人生，誰もが毎日を納得して生きるべきです。多摩大学の学生も教師も職員も毎日納得して生きているなら，訪ねて来る人は間違いなく，その活気を肌で感じとることでしょう。それが永遠に多摩大学のあるべき姿です。

知之者・好之者不如楽之者

各　位

野　田　一　夫

先日，旅先のホテルで，朝何気なくテレビをみていて，たまたま番組に出ていたマッハ文朱さんの話にひどく感激しました。彼女が2年生で高校を中退し，女子プロレスラーとしてスターダムにのし上ったことも，その後わずか2年でプロレス界を退き，タレントとして芸能界入りして活躍していたことも，ご存知の方はたくさんおられることでしょう。

しかし，彼女が理由はともかく昭和59年に渡米し，ニューヨークのハンター大学の聴講生として勉強していたことは，少なくとも小生は知りませんでした。小生がその朝感激したのは，そのことを知ったからではありません。彼女は大学の教室で，米国の教授の講義の余りのおもしろさに魅きつけられ，どうしても正規の学生になりたくなりました。そこで61年に帰国し，ひそかに東海大学附属望星高校の通信教育部の2年に編入学し，3年かかって今年3月同校を見事に卒業，今年は芸能界の仕事を整理して再渡米，今度は学生として新しい人生のスタートを切ることを検討しているとのことです。

昭和34年3月3日生まれの彼女は当年とって30歳，日本流に考えれば「大学出てから7～8年，今じゃ何を学んだのかも夢のごと……」というところでしょうが，27歳で学問のおもしろさに目覚め，28歳で高校に再入学し，30歳で期待に胸ふくらませて大学の門をくぐる，この非日本的かつ素晴らしく自主的な彼女の生き方に，小生はすっかり感心させられました。

学ぶことが楽しいから勉強する，という彼女のような生き方を現代の日本の大学生すべてに期待することは，果してムリというべきでしょうか。小生はそう思いません。多摩大学の理想的学生像がそのようなものなら，私共教員は日々努力を傾けて，学生達をその理想像に近づける責任があります。

真の産学協同に向って

各　位

野　田　一　夫

去る29日(月)午後，経団連ホールで「90年代を迎え撃つ企業戦略」をテーマとするセミナーが，産業界各社の経営者・管理者の方々を対象として催されました。主催は日刊工業新聞社と多摩大学総合研究所で，内容は以下の通り盛りたくさんでした。

○ごあいさつ　「多摩大学設立者として」　田村邦彦
　　「産学協同の新時代」　野田一夫

○対　　談　「情報化社会の光と影」
　白根禮吉（多摩大学教授・電気通信科学財団理事長）
　井上一郎（多摩大学教授・科学技術ジャーナリスト）

○パネルディスカッション「企業文化創造のための戦略づくり」
　井上宗迪（多摩大学教授・丸紅国際経済研究室長）
　中西元男（ＰＡＯＳ代表取締役）
　星野克美（多摩大学教授）
　望月照彦（多摩大学教授）
　中村秀一郎（多摩大学教授・多摩大学総合研究所長）

○講　　演　「21世紀・変わる世界変わる日本」
　日下公人（多摩大学教授・ソフト化経済センター専務理事）

さて，ひとつの大学の新設を記念して，ちゃんとした新聞社が，都心の大ホールで大々的セミナーを開催したという前例もありませんが，かりにそれを試みたとしても，上記のごとく，その大学の専任教授で全講師陣をうずめ，しかも何百人という経営者・管理者が有料の聴衆として集まることは期待はできなかったに違いありません。多摩大学の誇りはそれが可能なことです。しかも多分3日間でも5日間でも1週間でも，同じ聴衆に対してそれが可能なだけの人材を教授陣に集めていることです。協同とは同等の能力をもち合わせた者同士が共通の目的のもとに手をつなぐことです。多摩大学はそのような産学協同を明確な設立理念として誕生した日本で最初の大学と信じます。

苦情でなく提案を

各　位

野　田　一　夫

先週水曜日（１日），中村学部長とご一緒に，久方ぶりに全学生と対話を行ないました。開学後そろそろ２カ月，学生たちの間にもいろいろな要求が生じて来たと判断したからです。キャンパスの中でおりおり学生たちと立ち話しをすると，「レストランの食事が高い」とか「冷水器が欲しい」……とかいった要望が小生の気になっていました。

何事につけ要求には建設的側面があります。現状満足の中からは進歩が生まれようがないからです。しかし，単なる要求は青年からとかく公正な判断力や責任感を喪失させ，精神と知性を気づかぬうちに幼稚化していくこともまた事実です。“豊かな社会”を基盤とした“大衆化”情況の進展の中では，青年はとかく大衆の名のもとに，責任ある立場にいる大人に対し，まるで頑是無い子供のように限りない要求をつづけがちです。

多摩大学の目的は，どんな職業であれ社会人として責任ある地位に就き，その職責を見事に全うする人材を養成することにあります。したがって私共は，学生たちが学生でいる間に，単なる要求がいかに空しくかつ愚かな行為であるかという認識を，骨の髄までたたき込んでしまう必要があります。心の中に生まれる要求を建設的なものに転ずる能力が“知性”であり，その育成こそ教育が目ざすものです。

そこで，対話集会の冒頭小生は学生たちに「苦情は言うな。提案をしろ」とクギをさしました。「どうしたら質とサービスを落とさないで食事を安くできるのか」，「どんな冷水器の機種がよくてどこへ設置したら一番便利か」……こういう提案をするためには，それなりの勉強と準備の時間が必要です。「苦情は人を愚かにする，愚か者になりたいか？」という問いかけに対し，学生の顔は当惑気味でした。

十字路に立つ大学（その一）

各　位

中　村　秀　一　郎

「大学の教師でいちばん滑稽なことの一つは，性懲りもなく四月の学期始めになると学生のことごとくが本格的な知識的熱意に燃え学問の蘊奥を極めようとして教室に集ってくるという錯覚に陥ることである」

毎年春になると必ず私の心に甦ってくるこの文章は，故林達夫氏の「十字路に立つ大学」（著作集6所収）の書き出しの部分である。無数あるといってよい大学論のなかで私にもっとも大きな衝撃を与え続けているのは，戦後初期1949年に書かれたこの評論なのである。

教室の実態は，「点取虫」をふくむ勉学の場とするものだけの集りでなく，そこを昼寝の場所とし談話室とし書斎としアトリエとする「高価なる贅沢」をあえてしようとする手合の集りの場なのである。さらに欠席を常習とする相当数の学生を考えるなら，教室はまさに「定義の仕直し」に迫られているのである。

大学がこうなるのは，氏によればアカデミック・マインド，つまり思考型の人間によって制度化され，またそうした型の人間の形成に向くように仕組まれ，この型の人間によって教授陣の大半が占められているという事実にある。ところで学生の方には体系的思考や論理的操作にははなはだ不得手な別な心の型もある。数としては案外多いこの型の心の持主は思考型支配の大学では，この機構の犠牲になってしまうのが，そのほとんどすべての運命なのである。つまり，大学は「制度が人を逆支配し，不具にし圧殺している一つの生きた実例」なのである。

教室を本来の学びの場所とするためには，大学自体が，このような所を得ず，気乗りのしない学生たちにも，己れの能力と個性を発見し伸ばす手だてを提供する道を，開くことなのである（続く）。

十字路に立つ大学（その二）

各　位

中　村　秀　一　郎

林達夫氏によれば，現代大学革新の課題は，「アカデミックなものに対する闘争」だという。それは前号で指摘したような，大学での思考型支配への抵抗の呼びかけなのである。

人間には誰しも異った能力，たとえばユングのいう四つの能力，思考型（シンキング・タイプ）とならんで，感情型（フィーリング・タイプ）直観型（インテューイショナル・タイプ）煽情型（センセーション・タイプ）が多少の度合いにおいて具わっている。教育者の職能は，型の異なる学生たちの主要能力を発掘しあるいは，発揮させること，その能力の個性的なあらわれ方に適切な方途を見つけてやるといった「至難なわざ」を果すことなのである。

「学校のことを几帳面にやる学生だけが卒業して有能な社会的活動をやっているわけではない。教師的眼鏡からみて始末に負えない学生たちも何とか自分の道を切りひらいて世の中に出てから結構立派な働きをしているではないか。思考型を本位とする大学の建て前では，講義には『糞勉強家』，演習には一握りの好学的秀才を中心に幾つかの層が描かれ，その周辺に行くほど別の心型で伸びそうな青年たちが席の温まらぬ思いで精神的右往左往をしている光景を見るのが常態であるが，この常態は実は教育の大義からいえば変態なのだ」。

これを正すのは，たしかに容易なことではない。幸いなことに，多彩な職業的キャリアを持ち，幅広い社会活動をおこなうことで，「アカデミック・マインド」を相対視しうる人々から成立つ多摩大教授陣は，卓越した知性であった林氏が，すでに49年に「時代遅れ」と指摘し，今日に至っても全く解決されていない「変態」を正す意欲と能力を期待されてよいのである。

学部ないし学科新設構想

各　位

野　田　一　夫

多摩大学の今後の発展にとって，最も重要な経営戦略的課題は学部ないし学科の増設です。去る10日から2週間ほど，小生は海外の「先進オフィス視察団」の団長として約30名の日本の産業人の方々と欧米5都市を廻ってきましたが，旅行中片時も胸中を去来して止まなかったものは，この課題でした。

学部ないし学科の増設は，単に収容定員数を倍増することによって，大学の基礎的財政状態を著しく改善してくれるのみでなく，教授陣の拡充によって，大学および総合研究所の対外活動の強化に役立ちます。問題は増設の対象は何かということです。小生の考えでは，このための基準は，①設置分野の学問の研究と応用が時代から強く要求されていること，②少くともわが国の大学では設置の前例がないこと，それでいて，③設置認可上さして困難でないだけの教員を揃えられること，の3つです。

そこで具体的にご提案申しあげたいのは，①オフィス・ファシリティマネジメント，②レストラン・ホテル，および③都市計画・開発，の3つです。いずれもこの分野は欧米，とくに米国ではすでにいくつかの大学で学部ないし学科を設けてそれぞれ定評のある研究を行い，また毎年専攻学生を産業界に送り出して高い信用を得ております。しかしわが国では③に関して東京大学の都市工学科と東洋大学の不動産学科，②に関して立教大学の観光学科を数えるのみですが，何れも内容は小生の構想するものからはかなり外れています。①に至っては，時代の強い要求に対してわが国では大学側に対応の気配すらありません。①②③に関しては何れ詳しい構想を示させて頂きますが，これら以外に各位でご提案があれば，ご示唆だけでも頂戴できないものでしょうか。

Some 17 years olds go to Paris to……

各　位

野　田　一　夫

先日の海外出張の折，ちょうどシカゴからミュンヘンへ向うアメリカン航空の中で，隣席の友人から手渡された英字紙の全面広告に，思わず心を奪われました。この広告の上部には左右に相対して，2人の若きテニスプレヤーズの颯爽たる試合中の姿写真が掲載されており，写真の下には大きな活字で

Some 17 years olds go to Paris to study history,
but others go to make it.

というキャッチフレーズがさりげなく2行並べられていました。

これらの若きテニスプレーヤーズはいうまでもなく，去る6月に開催された全仏オープンテニスで優勝したマイケル・チャンとアランチャ・サンチェスでした。天下のステファン・エドバーグとステフィ・グラフをそれぞれ決勝で負かした2人はともに17歳，どちらも今年までは一般には無名の選手であったが故に，全世界のテニスファンを熱狂させ「歴史は若者によってぬりかえられた」という冷厳な事実を心に刻みつけてくれました。

勝負のはっきりするスポーツの世界では，実力をもった新人の登場によって常に新らしい歴史がごく自然に形成されていきます。しかし他の世界ではそうはいかないもどかしさを，今われわれは内外の政治情勢によって思い知らされています。大学の世界でも，過去の歴史の中で権威を確立した大学の存在が，新しい歴史の展開にとって最大の癌となっているようです。この意味でも「21世紀を拓く」という理念のもとに発足した新生の多摩大学には世間の多くの人々の期待が集っています。近い将来，多摩大学も必ずや日本の大学の歴史をぬりかえるにちがいありません。

Some universities enter the world of academics
merely as newcomers, but others enter as innovators.

深夜の遡航

各　位

野　田　一　夫

先日，同年の友人堤清二氏から，新刊『深夜の遡航』（新潮社刊）が贈られてきました。同氏が経営者としての超多忙な時間の合い間に，辻井喬というペンネームで，小説，詩，評論と精力的な執筆活動をつづけていることは，広く知られています。同時に，氏の思索の深さと時に神経質と感じられる程の言語表現へのこだわりからか，書かれたもの，とくに詩と評論が読者にとって難解であることにも定評があります。

今回の作品も評論集ですから，寝ころんで読める類のものではありません。しかし，折しもスポーツも儘ならず，外出もおっくうになりがちな梅雨時，この週末に小生は書斉の机に向ってじっくり『深夜の遡航』に読みふけりました。

この本の中で氏は，東京大学でかつて時間講師をした時の体験をこう書いています。「……初めての講義の日，（教室が静かすぎるので）ふと気づくと学生達が一所懸命にノートを取っているのだ。自分の学生時代の経験では想像もできない光景だった。……学期末試験になって，……自分の頭で理解していないと書けない問題を出してみて，現在の学生の学力の質について，またあらためて認識させられた。彼らは暗記する能力においては抜群であるにもかかわらず，自分流に考えてみる姿勢を持っている者が，きわめて少ないのであった。……」

氏はこの現象を“画一化という名の暴力の支配”という激烈な言葉で表現し，大量生産を基盤とする市場の大衆化にその原因を求めていますが，果してそれほど迂遠なものにあるのでしょうか。小生には，大学の理念喪失，設備の荒廃，教師の無能無気力……といった原因の方がずっと納得できます。多摩大学は識者のこうした“運命論”に挑戦し，自らの知恵と努力で個性的かつ活力に満ちた青年をどしどし世の中に送り出しましょう。

知識と表現力

各　位

野　田　一　夫

知識と表現力（または意思伝達力）とはいわば車の両輪の関係にあります。知識はそれ自身で人生を豊かにしてくれますが，知識の水準にふさわしい表現力がなければ，その知識も，社会的にはほとんど無に等しいといえましょう。したがって，知識の習得が教育にとって重要な目的であるなら，教育は初等から高等に至るにつれて，高度な知識にふさわしい高度な表現力の錬磨を重視せざるをえない筈です。

さて，欧米では人が高等教育を受けたかどうかは，その人に接した時，話の内容と話し方で判然とわかります。しかしわが国のみは，例外です。なぜかといえば，わが国の教育では伝統的に，小・中学校から高校，大学と教育が高度化するにつれて，教える知識は高度化するのに，逆に表現力の錬磨は正規の教科目では次第に軽んじられることになっているからです。

多摩大学ではこの伝統に反し，一般教育で「国語Ⅰ，Ⅱ」と銘打って，正しい現代日本語の書き方と話し方を必須科目とするほか，選択科目として，音楽，絵画，または演技による表現法を設置しておりますが，将来産業界で活躍する人材の養成にとって，この程度では極めて不十分だと小生は考えております。

米国の産業界の士官学校といえる経営学大学院では，程度の差こそあれ，すぐれた表現力の錬磨を学生に求めます。たとえばハーバード・ビジネス・スクールでは「マネジメント・コミュニケーション」と称して表現力の技術および実際的習得を「財務管理」や「マーケティング」等と並べて最も重要な講座にしています。多摩大の卒業生が何よりも表現力において断然他校の卒業生よりも秀でるようになるために，私ども教員一同も努力を傾けますが，各位もどんどん具体的提案なりご示唆を賜れば幸甚です。

開学式典後の2大工事

各　位

野　田　一　夫

去る7月21日午後，多摩大学の「開学記念式典」とともに，記念シンポジウム，キャンパスクルージング，祝賀パーティ等の多彩な行事が催され，何と1,000人になんなんとする多数の来会者でキャンパスは夕刻まで賑わいました。この一連の催しをもって多摩大学は名実ともに発足したともいえますが，実際にはキャンパス内の工事には，まだ未完成のものが残されています。大きいものは2つです。

第1は庭園（グランド）工事です。この用地の下には多摩市民のための上水道施設がつくられており，その施設工事の際の業者の跡始末の悪さから，私どもが校舎建設過程で迷惑をこうむったイワクツキの場所です。いざ建物ができ上ってみると，前面の広大な庭園は排水の悪さから常時田圃のごとき状態を呈し，予定より1メートルほど高く盛り土までしてみましたが，芝はもちろん灌木類を植えることもできません。そこでこの夏休み中に排水工事をやり直し，秋には建物をひきたてるような庭園を完成させたいと念願しています。

第2は，校舎の裏手，すなわち尾根街道側のエントランスおよび駐車場の工事です。本来ここは4月の開校時には完成している筈でしたが，工事全体の遅れとか予算超過の関係から2期工事に廻されたものですが，いざ校舎が完成してしまうと，駐車場（約30台分）を支える人工地盤建設工事等がやりにくくなり，そのため工事費がかかりすぎるということで，目下理事長のゴーサインが保留されています。予算はともかく，尾根街道口が完成しないことには，折角評判の多摩大学の校舎も機能不全といえますから，理事長のご決断によって，何としても今年中には工事を完了させたいものです。

どうか2大工事の完成後，期待して多摩大学をお訪ね下さい。

ネットワーク型研究組織

各　位

中　村　秀一郎

多摩大総研は，幅広い人的ネットワーク形成のために，学外の一流研究者との協力体制を固めるとともに，ユニークな実績を持つシンクタンクとの提携を進め，すでに７つの組織の代表者からご賛同をいただいております。

その７組織とは，わが国唯一の文化領域の基礎研究を目標とする㈱ぴあ総合研究所（代表取締役所長 松井隼），セミナーフォーラムの企画・制作・運営などを担う科学プロダクション㈱コスモピア（社長宮田みどり），マーケティング戦略を，トレンドスポッターという自己規定に基づき，大胆な仮説提起により提案する㈱ブレーン・フォーラム（社長砂川肇），調査から制作までの一貫体制で，コーポレート・コミュニケーションの革新を目指す㈱バス・コーポレーション（社長小熊俊行），流通・サービス業研究では日本を代表する研究機関の一つである流通産業研究所（理事長高丘季昭・所長小山周三），「主婦産業を創造する」という理念のもとに企業社会と生活者社会との接点たる使命観を持つ㈱ドウハウス（社長小野貴邦），女性の立場・感覚による企業への商品開発の提案，２万人を越える女性のオピニオンリーダーと企業と行政を結ぶ㈱ライフカルチュアセンター（社長澤登信子）です（順不同敬称略）。

このような多彩かつ個性ある組織とのネットワーク形成の原則は，それぞれの自立性を前提として，研究上のリーダーシップを問題ないし役割によって交代することであり，その連帯を裏付けるものは，新しい産業社会とそれに対応する企業・組織イメージを共存するところにあるわけであります。このネットワークの内容は，多摩大総研が発展していく過程で，時代環境に応じて大きく変っていくでありましょうが，形成の原則そのものは末長く変化することはないと信じます。

バッハをショパンのように……

各　位

野　田　一　夫

最近読んだ本の中では，中村紘子さんの『チャイコフスキー・コンクール』に最も感銘をおぼえました。クラシック音楽界の人間模様やエピソードの面白さとともに，それらにことかけた彼女の所感や所説のユニークさと暢達きわまりない文章の魅力に脱帽しました。とくに記憶に残るのは，次の指摘です。

- 名だたる難曲を機械のように正確に弾きこなす若い日本人ピアニストは少なからず育っていても，伝統的な"丸暗記主義型"教育の故に，悲しいかな「ステージマナーを含んでの人間的魅力，技術をのりこえて語りかけてくるサムスィング」の芽はつまれてしまい，世界の檜舞台に立てる者は少ない。
- 日本は今や時に月間何百回も外来演奏家を招きうる巨大な音楽マーケットとなったが，鑑賞者の多くはリゴラスな"教養主義"の呪縛から今もって解放されていないために，日本は積極的な意味でのクラシック音楽愛好国とはいえない。
- 日本の演奏家・鑑賞者が絶対視してきたクラシック音楽界の伝統的権威も西欧社会で揺らぎ始めている。権威者の間でこれまで暗黙の大前提であった"音楽的"ということを「"出鱈目"に演奏することの対極概念」と考えると，今日の世界のピアノ界は"良い"教師と教育法の欠乏によって混乱状態を呈し始めており，「なぜバッハをショパンのように弾いていけないのか？」という若い有能なピアニストの問に対し，その道の権威者すら明快な回答ができない。

音楽だけでなく大学の教科目の大部分では，明治以来"西欧的権威"が支配的であり，それを丸暗記した者が優等生，それを何とか身につけた者が"教養人"と呼ばれてきました。その意味で中村さんの本は，21世紀の日本の大学教育のあり方にもいろいろ貴重な示唆を与えてくれます。ご一読をお薦め致します。

憂うべき求人競争

各　位

野　田　一　夫

8月20日は来年度の大学卒業予定者にとって「会社訪問解禁日」です。とはいっても例年のごとく，この解禁は実質的には何の意味もありません。とくに今年は，長期の好況が雇用事情に反映して，大学生は未曾有の売手市場。そのため産業界各社は，就職協定など無視して，春先からあの手この手の戦術を展開，求人戦はすでに概ね峠を越してしまっています。

各社の人事部にとって目下の悩みは，採用の内内定を出した学生が果して本当に入社に応じてくれるかどうかだけで，会社によっては，自社に内内定した学生が他社へのワキ見をしないように，夏休み中に全額自社負担で旅行を実施（社内用語で“拘束旅行”）したりしています。それも一流校はハワイ，二流校は軽井沢，三流校は東京ディズニーランドと差をつけたりするそうです。

何という情けない産業界の実情でしょうか。企業が自分達できめた就職協定を平気で無視したことで，学生達は社会人になる前に，産業界の倫理感の水準を見抜いてしまいます。“拘束旅行”とか“手切れ金”（内内定を断る際に支払われる金）への出費で，いかに経費の使途にうしろ暗いウラがあるかを敏感に嗅ぎとります。青年から正義感と潔癖性を失わせることは最大の反社会的行為だと，産業人は考えないのでしょうか。

昔から「求人難の年に人材乏し」と言われるゆえんは，会社が学生達の倫理感や心構えを完全にスポイルしてしまうからです。外国に比べて日本の大学生活は一般にレジャーへの指向性が異常に目立ち，遊び心を抑えて勉学に励む学生は変人扱いされる程です。大学生としての知識・見識もなくマナーズもたしなみも身についていない若者を見境いもなく大量に採用しつづける企業には，決して明るい未来はないと思うのですが……。

私語をどうする（その一）

各　位

中　村　秀一郎

大学の教室での私語の多さが，ようやく社会的にも問題とされ始めているようです。だが私語をなくすといっても，これにはキメ手がありません。とくに大教室での学生同志のおしゃべりを取締る方法がないからです。

私は学生のマナーよりも先に，まず教師の態度を問題とすべきだと思います。だれも興味を感じない，分りにくく，無味乾燥で情熱なき講義を，おとなしく聞けという方に無理があるからです。

先日伊丹敬之氏の好著『人本主義企業』をめぐる座談会（2020誌近刊）で，正村公宏氏が，学生たちに「わけのわからぬことが書いてあるのを学問と思うな，学問は決して面倒くさいものではない。頭の悪いやつが書いているからそうなるのだ」と教えていると語られていましたが，全く同感です。

「ただし」と氏は付け加えています。「世の中は実際問題として非常に難しい。人間というのは非常に難しく，それを反映した難しさは本物だ」と。

伊丹氏の著書はこの難しさを，明確なコンセプトと鋭い表現で説明することで，21世紀に向けての日本企業の進路を明快に説明していますが，教師がこの意味での「本物」の講義に徹すれば，私語は減るに違いないと思います。

そうなれば，教室の雰囲気を壊す学生は少数となり，これら教師の学生に対する対応も容易となるに違いないと思われます。

多摩大では，聞くに耐えないような講義はないと信じますが，だからといって学生の私語が絶無というわけでもないようです。

私語対策は，まず教師が自分の講義内容を再点検することから始めたいと思いますが，いかがでしょう。

私語をどうする（その二）

各　位

中　村　秀　一　郎

前号で私語対策として，まず講義内容の再点検を提案しましたが，それと同時に講義の仕方を問題としたいと思います。それには，まず教室のインフラストラクチュア整備とでもいうべき前提があります。

私は専修大学で長年マンモス講義（受講生ほぼ1,000人）を担当してきましたが，15年位前，突然答案用紙を配布して，「君たちは講義中，なにをお互いに話しているのか正直に書きなさい」という試みをやったことがあります。答えはなかなか傑作でした。なかでも最も多かったのは，今夜のマージャンのメンツを集める，夏休み旅行プランづくりの2つであったと記憶しています。こうなるのは大教室は友人が集りやすく，とくに雨天の日には教室以外に学生たちが会話の出来る居場所がないからだということを知りました。私は，この時から，私語する学生たちにある種の同情を感じるようになったのです。教室に出たくない学生たちのために，雨天でも十分居場所があるようにしたいというのが，このときからの私の夢となったのです。幸い大きなアリーナ等を持つ多摩大では，これが実現しています。

講義で静かな雰囲気を保つには，教師の姿勢が決定的です。私は学生たちに毎年，1時は1時5分ではないと申渡し，正確に1時に授業を始めてきました。そのためには，ほぼ15分前に教室に入ります。と同時に講義中黒板に書くことは，この時間内に学生たちに手伝ってもらって全部完了しています。遅れて来る学生もほとんどなくなり，600人前後の講義をきわめて平静におこなうことができるようになりました。正確に時間を守らない教師の態度が，私語を誘発する環境をつくり出していると思いますが，いかがでしょう。

TIME IS MORE THAN MONEY

各　位

野　田　一　夫

「タイム　イズ　マネー」という諺は，有名なベンジャミン・フランクリンが彼の自伝の中ではじめて使った言葉で，少年期にあった米国資本主義を象徴する逞しくかつ素朴な事業家魂を，この言葉以上に簡潔に表現することはできません。近代資本主義成立の鍵を学問的に徹底して解明しつくそうとしたかのマックス・ウェーバーでさえも，その労作（大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』，岩波文庫）の中で，この自伝を最重要な文献として，何度も引用しています。

たしかに，フランクリンが自伝を書いた18世紀末，いや，20世紀もついさき頃まで，いわゆる“工業化社会”のもとで，大部分の勤労者の仕事の成果は，基本的に時間の関数でした。つまり，人はふつう筋肉・技能型労働に従事していたからです。しかし21世紀に向って，時代ははっきりと“情報化”社会の様相を呈しはじめています。

情報化社会の決定的特徴のひとつは，働らく人の多くが頭脳・知識型労働に従事するようになることです。この労働は筋肉・技能型と対照的に，成果が時間の関数でもなければ，定められた職場でしかあがらないものでもなくなったことです。勤労者なら，出勤日に職場に出て一定時間拘束されて何かをやったからといって，必らずしも勤め先に対して何かを寄与したことにならないわけです。

こうして「タイム　イズ　マネー」はも早意味をなさなくなりつつあります。しかし，依然として貸借も売買もそして貯蓄もきかぬ“時”という資源は，万人に１日24時間均等に配分されています。だからこそ，頭脳・知識型労働に従事する人にとっての新らしい諺は，実はTIME IS MORE THAN MONEY なのです。

TIMIS－23　　平成元年9月14日

TIMIS会員600名

各　位

野　田　一　夫

皆様のご協力にて TIMIS 会員も着実に増加をつづけ，すでに600名に達しようとしています。既設大学における“同窓会”とか，小・中・高等学校における“父母会”のような組織のない多摩大学としては，TIMIS 会が本学の活動に対し日常的関心と理解を頂いている方々の唯一の組織です。

会員の増加につれて，毎号のご返信の数も増加し，ご感想，ご激励，またご提言等には常に感謝し，感銘致しております。それぞれのご返信に対しご挨拶を致すべく，つとめて電話なぞ差上げるように致しておりますが，それも完全には行届かずつい失礼のままにうちすぎることのありますこと，この場を借りてお詫び申し上げます。

多摩大学も開学後早くも半年，建物・設備等には幸い大きな支障はなく，また講義は「年間講義案」に沿って実に整然と行われておりますが，ただグランド（庭園）だけは予想外の排水不良のため一時は水田の状態を呈し，芝仕上げはもちろん灌木類の植樹もままならぬままにて，関係者一同散々頭をかかえさせられました。

しかし，夏期休暇も正に終らんとする9月上旬になって，東京都および住宅都市整備公団の正式了承が得られるとともに，当学園本部と施工者（熊谷組）との工事費に関する合意も成立して，排水工事はこの程やっと着工されました。今月末の工事完了とともに，芝の種播きが行われ，冬口までには何とか多摩大学もようやく体面を整えることができると信じます。

グランド工事の完了をまって公約通り大学を広く市民の方々に開放し，目下計画中のいろいろな催しを逐次実施に移して参りたいと考えております。TIMIS 会員の方々には真先にご連絡させて頂きますので，期待をもってお待ち下さい。

シンガポールの教訓

各　位

野　田　一　夫

今週月曜日（18日）の夜東京プリンスホテルで開催された「三宅和助事務所開設披露パーティ」は，各界からの出席者約500名で大変な賑わいでした。欠席者から寄せられた多数のメッセージの中から唯一会場で披露されたのはリー・クアン・ユー氏（シンガポール共和国首相）のもので，三宅氏が大使時代に深めたリー氏との友情を改めて私達に印象づけてくれました。

ご承知のごとくシンガポールは，過去20年間世界で最も劇的な経済的成功を収めた国で，その1人当りGNPはアジアで今や日本に次ぐ不動の地位を占めている上に，市民生活における秩序・安全・清潔という点と，“ガーデン・シティ”というキャッチ・フレーズにふさわしい緑したたる美しい都市景観とによって，世界の観光客を集めています。

そのシンガポールは国土面積わずか618km^2弱（ほぼ淡路島程度），その人口260万人強（淡路島はわずか16万人），しかも1965年にマレイシア連邦から独立して間もない新生国家にすぎません。私自身の体験でも，1970年頃のシンガポールというのは，未来の繁栄を想像させてくれそうな何物もないれっきとした弱小後進国の1つでした。

今日のシンガポールは，経済的にも政治的にも世界の強国の1つです。小国シンガポールを強国シンガポールへと短期間に変貌させた最大の原因が建国以来の首相リー氏の見識と指導力であったことは，内外の識者の等しく認めるところです。大国が強国となる場合と違い，小国が強国になるにはそれなりのリーダーシップと戦略的思考を必要とします。リー氏のような天才の出現は望むべくもありませんが，小さい大学である多摩大学の教職員は衆知を集め，国内的にはもとより国際的にも影響力のある大学をつくりあげようではありませんか。

パールマンを聴きながら

各　位

野　田　一　夫

イツァーク・パールマンが2年ぶりに来日中です。ヴァイオリニストとして彼が語られる時，演奏中の表情やちょっとしたしぐさも加わって，彼の音楽が会場内にかもし出すいいようもない明るさとともに，必らず「幼い頃小児麻痺を患った不自由な身体」が強調されます。先週その彼の演奏をサントリー・ホールの一隅で聴きながら，ふと想い出したことがあります。

もう20年も昔のこと，私が講義中の教室に遅れて入って来た学生の歩き方が気にくわなかったので，例の大声で注意しました。「青年らしいちゃんとした歩き方をしろ！」「すみません。ちょっと足がわるいもんですから……」「なに足が？　頭でなくてよかったなあ……」といったやりとりがあったようです。

というのは，そんなやりとりなどすっかり忘れてしまっていた翌々年の卒業式の朝，研究室にいた私のところへ，日頃見かけぬ学生が不自由な足をひきずって訪ねて来ました。そして卒業の礼を述べて言ったのです。「先生おぼえておられますか？いつか教室で先生にどなられたAです。ものごころついて以来人前で大声で足のことを言われたのはあの時が始めてでした。しかし，先生の一言は私にとってこの上もない激励でした。あれ以来私は，頭のわるい不幸な人達が大勢いるんだと考え，一生懸命勉強することにしました。幸い良い就職先もきまりました。先生のおかげです。ありがとうございました」と。

「そうか，よかったなあ，頑張れよ」と顔で笑いながら，私の心は動転していました。あの日あの教室であの学生をどなった時，私はてっきり彼がスポーツか何かで足を捻挫したぐらいにしか思っていなかったのです。受取り方次第では，私の一言は相手の心にとり返しのつかない傷を与えたかも知れません。パールマンの奏でる伸びやかなブラームスのメロディーに浸りながら，私はこの想い出に思わず冷や汗を覚えた次第です。

“高齢化”と教育

名　誉

野　田　一　夫

消費税とのからみで“高齢化”が論じられないことはありませんが，どうしたことか，教育とのからみで“高齢化”が論じられたことはありません。わが国では，小・中・高等学校に比し大学教員の高齢化は深刻で，一部を除いて着々進行し，多くの大学では“臨界点”に達しています。“臨界点”という表現が適当かどうかわかりませんが，小生は教員の平均年齢60歳が健全な大学教育を実施できる限界と考えています。誤解のないよう強調させて頂きますが，小生は60歳が個人として大学生の教育を健全に行なえる限界だと主張しているのではありません。老化の個人差はひどく大きく，70歳以上でも十分教壇で名講義をする先輩を小生は数多く知っています。

しかし，そういう方々ですら，どこかで教育者としての限界が必らず来るからこそ，どこの大学でも，一律に教授の定年を定めているわけです。ましてや，大学教授も教師である以上，毎週の講義やセミナーだけでなく，時あるごとに学生に接して肉体的には苦労を共にし合い，精神的には歓びとか感激を分ち合う必要もあるとなると，年齢的要素は無視できないのです。

多摩大学は当面教員の定年を70歳としておりますが，平均年齢は現在のところほぼ50歳で，小生の理想（45歳）をかなり上廻っています。現在の多摩大学の教員構成は質的に文句はありませんから，このまま当分推移していくことを期待しますが，他方本学教員の平均年齢は知らぬ間に毎年“臨界点”に近づいていくことも，決して忘れてはなりません。当面の解決策は２つです。第１は，大学院を設置し，比較的高齢の教員でその教育を担当すること。第２は，新学部ないし学科を設置し，比較的若い教員を迎え入れること。この２つはどちらも，多摩大学にとって早期に実現すべき最重要プロジェクトと信じます。

学長の仕事

各　位

野　田　一　夫

「学長になられてお忙しいでしょう。毎日大学へ行かれるのですか？」「週２回ぐらいでしょうか」「えっ，週２日ですか？」「いや，週２回です。学長室に30分ぐらい居て，すぐ帰ってしまうこともありますから……」「じゃ，それほどお忙しくはないんですね……」「いや結構忙しいですよ」「……」，こんな会話を４月以来何十回くりかえしたでしょうか。

学長の仕事はもちろん大学によって異なる筈です。同じ私立大学でも多摩大学の経営上の特徴は①規模が小さく（収容定員160名），構成が単純（１学部１学科のみ）なこと，②経営体として独立していないこと，③教・職員とも有能でヤル気のある人材が揃っており，しかも教員間および教・職員間の人間関係が極めてよい（日本の大学ではひどく珍らしい）こと，の３つで，これらを前提として小生は，学長の仕事を次のように割り切っています。

学長として学内および学園関係の公式・非公式行事・催事で求められる役割を果したり，マスコミとか地域社会に対して望ましい対応に努めることは当然ですが，それら以外では，少くとも３つの重要な仕事のみを己に課しています。すなわち，①本学の存在と特色と理想を可能なかぎり多くの人々に認識してもらうこと，②本学の将来構想実現のための布石を各方面に重点的に打っておくこと，③本学の中・長期計画（施設・設備の拡充，大学院の設置，新学部ないし学科の増設，外国の大学・研究機関との提携……）を継続的に推進していくことです。

従って，ほぼ毎日都心に居て，いろいろな人と直接会ったり，会議・会合に出たり，電話を通したりして会話しつつ，たのんだり，意見を出したり求めたり，説得したり……することのやたらに多いのが，本学学長の当面の仕事といえましょうか。

高齢しか遺しえぬもの

各　位

野　田　一　夫

先々回の「高齢化と教育」に対しては読者の方々の反応が意外に大きく，教育の年齢的限界に関しては，今少しく小生の意見を補足させて頂く必要を感じました。

人によって違いはありましょうが，小生は若い頃から年老いることに対しては，不安よりは期待に近い気持を抱きつづけて今日に至りました。それは幸い常に周辺に「年をとったらああいうふうに生きたい」という敬意を感じさせる人生の先輩が何人もおられたからです。そういった方々は，決して地位とか権力とか富といったものを保持していたからでなく，職業は異なれ現役中ひとつの信念をもって生きて来た人のみが身につけた人生智，風格，処世感，生きざま……といった人間的属性によって，後輩である小生の心を魅きつけたのです。

有名な文学作品から例をとれば，すぐ心に浮ぶのは，ヘミングウェイの『老人と海』の主人公サンチャゴです。外面からみれば何もかも老けこんでいるのに眼だけは不屈な輝きをみなぎらせているサンチャゴは，少年マノーリンにとっては“世界一の漁師”です。終日一匹の魚すらとれない日々が何十日とつづいてもグチひとつこぼさず，翌日はまた準備万端を整えて海へ漕ぎ出していく老人の姿に，少年は感激します。

不漁の84日の次の日，久しぶりに鉤にかかった超大カジキマグロを舟にくくりつけるまで，老人はたった独りで2日2晩，傷だらけになって闘います。こうしてやっと我が物とした獲物は，帰路それを狙うアオザメの群に何回となく襲われ，老人は疲労困憊した身体を鞭打ち，勇猛心を奮い起こして再び闘いますが，港に着くまでに獲物はくいちぎられて遂に頭と背骨と尻尾だけになります。闘い疲れて家に帰りつき，昏昏と眠りつづける老人の姿に，少年は涙を流しつづけます。老人は何と素晴らしいものを少年の心に遺したことでしょうか……。

Rapport通算100号
― 会員名簿作成へのご協力のお願い ―

各　位

野　田　一　夫

現在毎週金曜日各位にお送りさせて頂いておりますTIMISは，ご承知のごとく，多摩大学設立までの1年4カ月間関係者の方々に毎週火曜日にお送りしつづけたハガキ通信Rapport（『多摩大学設立の歩み』と題した小冊子として集成ずみ）をひき継いだものです。Rapportは結局71号で終結しましたから，今回TIMIS 29号は，Rapport通算で丁度100号という，キリのよい回を重ねたことになります。

しかし，同じウィークリーのハガキ通信ですが，Rapportは多摩大学の設立責任者であった小生が関係者の方々に対して状況報告，構想や理念，提案や所感を書きつづったものであったのに対して，TIMISは新設なった多摩大学の教学責任者である小生と中村秀一郎氏が，関係者をふくめ広く多摩大学に関心を寄せて下さる方々に対して，多かれ少なかれ教育にからんだテーマのessayを連続執筆しているものとご理解下さい。

Rapportが最終段階までに250名弱の読者に達したのに対して，TIMISは有料会員制をとらせて頂いたのに，すでに600名を超す方々が毎週読んで下さっていることは，執筆者であるわれわれにとって非常な喜びであるとともに，一入重い責任を感ぜずにおれません。同窓会も父母会もない多摩大学にとって，私共は，TIMIS会員のみが唯一最大の応援団と心得ております。

したがって，今後多摩大学で行う行事・催事や，多摩大学関連の主だったニュースはまずTIMIS会員にお知らせ致したいと思いますし，また，できますれば会員相互間の交流の輪も拡げて参りたいと念願致します。つきましては名簿作成のため，この往復ハガキの返信用に必要事項ご記入の上ご投函下さいますよう，是非ともお願い申し上げる次第です。

游　於　藝

各　位

野　田　一　夫

還暦を過ぎたら残された人生を1日1日よく嚙みしめて味わい，親しい友人・知人とのつき合いも，映画・演劇・音楽の観（鑑）賞も，読書も旅もせかされず心ゆくまで楽しみたいというのが，若い頃からの小生の念願でした。62歳の現在，心ならずもこの念願は十分果されたとはいえませんが，それでも以前に比べれば，幸い格段に納得のいく毎日を過ごしています。

30歳前後から関心の拡がりとともに多方面にわたる仕事を一手に引きうけ，馬車馬のように働らいてきたためか，オフィスのある都心から遠いところへ仕事で行くのが嫌いで，たまに出張しても"トンボ帰り"が普通でしたが，この頃は時間の許す限り地方での講演や会合も引きうけ，しかも仕事のあとはその地その地のよき方々と一夕旨酒をくみ交し，珍味を賞でながら歓談に時を忘れ，明けては開発地の状況を視察したり名所旧蹟を訪ねたりしてから，ゆっくり帰京しています。

先日は水戸での会議のあと，かねてから一度訪ねたいと思っていた弘道館を見学しました。江戸時代後期に全国に続々つくられた藩校の中で規模・内容とも随一と称せられただけに，現存する正門，正庁等の建物の風格が何よりもまず人々を魅きつけます。当時は敷地が54,000坪（多摩大の敷地の5倍以上）あったと言われますが，建物に使われた素材の立派さ，高い天井，広い廊下，庭園の優美なたたずまい……に感銘を受けました。しかしもっとも感銘を受けたのは，弘道館の教育の理念「游於藝（アソブ）」でした。これは設立者徳川斉昭（烈公）が論語の中から選んだもので，「悠々楽しみつつ学ぶ」という意味だそうです。広大な敷地内に堂々たる建物群を配し，全国から賢人を師として迎え，前途有為の青年におおらかな教育を施した先人には，ただただ頭が下がりました。史上空前の"豊かさ"を誇る現在の日本の指導者にはどんな教育理念があるのでしょうか。

読　書　の　秋

各　位

野　田　一　夫

最近，吉本ばななの随筆集を読んでいて，ひどく自分自身を反省させられました。これまで彼女の小説をいくつか読んで，私は彼女のことを，才気にあふれるハネアガリの新人類作家だと勝手に想像していたのです。いや彼女への偏見はその作品に接する前に私の心の中につくられていたに違いありません。吉本隆明の娘であることとか，“ばなな”というふざけた名前にふさわしい人をくったメガネの愛用とか，文壇への派手な登場の仕方……によってです。

ある随筆の中で彼女は，『TUGUMI』執筆中の苦労を卒直に語っています。雑誌への連載分の構想を練りに練り，丹念にメモノートをつくり，原稿を何回も書き改め，しかも締切りに追われる……苦労についてです。私はこの作品を“コワイモノ知らず”の彼女が才能にまかせていわばナグリ書きしたものと信じていました。もちろん，執筆の苦労を知って読み直したところで，私と彼女との感覚や嗜好の相違が解消してしまうわけではありませんが，しかし「山本周五郎賞」の審査委員である年長の作家たちが，多分そうした相違を感じつつもこの作品を高く評価したことに，私は改めて安心と敬意を感じました。

別の随筆の中で彼女が「私が父に言葉でなく最も強く教えられたことは文学でも思想でもなく，例えば『大勢で飲む時はその場の最低の人間（注，最もへりくだった態度を守れる人間の意）になれ』，ということだ」と書いているのを読んで，私は彼女の父親，つまり吉本隆明という思想家にまで偏見を，しかも若い頃以来実に長いこと抱きつづけてきたのではないか，という反省に駆られざるをえませんでした。「人間にとって偏見は不可避」であればこそ，「教育者にとって偏見は禁物である」という金言がしみじみ心に感じられる“読書の秋”です。

横山寛彰君の死を悼む

各　位

野　田　一　夫

13日夕刻オーストラリアから帰国し，成田から東京へ向う車の中へかかってきた電話でいきなり伝えられたのは，何と「学生横山寛彰君死す」の悲しい報せでした。先週木曜オートバイで帰宅の途中転倒，頭部を強打して病院にかつぎこまれ，4日後のその日の朝，遂に帰らぬ人となったとのこと……。しばし絶句しつつ，いいようのない無念さにひたりました。

私共教職員の理想を托した多摩大学第一期生，そのわずか210名のうちのかけがえのない1人，しかも誰よりも学園生活に馴染み，あらゆる催しに積極的に参加し，天賦の明朗闊達さでクラスメートの誰からも愛されたという彼を突然失ってしまうとは……。彼の自宅のあるという「佐倉」のインターチェンジを車が通り過ぎると，何かの因縁か曇り空からしとしとと雨が降りはじめ，暗い私の心をより一層暗くしました。

翌日，この冬一番の木枯しが吹いた日の午後，ご自宅に近い妙傳寺で行われた告別式に井上一郎教授と一緒に参列しました。ご両親にお悔みと励ましの言葉でもと考えていたのですが，お焼香後はお顔すら見るにしのびず，逃げるように帰ってきました。25年前幼ない長女を亡くした時の辛かった想い出が胸に蘇り，出会ったたくさんの多摩大の学生諸君に対しても，いつものように声をかける心の余裕すらなかったのです。

娘の死をいつまでも悔みつづけた妻を叱りながら，実は私も心では娘の死をいつまでも悔みつづけたものでした。「散る桜，残る桜も散る桜」という歌の意味を頭では十二分に納得しながら，心ではなお，開こうとする花びらが色あせた花びらより先に散る不条理にこだわるのが，人間というものでしょうか。

謹んで寛彰君のご冥福をお祈りするとともに，時の流れが，ご両親の悲しみを少しづつ癒してくれることを信じるのみです。

現代の若者たち

各　位

野　田　一　夫

先週土曜日，横山寛彰君のご両親が揃ってわざわざ多摩大学にご挨拶に来られました。折悪しく小生は不在で，上東事務局長がお迎え致しましたが，井上教授と小生との告別式への参列に対し誠に痛み入るお礼を申述べられたあと，「……わずか半年でしたが，寛彰が多摩大学で学生生活を送れたことは，彼の短い人生を本当に充実したものにしてくれました……」とおっしゃったとのこと，小生はそのお言葉を伝え伺って，忝けなさに思わず胸が一杯になりました。

寛彰君が事故で入院していた4日間，同級生は次々に見舞に訪れたことはもちろん，女子学生は交代で徹夜で寛彰君の病床につき添ったそうです。寛彰君が同級生の間でいかに人気があったかを物語るとともに，同級生たちがいかに温かい友情の輪で結ばれているかを私共に示唆してくれた事実ではないでしょうか。他人への温かい思いやりは，能力への自信に基づく"エリート意識"よりも遙かに大切な人間的属性です。

その意味で，今回の横山寛彰君の死は，同君のご両親はじめご一族の方々はもちろん，彼を心から愛した同級生諸君や私共教職員一同にとって大きな悲劇的出来事ではありましたが，多摩大学のためには，末長く語り伝えられるかずかずの美談，また継承されていくべき貴重な精神を遺してくれました。

新生多摩大学の伝統は必らずこうして形成されていく筈です。マスコミがつくり上げた現代の大学生像は，無気力で，自己本位で，軽佻浮薄な若者たちです。だが実はそれらは現代のマスコミそのものの特性であって，よき教育環境下にある大学生の多くは，積極性に富み，自己犠牲をいとわず，温かい気配りのできる若者として育っています。21世紀は正にこうした若者たちによって力強く拓かれていくに違いありません。

"ブーム"の中で……

各　位

野　田　一　夫

小生は好奇心旺盛でかつ人間好きなためにいろいろな会に入っていますが，それらの中で最も気にいっているもののひとつに「オーストリアのワインと文化を愛する会」があります。『会議は踊る』でその名も懐しいメッテルニヒ侯爵が会長ですが，日本代表は敬愛する先輩鳥井道夫氏，構成メンバーもよく企画も凝っているので，数カ月ごとの会合がたのしみです。

27日に開かれた11月例会では，今年収穫されたブドウでつくられたワインの新酒（ウィーンでは"ホイリガー"とよばれています）の味を良き仲間と賞でながら，わが国が生んだ世界的オペラ歌手白石敬子さんのオーストリア歌曲に酔いしれました。帰路，夜寒の大気をむしろ快よく肌に感じながら，2週間前日本全体を巻き込んだかの如きあの常軌を逸した"ボージョレー・ヌーボー"騒ぎのことを想い起し，「酒は静かに飲むべかりけり」（若山牧水）と思わず口ずさんでしまいました。

あの騒ぎに典型的にみられるように，われわれ日本人の外国文化・文物の摂取の仕方にはとかく偏りがあり，かつ"ブーム"と称する熱狂劇がつきもののようです。"ホイリガー"には全然無関心な人々でも，今やウィーンといえば必らず眼の色が変わります。池袋のセゾン美術館では「ウィーン世紀末 ― クリムト，シーレとその時代」が12月5日で幕を閉じますが，今月は佐藤明氏の写真展「ウィーン幻想」が銀座のエスパース・プランタンで，オペレッタ「ウィーン物語」の公演が日暮里のサニーホールでと，ブームはまだ続きそうです。

教育方針のひとつの柱を"国際性"に置いている多摩大学としては，「新酒といえば"ボージョレー・ヌーボー"，オーストリアといえば"世紀末のウィーン"」といったブームには動かされにくく，しかも海外諸国に対し広い視野と深い見識を備えた人材をぞくぞく輩出したいものです。

ことばの重み

各　位

野　田　一　夫

今週見たテレビ番組の中で最も印象に残ったのは，劇作家原千代海氏のお話し（ＮＨＫ総合「日曜インタビュー」）でした。同氏は現在82歳ですが，このほどイプセンの全作品をわが国ではじめて原語であるノルウェー語から訳出するという大仕事を完了されました。訳業は未来社より『イプセン戯曲全集』（全５巻）としてすでに４巻刊行されています。

原氏は何と還暦を過ぎてからノルウェー語の勉強に志し，ノルウェー語でイプセンを読んでみて，これまで日本に紹介されたイプセンの作品が誤りに満ち，またイプセンの真意をまげて伝えていることを始めて知ったとのこと，実にショックでした。私たちが若い頃感激して接したイプセンの作品（本であれ舞台であれ）がイプセンの本質から遠く離れていたとなると，これはやはり考えさせられてしまいませんか。

かといって原氏の語り口には『もうひとつの万葉集』や『欠陥英和辞典の研究』の著者のように既成の権威に挑戦するといったツッパリは全然感じられません。「岸田国士先生の弟子の中で田中千禾夫さんとか内村直也さんが次々に立派な仕事をしていくのに，私はこれといった作品もなかったことを久しく苦にしてきました……」という卒直謙虚な言い方が原氏の人柄を端的に示していましたが，他方「戯曲を“台本”などと呼ぶのは嘆かわしい。イプセンも岸田先生もことばを殊のほか大切にしていたのに，最近の俳優は“動き”のみを追って，“ことば”を忘れてしまった……」と厳しいご指摘もありました。

因みに，多摩大学はわが国の大学ではじめて，一般教育の中で“話し方”（国語Ⅰ），“書き方”（国語Ⅱ）を必須科目とし，「音楽表現」，「絵画表現」および「演技表現」を選択科目にしています。社会人として“表現”とくに言語表現がいかに重要かを，私共は十二分に認識しているつもりです。

“麦畑”現象

各　位

野　田　一　夫

早や師走も半ばを過ぎ，いつしか年の瀬。年の瀬といえば忘年会，忘年会といえば，当節は好むと好まざるにかかわらずカラオケ，そしてカラオケといえば，今年のヒット曲の極めつけは「麦畑」だといわれています。何しろ作詞・作曲は榎戸若子なる全くの無名人である上に，レコード会社4社からほとんど相前後して発売された作品の中には，わざと歌手の名をふせたものがあったりしたことも話題を呼び，発売ソフト（ＣＤ，テープ，レコード）の数は50万枚に達する勢いです。

歌詞は，農村に住む若い男女の健康にして素朴な求愛のやりとり，オリジナルは東北弁ですが博多弁，名古屋弁等のヴァージョンもつくられており，デュエットをより楽しませます。曲は誠に軽快で歯切れのよいリズムで終始し，キィーをＧマイナーに落とせば，誰でもすぐ歌えます。この田舎のにおいのプンプンする歌が，六本木や新宿や渋谷で，しかも学生達にまで圧倒的に人気を拍しているのはどうしてでしょうか。単に“おもしろみ”とか“場うけ”からくる年末の一過性現象なのかもしれませんが，何となく，もっともらしいリクツもつけてみたい気がします。たとえば次のような……。

経済の高度成長のあとに思いもかけぬ“円高”効果が重なって，日本人は気がついたら世界一の金持ちになっていました。カネに多少の余裕ができたのでやれ外食，やれ買物，やれ旅行，やれスポーツとここ数年“豊かさ”を猛烈に求めてみたのですが，結局この国の未だに貧しい社会資本と物価高のもとでは豊かさの“実感”に酔いしれるなどということは到底不可能だと，“孤独な大衆”はやっと気づき始めたようです。大都会の虚飾の中にあって空ろになり勝ちな心の底に蘇ってきた“素朴で暖かみに充ちた生活”への願望，「麦畑」の人気は正にこの願望に支えられているといえませんか。

驚いたことにＵＦＯが……

各　位

野　田　一　夫

久方ぶりに横尾忠則さんが「新作版画展」を開きました。彼は感性・技術・言語表現力の３つの才を兼ね備えた希有な芸術家で，私が将来多摩大学の「絵画表現論」の講師にとひそかに狙っている１人です。十年以上昔，彼を私に紹介してくれた阿久悠さんが，例のキマジメな顔で私の耳もとにこう囁いたことを，今も懐しく憶えています。「……彼がＵＦＯに凝っていることはご存知でしょうが，『ＵＦＯって本当に存在するんですか』といった質問をすると，彼はプィと席をたってしまいますから注意して下さいね……」と。

その後横尾さんとひどく親しくなって　遂には２人で「ピカソ展」を観にニューヨークに旅までしましたが，阿久さんの注意がきいてか私はこれまで，横尾さんからＵＦＯ論を思う存分聞き出していません。そこで今後にそなえてＵＦＯの勉強をしておこうと，個展をみたあと「八重洲ブックセンター」へ立寄ってみました。ひょっとすると横尾さんのＵＦＯの本でもあるのかと思っていたのです。が，いや驚きました。折からＵＦＯのブックフェアが開催されており，何と書棚に所狭しと並べられた50冊を超す本の前に，大勢の人がたかっていたからです。

私の知らない間にわが国では，ＵＦＯに関してはかくもあらゆる情報，分析，推理……が本となって出版されていたのです。科学技術の成果がわれわれの日常生活のすみずみまでを潤おしている現代では，人々の好奇心を心底からそそる謎とか未知の世界はほとんど姿を消してしまったのに，人々の心は一向に安らかにはならないとみえて，予言とか霊界とか超能力……に関する本も静かなブームを呼んでいるようです。ただ愉快なことに，ＵＦＯだけはさすがに「自然科学書」のフロアで取扱われています。横尾さんはきっと当然という顔をするでしょうが。

“利休の年”逝く

各　位

野　田　一　夫

恐らく人には誰でも，その人にとって最も興味をもちつづける歴史上の人物があると思います。私にとって，そういった人物の一人は千利休です。彼と私とは，性格，人生観，生きた時代の環境……等々すべて似ていませんが，ひとつだけ似ている点があります。それは，選んだ職業（彼にとって茶道，私にとって学問）の分野の伝統的権威に強く疑問を感じ，進んで時代の要請にふさわしい新しい道を模索したことだと思います。

ところで何かにつけてこの国では，そうした人間に対して周辺がかける社会的圧力の陰湿さ（嫉妬，中傷，謀略……）は，昔も今もほとんど違っていないように思えます。利休は結局その犠牲となって苦しみ，最後には切腹して果てたわけです。もとより私は私自身の才能なり実績なりを利休のそれと比較しようなどという滅相なことを考えているわけではありませんが，それでも，これまでいろいろな事を創めた際の鬱陶しさやしんどさは相当なものでした。

さて，今年は利休の当り年，書店には各種の利休ものがわんさと並び，何と映画界では，利休を描いた作品が２本も公開されました。私は２本とも観賞しましたが，利久と彼をとりまく人々の描き方は異なれ何れも彼の死のナゾに焦点を当てており，利休の無言の死が社会の陰湿さに対する抗議であったことを示唆してくれます。異常な好景気と異常な事件が錯綜する世紀末を迎えて，われわれの多くは多分未来に対し期待よりは不安の念を潜在的に抱いており，それが自然に利久の生きざまに対する関心を呼びおこしたに違いありません。大いなる“国際化”を目ざす日本の社会で，新世紀に向ってこの伝統的陰湿さが今後少しづつでも払拭されていくことを信じます。

来年が皆々様にとってよい年でありますように。

新年は「卒業」から

各　位

野　田　一　夫

明けましておめでとうございます。

多摩大学にとっては，始めての新年ですが，開学後９カ月をふり返ると，全てが順調に推移し，新設大学としてはそれなりに評価も知名度も高まってきたことを喜んでおります。「小さい大学大きい理想」をキャッチフレーズに発足した多摩大学の評価と知名度を支えていくものは，まず優秀な教職員，ついで個性的教科内容，第３に充実した設備です。実はこれら３つの実現は，多摩大学が時代の要請に応えて，大学の活動を広く社会に開放することを意図した結果です。ただし初年度は開学直後の忙しさで，大学の開放はほとんど実行に移されませんでした。したがって今年度の多摩大学の課題は，倍増する学生に対する正規の教育の拡充と大学の開放です。大学の開放には継続的事業としては大別して，社会人向け講座と施設（アリーナ，図書館，食堂等）の利用制度が考えられますが，それら以外でも本学は，所期の理念にかなうかぎりあらゆる機会を捉えて“大学開放”に心掛けていきたいと思っています。

たとえば，来週（12日）金曜日の午後９時から，ＴＢＳ系の連続テレビドラマ「卒業」が３カ月間にわたって毎週放送されますが，その舞台は多摩大学です。人気女優中山美穂が主演する“学園もの”だけに放送会社がとくに力を入れている番組ですが，関係者がいろいろな大学を物色したあげく多摩大学に白羽の矢が当ってご依頼があり，私どもは番組の内容をよく承って応諾したものです。ただし多摩大学の姿は架空の女子短大として画面に現われますし，脚本を読むと毎回大学以外での場面が過半を占めています。しかし，とにかく「協力　多摩大学」の名で本学の建物やいろいろな施設が毎週全国に紹介されるのは，実に喜ばしいことだと考えております。

ＫＡＳＴの誕生

各　位

中　村　秀一郎

日本の大学改革は実行の時代に入っています。わが多摩大学は，現在の大学制度の枠組の中で革新の道を拓きつつあるわけですが，大学制度の枠外で高等教育の革新に挑戦する試みとしては，昨年７月に発足した財神奈川科学技術アカデミー(Kanagawa Academy of Science & Technology，略称 ＫＡＳＴ)があります。

神奈川県科学技術政策委員会がＫＡＳＴの設立を長洲知事に提言したのは，昭和62年10月のことですが，かくも短期間でその提言が実現をみたのは，知事の強力なリーダーシップのもと，同県には他県に例をみない科学技術政策への取りくみがあったためです。いずれにせよ，この委員会の副委員長として提言の作成にたずさわってきた者の１人として，私にはとくに感慨深いものがあります。

ＫＡＳＴの目的は，民間ベースでは実行困難な創造型研究開発と取組み，その成果によって，先進県神奈川の21世紀に向けての技術革新を主導することにあります。このためＫＡＳＴでは，終身雇用・年功序列型の組織を排し，有能な研究者の活動を積極的に支援する方式を採用しています。これらはすべて，既成の理工系大学ではなく，科学技術庁　新技術事業団の創造科学技術推進事業（略称 ＥＲＡＴＯ）に範をとったものです。

一部マスコミで，理工系県立大学院と紹介されたように，ＫＡＳＴは産・学・公連繋による社会人を対象とした高度な研究教育機関で，その初代理事長は斎藤進六氏が就任されました。氏は前記委員会の委員長であるとともに，東工大，長岡技術科学大の前学長でもあります。したがって，既成大学の限界を身をもって体験されている氏のもとで，ＫＡＳＴが既成大学のなしえないさまざまな革新をどのように実現していくかは，多くの人々の注目するところです。

再びＫＡＳＴ

各　位

中　村　秀　一　郎

高度な教育と研究を目的とする機関として，既成の大学とＫＡＳＴを比較した場合，ＫＡＳＴの特徴は何といっても，社会に対して大きく門戸が開かれていることです。

まず，財団の基本方針を決定する理事会は，政府関係機関の理事長，大・中堅企業の経営者，大学の研究者など三十数名によって構成されています。また，財団の研究教育活動に協力するアドバイザリーボードには，江崎玲於奈，福井謙一，Ｆ.Ｒ.ハートレー，Ｇ.ベッツオ，金基衛といったノーベル賞級の学者が名を連ねています。さらに財団の事業の基本構想・事業計画については，理事長は外部の専門家によって構成される企画委員会の意見を聞く仕組みになっており，研究開発最前線の情報，科学技術に対する一般社会のニーズ等に精通しているとともに，研究組織運営についての現代的なノウハウをもつ専門家が委員を引きうけ，委員長である私は，この方々の意見のまとめ役として財団運営にも参加しています。

一方，ＫＡＳＴの柱となる研究室は，それぞれの分野のビッグネームを顧問，第一線研究者を室長とし，専任研究員と大学・企業の協力研究者から構成されますが，そこには企業等からＯＲＴ（on the research training）を希望する研究生を10名程度受入れます。終身雇用制の海の中で島ともいうべき，契約制にもとずく流動型研究システムの前途を危ぶむ向きもありますが，新技術事業団のERATOでも参加専任研究員がプロジェクト終了後は，就職先に困るどころか逆に引く手あまたというのが実態なのです。

なお，ＫＡＳＴの専任研究員の報酬制度とか，教育部門の非常勤講師の待遇改善方式には，わが多摩大が独自に発案し，日本で最初に実施に移した試み等が積極的にとり入れられていることも，併せてご報告させて頂きます。

技術と技能

各　位

中　村　秀　一　郎

アジアＮＩＥＳの日本産業への追いあげが加速しているといわれます。たしかに量産型の製造業での生産設備のレベルはほぼ同じといったケースも多くなっているようです。しかし私は，高付加価値先端産業についてはＮＩＥＳと日本の格差は開くとみています。

たとえばミクロン単位の高精度，高速加工のための金型の生産現場は，トップレベルのＮＣ工作機械を整備しているのは当然ですが，これに加えて真円度・三次元測定・デジタル顕微鏡といった測定・検査機器が生産機材として使われ，さらに恒温・恒湿・防振・防塵といった生産環境が完璧に整えられているのです。しかもその上で製品の最終仕上げは，高度な熟練技能者の手作業がキメ手となっているのです。問題はこのような技能者の高齢化が進み，その後継者養成のためのシステムが全く未確立なことなのです。

事態はファッションの世界でも全く同じです。“このままでは日本のファッションはダメになる”というのが山本耀司さんの持論です。デザイナーになりたいひとはいくらでもいるが，ものづくりに徹しようとする人間，パタンナー・グレーダー，そしてしっかり針の持てる人は，きわめて少なくなっているからです（山本・中村対談“ものづくりと人のスキル”ＦＰ89年９月号）。山本さんはものづくりの出来るデザイナーの養成のための学校づくりに取組まれようとしているのですが，私はそれに出来るだけご協力したいと思っています。

ともあれ知識，技術とともに，それとは異質の技能教育に本格的に取組むことが，先進産業社会のさし迫った課題となっているのです。多摩大では，技能の大切さ，技能に生きる人々の価値を，学生諸君に理解・体得させたいと思っています。

学長の鈴

各　位

野　田　一　夫

すでに新聞報道でご承知かと存じますが，今年度の多摩大学の入試倍率は“２年目のジンクス”を悠々と破って，昨年（名目35.7倍）を上廻る勢いです。入試倍率とは大学の内実を示す指標であると私は思っておりませんが，しかしそれが，内実に対する世間的評価（いわゆる人気）の尺度であることは，誰も否定できません。しかも少くとも自由社会では一般に，人気と内実との間には極めて高い相関関係があるのです。

いい例として亜細亜大学を考えてみましょう。率直に申して，数年前まで同大学は入試倍率も低く，最も目立たない大学のひとつでした。しかし衛藤瀋吉氏が学長に就任してこの方，知名度はみるみる上り，今年度は各学科とも20〜40倍という入試倍率を記録するに至りました。これは，衛藤学長がその特異なキャラクターを生かし，大学学長としては明治以来前代未聞の広報活動を華麗に率先実行したからだけではありません。同氏は，同大学の経営から教育にわたる全分野の体質改善と構造改革を果敢にかつ徹底的に推し進め，その結果亜細亜大学は，今や昔とは打ってかわった活力ある大学へと変身しつつあるのです。

かねてから親しかった衛藤氏と先日ある新聞紙上で対談しつつ，私は同氏の理想と情熱と実行力に対し改めて心から深い感銘を覚えました。私は各位に，同氏の著書『学長の鈴』（読売新聞社）のご一読をおすすめします。そのオビにこの本の標題の由来として曰く。

「……私は秘書に鈴を持たせた。会議中，私は時々大声をだす。そうなったら鈴を鳴らして教えてくれるよう秘書に頼んでおいた。しかし，鈴は一度も鳴らなかった……と，私は思った。『いえ，何度か鳴らしたのですが学長がお気づきにならなかったのです』，私は恥じ入った……」と。

この気迫！　私共もこの気迫を絶対に失ってはなりません。

Hahakoのおかげで……

各　位

野　田　一　夫

先日家へ帰ると，居間のテーブルの上に娘が買ってきたHanakoが置いてあり，その表紙の「これからは“ホテルが目的”で旅に出る」という大きな活字が目にとまりました。早速ページをめくると，旅好きな私ですらほとんど知らない各地のホテルの紹介記事。たまたま数日後の札幌出張を控えていた私は「新しく誕生した個性派ホテルには，旅人の心を和ませる力が潜んでいる」というロテル ド ロテルに泊りたくなりました。

そこで，翌日オフィスに出るや否や，早速ホテルの予約変更をして貰い，日曜の午後は，何か浮き浮きした気分で機上の人となりました。ところが札幌へ着くと，迎えの車の運転手はそのホテルの名さえ知らず，所在番地のあたりへ行ってもウロウロする始末，やっと教えられたのが，凡そホテルらしからぬ小さなビル。麻布か原宿あたりにありそうなしゃれたカフェ・テラスとブティックにはさまれた狭いエントランスを入り，半信半疑で階段を２階に上ってみて，始めて私はホッとしました。そこはもうヨーロッパの小ぶりで高級なホテルを連想させる，実に簡素であかぬけたインテリアのロビー。自室の調度類，朝食を摂った最上階の食堂の雰囲気，従業員の行き届いたサービス……。Hanakoのおかげで私は“泊ること”を満喫しました。

さて，今週は多摩大学の入試。志願者は昨年を上廻り，逆に欠席者数は昨年を下廻ったことからも推察されますように，「新しく誕生した個性派多摩大学には，若者の心を魅きつける力が潜んでいる」という評価は，２年目にして高校生の間に一応行き亘ったようです。問題は，私共が今後この人気をいかに定着させ，更に向上させるかです。変転して止まない時代環境の中でとくに移ろい易い若者の心を想う時，多摩大学は今から来年度の入試の戦略構想にとりかかる必要があります。

早治大学唯野教授

各　位

野　田　一　夫

「大学の講義は12分遅れて始まり12分早く終るのが常識とされている。これをだいたい正確に守れぬような教授は学生から教授として扱ってもらえない。だから唯野も正確に12分早く『比較文学論』の講義を終え，49号館の726番教室から廊下へ出た。新学期になって最初の講義だ。もちろんノートは助教授時代以来５年越しの使いまわしである。……」

目下大評判の小説『文学部唯野教授』の書き出しはこう始っています。いやこれ程の余裕をもった皮肉でこれ程徹底的に日本の大学（制度および人間）をコケにした文学を，私は他に知りません。しかも，現行の日本の平均的大学の現実がこの架空の大学「早治大学」よりマシかヒドイかは程度の差であることは，大学で学んだ経験のある日本人なら誰でも納得でき，共鳴を禁じえないところに，この小説の人気の原因があるのです。

多摩大学の設立目的は，この小説で散々愚弄されている現行の大学の現実を打破することにあります。大学は研究機関である前にまず教育機関であり，しかも，大部分の学生がそこを巣立って一生を活動の舞台とする“社会”の要望を充すための周到な準備の場としての教育機関でなければなりません。その意味で多摩大学の価値は，入試倍率に反映される高校生の間の人気によってでもなければ，入学生の“偏差値”によってでもなく，正に今後数年後本学を卒業していく学生に対する社会（具体的には採用する企業またはその他の機関）の評価によって，はじめて正しく測られるでありましょう。

近く別便にて各位に対し，本年度多摩大学入学式（来る4月10日，於「パルテノン多摩」）のご案内状をお送り申し上げます。万障お繰り合わせの上ご出席賜わり，本学２期生の前途を私共教職員と一緒に祝って下されば幸甚に存じます。

老いてなおジャンヌ・モロー

各　位

野　田　一　夫

ジャンヌ・モローといえば，少くとも私達の世代なら「現金に手を出すな」「小間使の日記」……等のなつかしい映画のシーンのいくつかを回想するでしょう。とくにギャングの情婦といった役で“女”の哀れさとしぶとさを演じさせたら，恐らく彼女の右へ出る俳優は昔も今もいないはずです。

そのジャンヌ・モローの舞台芸を，20日夜赤坂「草月ホール」で堪能しました。ブロッホの原作をグリューバーが演出し，彼女の主演でパリで大好評を拍した『ゼルリンヌの物語』が，そのまま日本へやってきたのです。主演といっても，この作品は一人の老女が，昔さる貴族の館で小間使いとして働らいた頃の想い出を鬼気迫る情念をこめてながながと語る独白劇みたいなものですから，せりふの微妙な言いまわしと繊細極まりない表情や動作といった高度な演技力が俳優に要求されます。

高潔な人柄の男爵へ寄せる秘められた熱き心，不倫の愛に耽溺する夫人への憎しみ，ゼルリンヌは夫人への復讐のおもいを込めて相手の男を誘惑します。……思いがけず経験しためくるめく愛欲の歓喜の底になおうごめきつづけて止まない男へのさげすみと執着の葛藤……。フランス語を解しない日本人観客に対して，こうした複雑怪奇な女性心理をその卓越した演技力で適確に伝え，しかも1時間半という時を忘れさせてくれたジャンヌ・モローに，心から感服しました。

情報化社会に活動しようとする人間にとって，優れた“表現力”こそは最も必要な資質です。多摩大学は1～2年の一般教育の中で，必修科目として実用国語（書く，話す）を，また選択科目として「音楽」「絵画」の他に「演技」を設置しています。とくに「演技」に関しては，教室での頭で学ぶ教育とともに，素晴らしい映画，演劇，パフォーマンス等から五感で学びとる学外教育を重視したいと考えています。

海図なき航行

各　位

野　田　一　夫

一枚の色紙に筆ペンで「海図なき航行」という６文字が記されていき，その色紙がズームアップされて，番組は終りました。私がよく視聴するＮＨＫの「日曜インタビュー」，今週のゲストは東京大学先端科学技術センター（先端研）長 柳田博明氏でした。「海図なき航行」は柳田さんの一番好きな言葉，いかにも“化学認識機能材料”という未踏の分野の研究開発と日々とりくむ学者の心意気を感じさせませんか。

先端研はかねてから東大有志教授の間で練られてきた「高等研究所」構想が形を変えて誕生したもので，したがってその構想の根幹にあった「学際性」「国際性」「公開性」（業績）「流動性」（人材）という４大方針を堅持し，高度な研究活動を自由濶達に行いつつ先端分野で必要とされる人材を育成することを狙いとしています。この方針は何と私共多摩大学にもＫＡＳＴ（TIMIS 40・41号で中村秀一郎氏が紹介された㈶神奈川科学技術アカデミー）の設立理念にも相通ずるものです。

知性にあふれた実に端正な顔立ちの柳田教授が「ご趣味は？」の問に何のためらいもなく「カラオケです」と答えられた時は，正直いってびっくりしました。しかしそのあとで「われわれ日本人研究者は一般に自己表現力が乏しく，このことが国際交流はもとより異分野交流の面からも大きな障害となっていますが，カラオケは単に研究生活の息抜きのためばかりでなく，自己表現力の向上に役立ちますからね…」という意味のことを言われてニッコリされたその表情は，正に値千金でした。

カラオケといえばこの人を置いて他にないわが中村学部長は，その言に必らずハタと膝を打たれるに違いありません。専ら“陰湿閉鎖的”と評されてきた日本の学者・研究者の世界にも，どうやらやっと新時代の爽やかな風が吹き始めたようです。

憂鬱な季節

各　位

野　田　一　夫

数日前ある会食の席で，隣にいた日本ソフトバンクの孫社長から急に「野田先生，岩屋毅さんが大分２区で当選したんですよ……」と話しかけられました。一瞬面喰った私に孫さんはすかさず「ずっと昔，南部さんのパーティでご紹介した，あの大男の……」と，私はやっとその人を想い出したのです。

岩屋毅氏，昭和32年生まれ。早大卒，在学中より政治家を志し，松下政経塾第一期生に応募，松下幸之助氏の最終面接で不合格となり，涙を呑む。独力で初志を貫徹すべく帰郷，昭和62年県議選挙に立候補してトップ当選。本年の総選挙のために県議を辞して立候補，見事国会議員の座を獲得，弱冠32歳。

新時代の政治家の養成を目ざされた松下幸之助氏といえども，この人材を見抜く能力はなかったのでしょうか。今年度の多摩大学は，入試倍率からみるかぎり，昨年に劣らず難関でした。１人を合格させることは数十人を不合格とすることです。人材を見分けるのにあらゆる努力をしましたが，結局は今年も入試の点数をキメ手にせざるをえませんでした。大学教師として毎年私は，入れた学生より落とした学生のことが気がかりでなりません。そしてこの憂鬱な季節には必らず，昔読んだサン・テグジュペリの次の言葉で私の心はうずくのです。

「……おとなというものは，数字が好きです。新しくできた友だちの話をするとき，おとなの人は，かんじんかなめのことはききません。〈どんな声の人？〉とか……〈チョウの採集をするの？〉とかというようなことはてんできかずに，〈その人いくつ？〉とか……〈おとうさんは，どのくらいお金をとっていますか〉というようなことをきくのです。そしてやっとどんな人かわかったつもりになるのです……」（『星の王子さま』内藤濯訳，岩波書店）。

“海の都”の教訓

各　位

野　田　一　夫

近く二期出版社より刊行される「大学シリーズ」で最初に多摩大学がとりあげられることになり，先日監修者である評論家の室伏哲郎氏と対談しました。すでに多摩大学のことを何から何まで知っておられる室伏氏は，多摩大学のこれまでの成功を高く評価されながらも，将来の発展のための基本的問題点として“規模の制約”をあげられました。正にズバリのご指摘で，かねてから私自身が思いをめぐらせていたことです。

多摩大学が目ざすものは，当然のことながら，日本を代表する総合大学です。しかし，そのためにわれわれは現在の“規模の不利益”をどうやって克服するかという戦略を策定し，関係者全員の知慧と努力を投入する必要があります。幸い古今東西の歴史の中には，人間の知慧と努力が大きな障害を見事に克服した事例は枚挙にいとまがありません。

若い頃から私が一番魅力を感じてきた国はヴェネツィア共和国です。アドリア海の最奥に位置した一都市国家，しかも最盛期においてすら人口わずか20万人でしかなかったヴェネツィアは，十世紀の中頃以来何百年にもわたって，アドリア海から東地中海にわたる広大な地域を支配しえたのです。塩野七生さんの名著『海の都の物語』（中央公論社）を読まれた方も多いことでしょう。この本を読んで感激した私は，かつて欧州出張の折，彼女に会うのだけが目的でフィレンツェにまで足をのばし，“ココリコ”というレストランで宵の口から暁方まで彼女とヴェネツィアについて語りあかしたことを，今懐しく想い出します。「……とくに英雄っていなかったのにねぇ。だけど，どこの国よりみんな勤勉で利口だったのよ……」と言った彼女の言葉が忘れられません。

次回で，本学が弱点を克服するための一提案を致します。

規模の不利を超えて

各　位

野　田　一　夫

千代の富士が遂に通算1,000勝を達成しました。この大記録は，彼の体が幕内力士中最も小さいだけに，なお更燦然と輝きを増すのです。しかしいかに小さいとはいえ，今の彼には183cmの身長と122Kgの体重があります。もし彼の身長が10cm低く，また体重が20Kg軽かったら，いかに非凡な素質にめぐまれ，いかに人一倍の努力を重ねても，彼が相撲の世界でかくも大輪の花を咲かせることは絶対に不可能だったでしょう。

このように，何事につけ，“大きさ”はすぐれた“実績”にとっては無視できない条件です。多摩大学は，「21世紀を拓く」という，雄大な理想をもって発足しました。この理想の実現にとって，多摩大学の現在の大きさ(敷地33,000m²，学年収容定員160名)は確実に頭の痛い問題です。したがって多摩大学は，今後是非とも独自の成長戦略を実施に移していく必要があります。具体的には，時代性のあるユニークな学部・学科を着実に増設しつづけ，“総合大学”への道を歩むことです。しかし，母体である田村学園には一定の方針と経済的制約がある以上，多摩大学が総合大学になれるのは困難だ，という悲観論もあります。実は私自身は，そんなことは何とも思っておりません。

今や日本では，大学をめぐる世界には鬱勃とした気運が高まり，古い大学での改革の波と新しい大学設立の波がひしめいています。幸いこうした波の担い手である人々の多くが，多摩大学に対して熱い視線を送ってくれております。真に本学設立の理想達成を念願するなら，私共はこうした方々に進んで協力し，本学と理想を共にしながら教科内容を異にする大学の実現に力をつくそうではありませんか。そして，将来これらの大学同士で新しいリーグを形成し，リーグとして“総合大学”の実を挙げるといった途もあることを決して忘れてはなりません。

道は果てしなく遠くとも

各　位

野　田　一　夫

平松守彦氏（大分県知事）から最近出版された『グローバルに考え，ローカルに行動せよ』が送られてきました。表紙を開くと「畏友，野田一夫様　平松守彦」と，あの懐しい，筆太でいかにも男らしい達筆の署名が目にとびこんできて，20年にわたる友情の暖かさがほのぼのと心を満たしてくれました。

「一村一品運動」「"豊の国"づくり」「九州議会構想」等々卓越した発想から次々に打出される政策とそれらを推し進めていくための想像を絶する行動力，今や平松さんの名前は日本国中はもとより，世界中にひびきわたっています。昭和50年国土庁の審議官のポストを捨てて平松さんが副知事に就任した直後の大分県は，県民1人当り所得で47都道府県中43位でしたが，平松県政10年後，それは31位へ急上昇，その後も躍進はつづいています。人気度において，平松さんが全国知事中断トツの1位を毎年占めているだけのことはあるのです。

しかし，平松さんの人気の源泉は，県政の実績よりもっと深いところにあります。あの豪快でどこか人懐っこい風貌，堂々たる体格にしては実に機敏な動作，存在全体がかもし出す独特の明るさ，知性と品性，信頼感……，いわば政治指導者に望まれるあらゆる人間的属性を具備している故に，平松さんが東京を去って15年たった今も，昔からの友人・知人によって「平松守彦を総理にする会」も存続しつづけているのです。

その平松さんの趣味の1つはカラオケ，愛好歌の1つは「若者たち」。とくに「君の行く道は　果てしなく遠い　だのになぜ　歯をくいしばり　君は行くのか　そんなにしてまで」という歌詞をこよなく愛する平松さんは，多摩大学の力強い支援者であることをご存知ですか。小さいながらも多摩大学が大きな理想を掲げて発足し，教職員全員がこの理想の実現のためにひたむきに頑張っているのを信じて下さっているからです。

開学一年を顧みて

各　位

野　田　一　夫

開学後早くも１年，正に「光陰矢の如し」の感一入です。しかし，新設でありながら多摩大学がこの１年間に世間で得た望外の評価と知名度は，私共の努力が決して無駄でなかったことを実証してくれます。もちろん「油断は禁物」，３月23日の午後から深夜にかけて，本学の全教員は伊豆弓ケ浜「観水荘」で徹底したティーチインを行い，①多摩大学の教育理念，②学生の学習態度と意欲について，③学生の学内外の生活について，④教員の教育研究システムについて，⑤希わしい多摩大学の将来，の５点を議論し合いました。

私が立教大学に在職した33年間のうち，教員全員が教育の現状と未来をこのように時間をかけて熱心に議論しあった経験は，ただの一回もありませんでした。それだけに私は，本学の同僚教員の方々の意欲を本当に嬉しく思っています。教育の成果は，個々の教員の思い入れだけで目に見えて上っていく程単純なものではありませんだけに，私共は互に激励し合い知恵を出し合って，たゆまぬ努力をつづけて行く必要があるのです。

明治以来日本の大学にはなかった「年間講義案」「休講なし」「時間厳守」という本学の教育三大方式はこの一年でほぼ順調に軌道にのったようです。また，教員の“研究”が“教育”の足を引っ張らないでという希いを托して計画した多摩大学総合研究所も，この１年間の試運転の結果は上々で，今年は本格的活動を開始する予定です。ただ，開学前から本学の最大の特徴であり使命であることを強調してきた“対外活動”が全般的に低調であったことには，悔恨が残ります。設備の完成が遅れたこと，開学後の諸業務に私共が忙殺されたこと……等々原因はいろいろ挙げられますが，これをやらないうちは本学は片肺飛行中だということを心に銘じ，今年は実行しようではありませんか。

21世紀を拓く

各　位

野　田　一　夫

春４月，新生多摩大学は開学２年目を迎えます。規模は小さくとも，多摩大学は大きな理想を掲げて発足しました。この理想は「21世紀を拓く」という７文字に集約されます。しかもこの７文字は，創立者である私どもにとっては漠然とした希いではなく，冷静な情勢分析を踏まえた極めて具体的な目標なのです。

21世紀の日本の経済社会は，今世紀とは大きく異った様相を呈するに違いありません。今日すでに識者によって“情報化”，“国際化”，“ソフト化”……と称されている時代的趨勢は，今後ますます顕在化していくでしょう。したがって，20世紀の現実を前提としてつくられ存続してきたあらゆる組織は，その慣習的考え方や体制を刷新しないかぎり，21世紀において更なる発展をとげることは絶対に不可能です。

少くとも産業界では，多くの企業が時代の流れを敏感に察知し，懸命に改革の努力を重ねています。ところが，教育界の時代感覚たるや産業界と対照的であるというほかはなく，とくに伝統を誇る大学ほど，過去の権威と因習の上にあぐらをかき，偷安の夢をむさぼっているといっても過言ではありません。

私どもはこの現状を十分認識し，今後の時代環境に対応するために以下の３大方針を定め，それらを実現するのに必要な諸条件を整備した上で，多摩大学を設立したわけです。すなわち，①教育の対象を一般学生から社会人へと限りなく拡げること，②在来のように教授個人本位の研究から，グループないし組織本位の研究に重点を移し，“シンクタンク”としての発展を策すること，③大学にとってふさわしいと思われる新事業を積極的にとりこんでいくこと，の３つです。

未来都市多摩ニュータウンの高台に立地し，快適にして機能的な施設・設備をそなえ，社会で立派に通用する教授陣を揃えたのは，正にこの方針の実現のためであることをご理解下さい。

學問要從非學問來

各　位

野　田　一　夫

'89年度「ヴェネチァ国際映画祭」でグランプリの栄冠に輝いた台湾映画『悲情城市』が，今月末から全国主要都市で一斉に公開されます。先週木曜日（12日）青山のスパイラル・ホールで行われたそのプレミアショウにお招きをうけて，大きな感銘を受けました。映画そのものより，この作品を完成させるために，豊かな才能に恵まれ，経験をつみ，そして若くして名を成した30～40歳代の一群の人材が国を超えて協力し，友情の素晴らしい成果を私達の前に披露してくれたからです。

この映画の監督は台湾育ちの鬼才侯孝賢（ホー・シャオシェン）氏ですが，作品の内容が終戦後の本省人と外省人との対立抗争を扱うものであったが故に，台湾で完成させるのにいろいろ障害があった上，資金調達も危ぶまれました。そこで，かねてから侯氏の友人であった作曲家三枝成章氏の仲介で製作に矢内廣（ぴあ株式会社社長），音楽に新田和長（株式会社ファンハウス社長）両氏が衷心協力し，この作品を完成させたのです。

当日上映に先立ち，三枝，矢内，新田三氏と侯監督とが並んでステージに立ち，観客に向って順次挨拶をしたあとライトに照らされながら微笑んだ顔は，何れも知性と逞しさと品位にあふれていて実に爽快でした。家へ帰ってテレビの画像に映った現在の日本の政治指導者の顔と見比べながら，日本にもそしてアジアにも新しい時代が来ようとしていることを確信でき，その夜は殊のほか安らかな気持で眠りにつけました。

「電影要從非電影來」（映画は映画の外より来る）は侯氏の座右の銘であるとともに，全作品に反映される信念です。すなわち，映画は彼にとって彼の生きている"現実の世界"の本質を明らかにする手段なのです。この句は「學問要從非學問來」（学問は学問の外より来る）と双を成しています。何と，私ども多摩大学の教育理念そのものではありませんか。

"退学勧告"をめぐって

各　位

野　田　一　夫

先週金曜日(20日)，国立京都国際会館で開催された「京都フォーラム」という会議に出席してきました。『学校の危機』が今年のテーマでしたが，出席者のほとんどが，小学校から大学に至るわが国の現行の教育のあり方に対して深刻な危機感を抱いておられる反面，実現の期待できそうな改革案をもち合わせておられないように見受けられました。

小生は小・中・高等学校の教育については知識も関心ももっておりませんが，今日の日本の大学教育についてさほどの危機感を抱いておらぬ反面，多摩大学において現に試みられているような政策の実現に大きな自信をもっているだけに，教育者として幸せです。……と思いながら翌日帰京の車中で朝日新聞を開いてみますと，「成績不良者に退学勧告」という大見出しで，多摩大学のことが派手に報道されていてびっくりしました。

他の新聞も報道したようですが，一定の学力水準に達していないと判断される学生に厳しく臨むのは大学として当然のことで，今回の本学の措置がニュースになること自体，日本の大学の世界の現状は世間の常識からみて大いに狂っているのではないでしょうか。前述の会議にオブザーバーとして出席していたフランスの大学教授が，日仏の大学教育の在り方を質ねられた時，即座に「日本の大学はフランスと同じように，入ることは難しい。しかしフランスの大学は日本と違って，卒業することは入学するよりもっと難しい……」と答えました。実はこれが，日本を除く大部分の国の大学の常識なのです。

本学は今後も"退学勧告"を含めあらゆる措置を断行していきますが，措置が不公平とのそしりを受けないためには，小生を含め教職員のたえざる自覚と実践が必要です。"退職勧告"も，やはり可能性としてなければおかしいのです。

教育とは何か

各　位

野　田　一　夫

『……「この中に，勉強が嫌になった，といっているヤツがいるそうだ。だけど人間は，生きてる限り，死ぬまで，毎日毎日が勉強なんだ。だから，勉強が嫌になったのなら生きている意味がない。オレが殺してやる。オレに殺されて悔しかったら，地獄の底から化けて出てこーいっ」って。中肉中背，温顔でいつもニコニコしてた先生が，そう言ってポロポロ泣いてるの。こりゃオレのことだと思いながら，電気のムチでひっぱたかれた気がした。友達も，「わーこえー」といいつつ泣いてた。…』

お読みになりました？　先日多摩大学の"退学勧告"を大きく報じた朝日新聞朝刊（21日）の記事と隣り合わせに載っていた小田島雄志氏の「私と先生」。私はこの談話記事を読んだ時，こみ上げてくる涙をこらえられませんでした。中国で終戦を迎えた小田島氏は，日本に引き揚げてきて東京の中学に編入されました。暗い世相と苦しい家計の中で日頃さしも知的好奇心にあふれていた氏も時に友人に弱気の言葉を吐いたのですが，その言葉が担任の先生の耳に入った時，その先生は血相を変えて教室に飛び込むや，冒頭の言葉で怒鳴ったというのです。

氏とほぼ同じ時期に青年時代を過した者の一人として，私は改めて「教育とは何か」を真剣に考えさせられました。建物や設備がどんなボロでも，教師の側に信念と情熱があり，また学生の側にヤル気と知的好奇心さえあれば，教育は基本的にはその目的を十分に達することができるのです。終戦直後のわが国は，国破れても幸い人心は荒廃しきってはいませんでしたが，戦後40年，万人の予想を超えた経済的繁栄の中にあって，教育のため最も必要な人間的属性は，教える側でも教わる側でも正に失われんとしています。多摩大学は，何としても，大学教育の灯をこの国で再びあかあかと照らしてみせようではありませんか。

競争の精神

各位

野田一夫

ゴールデンウィークも終りました。長い休日をいかがお過しでしたか。小生は狂ったようにいろいろなスポーツにとっくみましたが，とくに連休直前の月曜日の夜，親しい友人たちと久方ぶりに軟式野球を，それもあの後楽園ドームで楽しんだことは，忘れられません。素人とはいえ，ああいう場所でする以上は，トレーニングウェアに運動靴ではサマになりません。それだけに，これまで何回も捨てようとして捨てきれなかったユニフォームとスパイクシューズへの未練の甲斐があったと，小生は“正装”した自分に独りホクホクしていました。

結局，試合は10－6でわれわれのチームが敗れましたが，何しろ平均年齢で，45～50歳の両チームのメンバーが最後の最後まで試合を捨てず“勝つために”頑張りましたから，試合が終った後の気分は，喉にしみわたる冷えたビールのごとく爽やかなものでありました。連休が終るや否や，学校から連絡あり，本学の斉藤聡子（２年生），川口嘉治，高田広忠（１年生）３君が先日行われた東京都珠算コンクールの団体競技一般の部で見事優勝したことを知らされました。多摩大学の学生が世間の注目を浴びるだけの秀れた実績をあげてくれたのは多分開学以来初めてのことで，心から快哉を叫んだ次第です。

何事につけ，競争は人間にヤル気を与え，知恵を働かせ，精神を集中させる点で，能力向上と技術進歩の源泉です。もちろん厳正なルールがあるとはいえ競争は一種の“戦い”ですから，時には“怒り”とか“悔しさ”といった心情を誘発させます。“平和”とか“平安”は人間にとって永遠の共通の希いですが，“競争”をいたずらに回避したり恐れたりする人々にとっては，“平和”も“平安”も現実に無縁なものとなるでしょう。“逞しい”知識人を育てること，それこそが多摩大学の理想です。

今　なぜか多摩大学が……

各　位

野　田　一　夫

朝日新聞ほか各紙が報じた本学の例の“退学勧告”の記事の余波が現在まだまだ続いていることに私はすっかり驚いています。新聞や雑誌の取材やインタビュー，講演やシンポジウムの講師としての出席，手紙や電話での質問とか相談……といった形で，世間では本学のやったことまた今後やろうとしていること（たとえば一部教員の退職勧告等）を私からもっと知りたがっているのです。

私どもは当り前のことをごく当り前の形で実施に移していくだけですのに，現在の日本にはニュースのネタが余程ないのか，あるいは私どもが当り前と思っていることを実行するのが困難な状況が一般化してしまっているのか，本学だけが特別視されるのはまことにおかしな気持です。何れにせよ，“退学勧告”なぞ本学にとって大した措置ではありませんし，また世間での予想外のもてはやされ方にいい気になって上乗りする気も，私には全然ありません。本学は本学設立の理念を，長期的視野のもとに正々堂々と実現して行くつもりです。

ところで，本学をめぐるちょっとしたこの騒ぎの最中に，一冊の本が出版されました。室伏哲郎編「多摩大学」（二期出版）がそれです。さすがに当代一流の評論家として世間的評価の高い室伏氏が責任をもって編集されただけに，本書は読み易さの割りに実に内容のある本であることに感心もし安心もしました。多摩大学が，小さいながらどのような理想をもって設立され，またその理想がどのような形で実現されつつあるかが，大学の構成と活動領域のすべてに亘って，つとめて客観的に叙述されています。本学の“退学勧告”に関心を持って下さる方なら，せめてこの本ぐらいは読んで下さった上で，とひそかに念願できるだけの出来映えの本です。是非ともご一読のほどを……。

東欧の旅から

各　位

中　村　秀一郎

東欧を旅行して全く予想外だったのは，大都市プラハとブダペストの自動車公害でした。西側の車がほとんどなく，ソ連のラーダや東独のトラバントといった排ガス浄化装置のない，日本の水準からみればおよそ整備不良の車が走りまわっているわけですから，当然のことといえばそれまでですが，それにしてもひどいと思いました。

この二大都市にはほぼウィーンなみの路面電車ネットワークがあり，プラハには地下鉄も三線あります。発展途上国の大都市とは違って一応公共輸送機関が整備されているのですが，それも自動車公害抑制にはほとんど役立っていません。

地方都市や農村地域には自動車公害の代りに産業公害があるようです。今度の旅の目的はハンガリーの組織・経営学会への参加でしたが，この会合の開かれた中世風の雰囲気を残す“ハンガリーの京都”セーケシュフェヘールバールでも夜ホテルの窓を開けると，かつての京浜工業地帯の化学工場を想い出させる悪臭が漂ってきました。エネルギー源として多量に利用されている褐炭の脱硫装置を含めて，日本の公害防止技術は，東欧の環境問題解決に寄与するところ大きいと信じます。

帰途立寄ったイスタンブールには，ボスポラス海峡沿いに，トルコ共和国の父といわれるアタチュルクの亡くなったドルマバフチェ宮殿という美しい文化遺産があります。ところが日本の大手建設会社が外資と提携して，この宮殿の上の丘の緑地を切り開きホテルを建設中です。昨年の地方選で当選した野党社会人民党系の新市長は，世論を背景としてこの建設を環境破壊とし，ブルドーザーを使ってこの工事を阻止すると訴えているそうですが，環境問題を解決する技術に自信を持つ日本人なら，こうした問題にはもっと敏感であるべきではないでしょうか。

ギャラクシー賞

各　位

野　田　一　夫

わが国では，テレビといえば不幸なことに，“俗悪番組”というのが合言葉になってしまっています。たしかに夜家へ帰ってテレビをつけると，いい年齢をした大人がようやるよ，といいたい程低俗でしかも面白くも何ともない番組ばかりでがっかりしてしまうことが多いのですが，しかし毎日の新聞紙面でテレビ欄にざっと目を通すと，結構視聴したい番組もあるにはあります。最近はビデオへの収録も驚くほど便利になりましたから，私などは友人達の中ではテレビをよく楽しんでいる方だと思います。毎年オリジナルな放送番組の中で優秀な作品に与れられる“ギャラクシー賞”という表彰制度があります。約150人の評論家，専門家等が慎重に選奨するもので表彰主体は「放送批評懇談会」。この会の理事長は私の敬愛する友人，放送評論家の志賀信夫氏。志賀氏も多摩大学の非常勤講師として今年から「コミュニケーション論」を講じておられるのはご存知でしょうか。

今週月曜（28日）夜，赤坂プリンスホテルで1989年４月１日～1990年３月31日までに放送された作品に対する第27回ギャラクシー賞の表彰式と披露宴がありました。特別賞はＮＨＫスペシャルの「北極圏」（日本放送協会）で，私も感銘を受けた番組，個人賞は「ニュースステーション」のキャスター久米宏氏で，私がほぼ毎晩視聴している番組でしたが，衝撃を受けたのは，今回のギャラクシー賞にノミネートされた13作品のうち，私が視聴していたのはたった１つしかなかったことでした。しかも推薦理由を読むと，何れも興味をそそられるものばかり，テレビが俗悪な番組ばかり流しているわけではないことを改めて痛感させられ，早速その夜は早々に帰宅し，ＮＨＫの「アマゾンの大森林」を心ゆくまで堪能した次第です。

ハンガリーの経済・経営学者たち
各　位

中　村　秀　一　郎

5月2日〜5日のハンガリー組織・経営国際学会では，私はマーケティング部会で公開講演にもなった「技術革新に挑戦する日本の中小企業」と題する報告（英語）をおこないました。こういうテーマを取り上げたのは，社会主義圏には“西側諸国”以上に巨大主義に関する迷信が強いからです。

この学会でとくに興味をもったのは，「われわれは観念的には市場経済を知っている。だがそれへの移行の手本は全くない」ということを基調としたブダペスト経済大のアテイラ・チカン教授の報告でした。この学会に参加されていた専修大の三教授を加えた氏との懇談は，30分の約束が90分にも及びました。

「社会主義の枠組は市場経済を本質的に阻止する」，「もう10年早ければ移行はやさしかった。対外債務の増大と労働力不足は困難をもたらしているのです」，「社会主義の枠＝人民的所有の本質は官僚支配そのものだが，不十分な品質と品揃えを必ず生むこのシステムは，国民の欲望に答えることはないのです」，以上がこの対話のなかでの印象的な氏の言葉でした。

KOPINT-DATARG（景気・市場調査研究所）からの依頼で5月7日，西側に対して比較優位を持つ特定産業の育成と企業改革論を論点とした講演「ハンガリー経済改革への提言」を同研究所でおこないました。そこでは，体制の如何を問わず現代の企業は実質的に従業員のものであるべきで，証券市場をふくむ活発な市場の競争はそのエゴイズムを排除しうること，国民の企業への信頼が失われるとき経済発展は絶望的となることなどを強調しました。国有企業の管理者が安く外資に企業を売却し，社長として居据るといった事態に対し，国が資産管理庁という組織をつくり，国有財産の保全に乗り出すというニュースに接したからでもあったのです。

16日　18時10分

各　位

野　田　一　夫

先々週のおわりから先週一杯，ＮＨＫ「特報・首都圏'90」の取材班は，学長の私をはじめ多摩大学の関係者の多くを実に精力的に取材して廻られました。この結果は今週土曜（16日）の18時10分からＮＨＫ総合テレビで放映されますから，本学にご関心のある方は是非ともチャンネルをお合わせ下さい。

このテレビ番組はご承知のごとく，放送時間帯が一般視聴者にとって絶好であることのほか，何といっても，ニュース性の高い話題を主として当事者のナマの声および表情を通して毎回たくみに掘り下げるという手法の成功によって，すでに6年間硬派の"人気番組"の座を守りつづけています。先々週の中頃この番組に関しての取材のご依頼があった時点では，私はごく軽く考えておりました。つまり，このところマスコミではしきりに大学の問題がとりあげられていますから，この風潮の中で，新らしい方向を歩んでいる大学のひとつとして多摩大学がとりあげられただけだと信じきっていたのです。

しかし，取材依頼が単に学長室でのインタビューだけにとどまらず，私に関しても学内はもちろん学外でのさまざまな日常活動にまで及んでいく過程で，はじめて私は，30分間の放送番組がまるまる本学にあてられているという制作意図を知って驚きました。それにしても，ディレクターからカメラマンまで取材班がたった30分（といっても，この種番組では極めて長い方ですが）の番組制作のために費やされた時間と努力には真に頭が下がります。それこそ早朝から深夜まで，私共の情報にもとずいてあらゆるところへ足を運び，納得のいくまで聞き直し撮り直すわけですから，私だけの単独インタビューでも優に4時間を超えたはずです。

この番組への皆様のご感想を楽しみにいたしております。

多摩大の敵は多摩大である

各　位

中　村　秀　一　郎

多摩大が開学二年目に入るとともに，“挨拶を大切に”，“休講なし，講義は定刻”，“550ページを超える年間講義案（履修項目）配布”，“成績不良者への退学勧告”などの実施が，世の注目を集めるようになってきました。既成の大学をモデルとしない，ナンバーワンよりもオンリーワンを目指す多摩大の理念と戦略は，広く理解されはじめたようです。

しかし「21世紀を拓く」その理念の追求には，一日も手を抜くことが出来ないというのが実感です。というのは，フツーの大学にしても，なにもフツーを目標としているわけではありません。それぞれ理想を掲げ，新しい挑戦を試みようとする教職員もいるのですが，結果としてはとくに特色のない大学を存続させることになってしまっているのです。このことは，日本の大学の慣習と惰性の克服が，異常というべき努力の結集と持続なしにはありえないことを教えてくれます。多摩大とても例外ではありません。現状に安住することなく，経営側と教学側とが一致してたえず理想に向い革新に挑戦しつづけることによってのみ，多摩大は多摩大たりうるのです。その意味で現実の多摩大は，常に理想としての多摩大の敵なのです。

よく大学の入学案内などで，「学ぶことは楽しい」といったキーワードに出合うことがあります。大間違いでしょう。ただし学ぶことの苦しさ，厳しさをつき抜けたとき，人にははじめて身ぶるいするような感動があることもまた事実なのです。このプロセスを学生に体得させることが，まさに大学教育の核心なのですが，それには，教室で私語にふけるといった学生の実態を見据えてなお常に教育の理想を実現しようとする教授陣の創意工夫と努力の結集が不可欠なのです。多摩大は是非それを貫きたいものです。

Ask not what your country can do for you,..

各　位

野　田　一　夫

帰国してからビデオで，先日放送された本学に関するテレビ番組を視聴しました。30分足らずの番組をつくるのに，撮影したテープの量は優に15時間分を超えたというだけあって，私自身に焦点が当てられすぎていたのが終始気にはなりましたが，全体としてはよくまとめられており，ホッとしました。ただ副題だけは何とも納得できませんでしたので，早速今週月曜日，学内掲示板に以下のような学長所感を表明しておきました。

先日ＮＨＫ総合テレビにおいて放送された本学の番組には，「徹底して面倒みます」という副題がついていました。日本の他の大学に比較すれば取材陣にそう受取られたことも致し方ありませんが，本学はそのような教育方針を決して打出してはおりません。本学は大学としてやるべきことをどんどん実施していく反面，本学の期待に応えられないと思われる学生をできるだけ切り捨てていく方針です。われわれは，教職員と一体となって多摩大学のよき伝統を確立しようと努力をする学生にのみ教育努力を集中したいと考えています。そのような学生諸君に対して私は，J. F.ケネディの大統領就任演説の中の有名な一節を真似て，「多摩大学が諸君に何をしてくれるかを他人に要求する前に，諸君は多摩大学に何をなしうるかを自らの心に問え」という言葉を贈るとともに，諸君の青春の輝かしからんことを切に祈るものです。

30年前私が米国に滞在している時，若きケネディは大統領戦で劇的勝利を収めましたが，政治家としての彼の評価と人気を不動のものにしたあの就任演説で受けた感銘を，私は今も忘れられません。聖書に発するこの思想は，単に政治，経営のみならず，教育の世界にも時代を超えて通用すると信じます。

時は移ろい，人変らず

各　位

野　田　一　夫

先週水曜日の宵，ところは南青山のライブハウスBLUE NOTE TOKYO,舞台にはディヴィット・マシューズ以下ニューヨークの第一線で活躍するジャズメン6名，曲目は1975年から今年1990年まで毎年のヒットチャートから，粋な演奏となつかしいメロディーに200人を越す聴衆は夜の更けるのを忘れて音楽をたのしんでいました。都市空間の“スペース・クリエイター”という時代先端的な新事業を成功させて波に乗っている㈱グリーンホームズの若き社長中村桂太郎さんが，創業15周年を記念して親しい友人・知人のために催してくれた素敵な集いでした。

規模と伝統を誇る大企業の創業○○周年のパーティーといえば，都心の一流ホテルの大宴会場，名士のあいさつ，大テーブルや模擬店をいろどる各種各様の料理……というのが常識です。それはそれで悪くはないのですが，恐らくパーティーの様式や演出のことに自分で頭をしぼり，苦心惨憺するトップはいないはずです。部下とか業者にまかせれば，結果は慣習・慣例にしたがう最も無難な形におさまるのは，自然の理でありましょう。

この7月1日，通貨を中心とする東西両ドイツの経済統合は万事順調に推移し，今や両ドイツの年内完全統一を疑う人は世界にほとんどいないことでしょう。しかし，昨年の今頃はもちろんのこと今年初頭ですら，ベルリンの壁がかくも速やかにかくも完全にとり払われてしまうことを，一体誰が予測しえたでしょうか。昨日の常識は明日の非常識，といってよい程政治・経済・社会の変化は国内外を問わず激しい昨今ですが，古いもの，大きいもの，権威を確立したもの程，個々の激変の事例から一般的教訓を導きだす柔軟な心を持ち合わせてはいないようです。だからこそ，新しく，小さく，そして未だ知名度の低い多摩大に絶好のチャンスの訪れている時代なのです。

喜んでばかりはいられない

各　位

野　田　一　夫

本日は7月4日，再び渡米する機中で来週分のこの一文を記しています。成田へ向う直前まで読売新聞社主催の私大進学に関するパネルディスカッションに出席しておりましたが，司会者の永井順国氏が冒頭500人を越す来会者に対して私を紹介するに当り，「……たまたま今朝，朝日新聞の『天声人語』も大きくとりあげましたように，新設ながらなかなかユニークな教育方針で話題を呼んでいる多摩大学学長の野田さんです。……」といった発言をされたので，ちょっとびっくりしました。というのは，今日は早朝から多忙で，恥ずかしいことに朝刊も読んでいなかったからです。しかしその会合後，私の秘書が気をきかせてコピーしておいてくれた例の記事に接してみて，率直なところ，嬉しくも思いまた気が重くもなりました。

「天声人語」が本学に関してとりあげてくれた「成績不良者への退学勧告」「年間講義案の作成」「無休講」の3点は，世間の常識からいえばいわば当り前のことばかりです。本学はそれらを当然前提とした上で，大学として真にユニークな理想を実現しようと考えておりますのに，マスコミは今のところ，かんじんなその理想については余り関心をもってはくれません。それはそれとしても，実は成績不良者と会い，父兄と話してみると，やはり人情にほだされて，結局退学してもらったのは，12名中たったの2名。500ページに及ぶ今年度の「年間講義案」にしても，一読してみると，個々の出来不出来または力の入れ具合は歴然としている上に，各分野ごとの相互調整はやはり不十分といわざるをえません。休講はゼロといいながら，ある非常勤講師は昨年来代講の先生方に迷惑のかけどおしで，結局先日，私の退職勧告を受け容れてもらった次第……。

となると，多摩大に対する世間の過大な評価の高まりに対し私はいま，喜んでばかりはいられない気がしています。

君は　坂の上に　雲を見るか

各　位

野　田　一　夫

発想とは不思議なものです。忽ち妙案が心に浮ぶこともあれば，何カ月も呻吟を重ねた末，突然いい考えが頭にひらめくこともあります。それだけにいい考えがひらめいた時の喜びはより一層大きいとはいえますが……。私にとっては，たとえば，“多摩大学”という名称はウソのように簡単に生まれましたが，今年のわが校のポスターの図柄は２カ月にわたる苦心の産物です。

本学の場合，学生募集用ポスターの図柄は学校案内書の表紙にも使いますから，毎年入学式が終るや否や関係者の間で企画が始まり，遅くとも夏休み前には完全にモノができていなければなりません。昨年，一昨年と違って今年は，専門業者の提出する図柄はどれもこれも気に入らず，結局私どもでコンセプトをきめることにしたのですが，ゴールデンウィークの頃から，私も中村学部長もあれこれと心を悩ましつづけたのです。

それが，去る６月11日の夜，出張中のシカゴのホテルのベッドの上で，私の心に天啓のようにある図柄，というより図柄をリードするフレーズ「君は　坂の上に　雲を見るか」が浮んだのです。「……深い木立を貫く一条の山道，彼方の青空に真白い積乱雲，峠が近づいた時突然視界が開けると，そこには息をのむほどに美しい山々，神々しいばかりに姿を変えた遠い雄大な雲をまぶしげに仰ぐ青年と少女……」

先日の学内会議で，嬉しいことに今年は私の案が採用されました。本当は“峯の彼方に……”なのですが，余りにもありきたりなので，敢て“坂の上に……”にしました。明治の青年，というよりは明治という時代そのものを描いた司馬遼太郎氏の有名な小説「坂の上の雲」に因んだわけではありませんが，結果的にはイメージが重なってかえって良いかも知れません。

この図柄の成功を，切に祈りたい気持です。

TIMISの壁

各　位

野　田　一　夫

いつも何かにつけて私のことに気を配ってくれる心優しい友人たちには，どうして感謝の気持を表現したらよいのでしょうか。そうした友人の一人藤田潔氏（株式会社ビデオプロモーション社長）から東欧旅行の土産だと『自由ベルリン賛歌』と題する画集が贈られてきました。「ベルリンの壁は完全にとり払われてしまうのか？　とすれば早く何とかして行ってみたい」という私の気持をまるで見抜いていたかのようなタイミングで…。

今や文字通り無用の長物と化してしまったベルリンの壁に各国の画家たちが思い思いの絵を描くために集まり，全長160kmを超す空前絶後の長大な野外ミュージアムが出現しつつある，という報道を年初にマスコミを通して知らされていましたが，私自身何という無知だったことか，ベルリンの壁の絵はすでに1960年代から現われ，東西関係の緊張度に応じて盛衰をくり返しながらも，また消されても消されても増えつづけ，すでに1987年には目抜きの場所では壁は絵で一杯になっていたそうです。

この画集は，1984年以来ベルリンの壁画を撮影しつづけている画家ヘルマン・ヴァルデンブルグが，いろいろな意味で傑作と信ずる100の作品を編集したもので，ページをめくるごとに私はひどく感動しました。一文にもならないこの画業を，時には逮捕の危険をもおかして，なぜかくも多くの無名の才能ある人々が長年つづけてきたのか？　自由へのあくなき希い！　コミュニケーションを求めてほどばしる熱情！……もしこれらが人間の共通の属性であるとすれば，一般に掲示板と称するものは何とも無愛想に感じられます。

学生が主張や不満や提案を絵や文章で好きな時に自由に表現できる場として，本学は学内に“TIMISの壁”（仮称）をつくってみたらどうか，などと考えさせられました。

再び「多摩大の敵は多摩大」

各　位

野　田　一　夫

今週火曜日の各紙朝刊は，大学審議会大学教育部会がその前日に発表した中間報告の内容を大々的に報道しました。日本の大学の設立ならびに運営を実にきびしく規制している大学設置基準は，恐らく近い将来，この報告書の内容である“自由化路線”に沿って大幅に改革される筈です。しかしだからといって，世間の常識に反する現行の大学の諸制度や慣習も自然に改善されていくと期待するのは禁物です。大学設置基準を大学にとっての“外的制約”と呼べば，既設の大学には（しかも歴史と伝統を誇る大学ほど根強く），“内的制約”と呼べるもろもろの制度や慣習は居据っているからです。源を辿ればそれらは，現行の大学設置基準によって生れたことは事実ですが，ひとたび学内に根づいた制度や慣習は，外的制約条件の緩和などでは容易に変らぬしぶとさをもつに至っています。

多摩大学はもちろん現行の大学設置基準に基づいて認可され昨年開学されたわけです。しかし本学は時代の趨勢をしっかりと見通した上で，制度的に許されるワク内では目一杯の新規路線を自立的に確保して発足しました。したがって，建物・設備の在り方から経営・教育方針に至るあらゆる側面で本学の現状は，近い将来改革される大学設置基準の目ざすものと，実質的に何の相違もないと断言できます。いわば，目下多摩大学は時代を“先取り”していることは確実です。このところマスコミ各媒体が頻繁に本学のことをとりあげてくれる理由もそこにあります。しかし，気をゆるめてはなりません。開学後すでに１年余り，本学教職員や学生の間にもどこか“保守的”気風がただよい始めています。中村学部長が見事に喝破された通り，すでに「多摩大の敵は多摩大」となりつつあることを，われわれはこの時点でお互い肝に銘じようではありませんか。

われ思う，故にわれ在り

各　位

野　田　一　夫

イラクによる電撃的クウェート侵攻，そしてその強引な統合，こうした一連の行動に対して世界のほとんどの"国"がイラクならびにフセイン大統領に対して反感をつのらせています。先日の国連安全保障理事会での制裁決議に力を得て，少くとも日本のマスコミは反イラク反フセインの論調を日毎に強め，世論もこの線に沿ってほぼ完全に形成されたかに見えます。

政府の重要な外交的決定をマスコミがこぞって支持し，興奮とも信念ともつかぬ感情に動かされた国民は一枚岩となってころがり，その結果は……。これまでの人生の中で何回も納得できない仕打ちを政府ならびにマスコミから受けた一日本人として，私は現在の中東情勢をつとめて冷静に見守っています。マスコミ，とくに外国のマスコミを注意深く検討したかぎり，イラク軍がクウェートから撤退し，ジャビル政権が復活しただけで事態が解決することにはならぬ筈です。なぜなら，ジャビル政権下の体制そのものに問題があったに違いないからです。

さて，先月末久方ぶりに香港経由で深圳を訪れて一驚しました。10年前わずか人口約2万だった田舎町は，今や人口120万の大都市へと変貌しています。一驚したのは人口の増加といった統計的事実のためではありません。群立する高層ビル，ショッピングセンターの店頭にあふれる商品，往き交う人々の潑剌とした顔つきと敏捷な動き……街全体のかもし出す自由な雰囲気と活力が，私を驚かせたのです。「（東欧に比べて）中国はコジなほど変っていない……」などと公言してはばからないオピニオンリーダーは，一体何を知っているのでしょうか。

考えるだけでなく行動する人間，頭だけでなく五感も働らく人間，大勢に動ぜず所信を貫く人間，多摩大学はそういう人間をこそ育てたいものです。

上岡龍太郎の話芸

各　位

野　田　一　夫

『日経エンタテインメント』(89号)の特集「関西の才能」で“上岡龍太郎”をはじめて認識しました。今年に入ってよくテレビの画面上で見かける司会者の中で，服装といい態度といい珍らしく好感のもてるタレントだと意識していたのが，その上岡でした。巨泉といえば，あのわけ知り顔の太々しいニタニタ笑い。タモリといえば，何かテカテカヘラヘラネチネチした気色の悪さ。たけしといえば，年甲斐もなくツッパッタような下品な言動……。世に名を成した人間はみなそれなりの才能と努力のあらわれと敬意を表するのが私の信条ですが，好き嫌いは自ら別で，とくにいわゆる“ミーハー”向けのテレビ番組で大物司会者として名を成したタレントはほとんど，その強烈すぎる個性が私には“イヤミ”に思えてならなかったのです。

彼らの人気もこのところかげりが目立ち，対照的に上岡の人気がうなぎ上りに高まっているようです。上記の特集では，上岡の人気の原因を“トーク番組”の全盛に象徴される「テレビのラジオ化」に求めています。つまり，テレビへの接し方が積極的に視聴する番組中心からつけっ放して何となく視聴する番組中心へと移ろうにつれて，タレントには強烈な個性よりはイヤミのない人柄と，そして何よりもすぐれて耳に快い語り口が要求されてくるわけです。上岡龍太郎は，関西では何と60年代から若くして漫才師として名を成しながら早々と挫折し，長い雌伏の期間に人間的成長をとげるとともに，ラジオ番組で大いに“話芸”を磨いたとのこと。たしかに彼の成功も，人柄はもとより服装や態度だけでは無理だったと納得しながら，この“話芸”に当るものは，タレント以外の多くの職業で成功するためにも基本条件たりうるのではないかと，現在の大学教育の在り方をつくづく反省しました。

ブリスベンで考えること

各　位

野　田　一　夫

大好きなブリスベンにいます。ワイフと老後を暮そうと家まで買い求めてあるこの地ですが，まだ現役の身では度々来るのも思うにまかせず，東京にいて日頃憧れがつのるせいか，着いた日は空港が，街が，ましてや家の周辺の景色が私の胸を懐しさで一杯にする程です。

日本と逆で，オーストラリアの春はどの都市よりも早くこのブリスベンにやってきます。昼間の気温は24～25度，そよ風が頬を撫でる快適な季節に入りました。早朝空が白み始めてから日輪が真赤に西空を染めて沈んでいくまで，一日はいつものように大陸的テンポで万事ゆっくり過ぎていきます。残された人生を考えると，私のようにとくに性急な人間には，この生活のテンポこそ，ブリスベンで暮す最大のメリットです。

短い今回の滞在の間にグリフィス大学の副学長カーニー教授からお招きを受けました。来年2月多摩大学の学生約30人がこの大学で夏期セミナーを受けることになっています。この大学は①歴史が新しく，規模が大きくないこと，②日本語および日本研究を最重視していること，③主要コースの中に経営と情報を含むとともに“ホテル・レストラン”コースの新設計画のあること，④“実学”と“国際性”を教学の基本方針にしていること等々で，本学に親近性があります。

そこで「将来は学生のみならず教授間での交流も進めたらどうか」という提案をしたところ，副学長は早速昼食の席に関係部門の責任者6名を呼び集め，おかげで話は最初から和やかなうちに具体論に入れました。組織が官僚化していない若い大学だからこそできるわけだと，すっかりグリフィスの印象を良くしました。それにしても，私にとって仕事のテンポだけは，やはり余り“大陸的”でない方が性に合うようです。（8月17日記）

天 城 会 議

各　位

野　田　一　夫

先週末は２日間，日本アイビーエムの天城ホームステッドで開催された「天城会議」に出席してきました。官・財・学・マスコミ等各界の第一線で活躍する人々が，それぞれの“商売上の立場”を暫し忘れ，現下の課題についていろいろな角度から徹底的に語り合うのが，会議の目的です。今年の課題は「これからの10年－２０００年の世界と日本」です。

天城会議は今年で21回を迎えますが，想い起すと，最初の頃は趣旨が漠然としていたせいか，なかなか主催者の意中の人がおいそれと出席を承諾してくれず，関係者は説得に毎年苦労を重ねました。それがどうでしょう。この会議の評価が早々と確立して以来，出席希望者は年ごとに増えるとともに，“常連”の出席率も高まったために，関係者は今や，せいぜい50名前後の出席者の選定に毎年頭を悩ませている始末です。

ある催しとか組織が一定の社会的評価を確立するためには，通常，相当期間地道に活動をつづけることが必要です。もともと活動内容の程度が高くても，催しとか組織はそれらが新しく知名度がないというそれだけの理由で社会的評価が得られず，活動上にいろいろと支障を来します。ただし，社会的評価が高まることが活動内容の向上を示しているかといえば，皮肉なことに，そうでないことの方が多いのです。いわゆる“マンネリ化”とか“伝統の上にあぐら”という状態に陥るわけです。

私のみるところ，天城会議も一度マンネリ化しかかりましたが，それを自覚した関係者の努力でこの数年会議内容はとみに輝きをとり戻しました。多摩大学は新生ながらこのところ幸い知名度だけは俄然高まりました。しかし，私共はあくまで所期の目的に沿って地道な教育活動の実績をつみ重ね，高等教育機関として，社会的評価にふさわしい内実を具備しつづけたいものです。

コミュニティカレッジ発足

各　位

野　田　一　夫

「市民への大学の開放」というよりは「市民を対象とした大学の形成」こそは，本学設立以来の基本方針のひとつです。来年以降本格的に実施を予定しているエクステンション・コースに先立ち，その試金石として，本学は来る10月13日㈯午後，第1回「コミュニティカレッジ」を以下のように開催いたします。

12:30～12:45　ご挨拶およびスケジュール説明

・門馬　晋「手紙文化論」　・尾高敏樹「これからのホーム・ワークステーション」（実習を含む）　・楠　光雄「学校で聞けない音楽論」　・近藤隆雄「21世紀の家族関係－家族は消滅するか」

14:25～15:35　総合講座（司会　河野顕／各講座講師出席）

15:45～16:45　特別講座　日下公人「世界は会議の季節」

16:55～17:55　懇親パーティー

「新しい市民文化の創造」というサブタイトルに示されるように，本学のコミュニティカレッジの目ざすところは，受講者が，単に講座単位の教養とか個人的趣味や稽古事のレベルの知識・技能を修得するだけではなく，講座への参加を通して仲間意識を高め，それを基盤にして「コミュニティづくり」とか「コミュニティ同士の交流」，更には「国際的な人間ネットワークの形成」といった活動を展開することです。

そのため，今回の単発セミナーにおいても，その内容と運営方式には工夫をこらしたつもりです。たとえば，個々の受講者は，まず同時刻に開講される4講座のどれかを選択するわけですが，その後総合講座において他の講座の内容をも知りうるとともに，特別講座や懇親パーティーへの参加を含めて，全受講者との交流を深めることができます。さらに，受講者は自動的に本学のコミュニティカレッジの会員となり，いろいろな形でその企画・運営にも積極的に参加して頂くことも期待しています。

青年よ大志を抱け

各　位

野　田　一　夫

ものの見方としての楽観論と悲観論には一長一短があり，何れも極端に走れば事の失敗の原因となります。しかし，古今東西を通じ，難事と取組んでそれを見事に成功させた人間は，例外なく基本的に楽観論者でした。したがって，前途ある青年を，教師は常に楽観論者に導いていく責務があると信じています。

先日，有志学生諸君より本学学内誌の巻頭言をたのまれたときも，私の筆は自然に走って，次のような一文となりました。

今年の多摩大学の案内書の表紙の図柄は好きだ。遠景の紺青の空と蒼くたおやかな峰々と，そして白く逞しい積乱雲……。それらを澄んだ瞳でくい入るように眺める少年と少女，この2人の表情と姿がかもしだす何とも言えない清潔感こそ，近景だ。中間には，陽光を浴びてベージュに輝く一条の坂道，針葉樹林の濃い緑と高原の草むらのあざやかな緑を見事にひきたたせる一条の坂道……。

この絵には希望がある。いや希望を達成しようとする強い意志がある。それも，権力者のように人を威圧するような意志ではなく，人をおのずから感動せしめるような，静かで毅然とした意志だ。そうだ！　このような意志こそ，健康な社会で生きる若者には自然に備わった人間的資質なのだ。不幸なことにいま，社会は健康とはいえない。しかし一群の青年の心にこのような意志が宿るかぎり，社会は必ず健康をとり戻すことだろう。

“21世紀を拓く”といった理想を掲げて多摩大学を創ったわれわれは，それこそ神に祈るような気持で，本学1・2期生の学生一人一人の心に問いたい。「君は，君の人生の坂の彼方に，あの様に輝かしい雲を見ることができるのか」と。

排すべき“閉鎖性”

各　位

野　田　一　夫

日本経済新聞朝刊の「私の履歴書」を読んでおられますか。現在の執筆者は日野原重明博士，国内はもとより世界的にも広く知られた医学界の重鎮です。茅誠司先生のあとを継いで小生が理事長職にあるシンクタンク，(財)日本総合研究所の理事にこの程日野原先生が就任されたご縁で，今週の月曜日夕食をご一緒し，実に興味ぶかいお話のかずかずを伺うことができました。

「…医学部の教授は医学部出身者だけ，しかも，一流を自負する大学では，その大学の医学部出身者しか原則として教授になれません。日本の医学界のそうした閉鎖性が，医学や医療技術の進歩の最大の障害なのです。欧米の一流大学の医学部には，その大学の医学部出身ではない教授がザラにいますし，さらに，医学部でない学部出身者が教授をしていることだって，別に例外ではないのです…」と，先生は嘆かれました。

狂犬病等の治療法を開発して医学の発展に不滅の貢献をしたパスツールがもともと医者でなかったことも，私ははじめて知りました。彼の関心は最初は物理学から化学へ，そしてやがては微生物学へと移っていったとのこと。彼が醗酵の研究を通して微生物の自然発生説を否定し，近代微生物学の端緒をひらくとともに，免疫学を大きく発展させえたのも，こうした経歴と自由な研究態度の結果といえるのです。

そういえば，キャノンの創業者御手洗毅氏も，「ひとひらの雪」や「うたかた」でわれわれ中高年読者の心を酔わせる人気作家渡辺淳一氏も，れっきとした医学部出身者です。わが国では，なぜ医学部出身者でない人材が医学の世界で活躍できないのでしょうか。多摩大学の経営情報学部出身者の中から，将来“経営”や“情報”以外の分野で活躍する人材が続々輩出してこそ，本学の教育が成功したといえるのではないでしょうか。

ネットワーク・パワー

各　位

野　田　一　夫

大学づくりや大学運営に日常的関心と時間を奪われるようになって久しく，本業であった企業経営の分野での情報の収集・分析あるいは文献の渉猟とはすっかり縁遠くなってしまいましたが，毎年９月から10月にかけては別です。まだ日経経済図書文化賞の審査員をしている関係から，この１年間に出版された注目すべき経営書に集中的に目を通さざるをえないからです。自分では本を書かなくなった身で，他人が丹精こめてまとめられた著作の評価をする矛盾をしきりと心に感じながら……。

それに，困ったことに，受賞候補作品を読みながらも，随所で多摩大学の現状や未来についてのヒントや共鳴点に関心が自然にひきつけられてしまうのです。たとえば昨夜は寺本義也氏の「ネットワーク・パワー」（ＮＴＴ出版）を読みふけりながら，私自身がかねてから構想し提唱している“リーグ制総合大学”のことを考えつづけました。世界中の大学の歴史で恐らく誰も考えつかなかったこの形で“総合大学”が誕生すれば，好奇心の旺盛な寺本氏はそれをどう評価するか今から楽しみです。

いうまでもなく，“ネットワーク”の概念は，変化を常態とする経済環境に対応する新しい社会的メカニズムとして，内外の一群の気鋭な学者によってここ数年しきりに研究対象とされています。しかし重要なことは，この概念より先に，先進国の経済社会では例外なくそれを裏づける現実が生れ，しかも年ごとに歴然と動かしがたい現実となりつつあることです。しかし卒直に申して，わが国ではそうした趨勢は，産業界に偏重して進行していく反面，大学の世界では“古色蒼然”の時が流れているのです。私どもがネットワーク戦略を成功させて“リーグ制総合大学”の形をととのえ始めた時，多摩大学は，大学の世界で始めてイノベータとしての評価を確立することでしょう。

3先輩に脱帽！

各　位

野　田　一　夫

25日，中部大学の徳廣龍男元副学長が本学を訪問されました。名古屋郊外に四半世紀前に誕生したこの大学は，徳廣先生が副学長をされた20年間で見違えるように体質改善され，また発展をとげました。本学に赴任前7年間同大学に籍を置いていた松浦敬紀教授は常々このことを私に強調し，今なお徳廣先生を敬愛して止みません。それだけに先生から伺った同大学の経営・教学上のご苦心談は，ひとつひとつ心に泌みました。

27日，磐梯高原で開かれた「第4回東北会議」のキーノートスピーカーとしてお招きを受けました。東北の望ましい未来を論ずる会議で，出席者は東北7県の産・官・学の第一人者約40名。小生はこの講演のために珍しく猛勉をせざるを得ませんでしたが，その際，とくに東北で進行中の最も魅力的なプロジェクト"東北インテリジェント・コスモス"構想の理解に関し，その提唱者兼指導者であられる石田名香雄先生（東北大学元学長）ご自身から賜った暖かいご示唆は忘れられません。

2日，磯村英一先生（東洋大学元学長）より書翰が届きました。先日先生が産経新聞『正論』に寄稿された「多摩大学の退学勧告について思う事」に対し，小生は極めておだやかに反論（9月21日朝刊）致したのですが，先生は，ご自身の文章の言葉の足らなかった点を率直に認められ，謝意を表明されてこられたのです。早速お電話を申し上げ，失礼をお詫びするとともに，近々の再会をお約束して気持よく受話器をおきました。

学長をしていながら，日頃"業界づきあい"を全くしていない小生にとって，週間回顧に3人もの元学長が登場されるのは全く稀有なことです。それにしても，70～80歳の高齢のお三方が揃って矍鑠として今なお第一線で活躍しておられること，これには脱帽のほかありません。

鼓腹撃壤の気分

各　位

野　田　一　夫

先日多摩大学の同僚教授の1人から「動く広告塔のように…」と冷やかされましたが，小生はこの半年間，“多摩大学”のことを喋らせてくれるなら，日本中どこにでも出かけました。幸いその効果は予想以上に上っているように思います。先週水曜の夜も，広島市民大学で第8期の開講スピーチをしてきました。

その晩ホテルに帰り，“ドイツ統一”という歴史的ニュースを報ずるテレビに視入りながら，コール首相が早くも「海外派兵が可能となるよう憲法改正に取り組み始めた」という報道に衝撃をうけました。日本人の間ではマスコミを通して「自衛隊を中東へ派遣すべきか否か」という論議が多分中東紛争が終るまでつづくことでしょうが，悲しいかな肝心な政治家たちには，時代への展望，タイミングを見はからっての決断，また関係諸国へのしたたかな根廻しを期待することは，全くできそうもありません。

翌4日の日経朝刊では駐日イラク大使の「軍を送るのと資金援助するのとには違いはない。金しか払っていないから無罪だというわけにはいかない……」という私共への鋭い批判が掲載されていました。正にその通り，なぜ日本では，政治家もマスコミも，こういう当り前のことが解らないのでしょうか。

旅先のつれづれに，珍しく“天下国家”を憂えていた私を慰めてくれたのが，広島の心暖かい友人達でした。キッチャンこと吉川英司氏（テレビ新広島副社長）は何と朝5時に雨の中瀬戸内海へ出て，友のために漁師と一緒に天然の魚やエビを捕えてくれていたのです。昼食には近藤英雄氏（同社取締役）も加わり，この豪勢な獲物の料理のほか，とろけるような広島牛と信じられない程大量の松茸のすき焼，地元の“だんご汁”……で全員満腹。小生は前夜来の“天下国家の憂い”もどこへやら，正に「帝力我に何をか有らん」の心境で帰京した次第です。

モスクワ大学 ビジネススクールにて

各　位

中　村　秀　一　郎

本学日下公人教授のお誘いで，9月中旬モスクワ大学ビジネススクールの第1回目ソシンポジウムに参加して来ました。日本側の参加者は経営の現場に強い中堅企業の経営者とジャーナリストです。ペレストロイカに関連する外国人主催・参加のセミナーは多いようですが，数人しか出席者のないケースもあるとか。それに対してこのセミナーでは，60名前後のソ連経済第一線の実務家の参加を得て活発な討論に終始しました。昨年創立のこの学校には，伝統ある大学の革新への取組みが感じられます。この学校の理事長でもあるコレソフ経済学部長のシンポジウム冒頭のスピーチは興味深いものでした。

「ソ連経済は大転換期に入っており，①経済的自由原則の実行，②国家的所有の排除，③株式制度・協同組合・個人所有の導入，④上からの指令経済の排除，分権化の徹底，という4つの目標を目指しているが，その歩みはきわめて遅い。ソ連工業生産は45％が産軍複合体に，40％が基幹部門に属し，わずか15％しか消費財に向けられていない。消費者無視の克服こそさし迫った課題であり，さらに世界経済との関係改善，外資導入，インフラの開発などの課題をふくめて，その担い手としてのマネージャー，つまり指令を出すだけでなく，その実行を指導でき，外国の経営のあり方を知り，新機軸を導入しうる人材を輩出することなくして，ソ連経済改革はありえない」というのです。

加えて氏は，産学協同による大学の社会人・生涯教育への取組みは世界的潮流であり，この動きに対応し大学教育を近代化するためにもビジネススクールは必要と力説していました。日本の社会科学系学部に多いマルクス経済・経営学者は，このような動きをどう受止めるのでしょうか。興味あるところです。

モスクワ―何が変ったか―

各　位

中　村　秀　一　郎

今度，モスクワで宿泊したのはメデュナロードナヤホテル，党の迎賓館であったという立派な施設です。ところで，その前を流れるモスクワ河の対岸にはスターリン時代を象徴する建築の一つであるウクライナホテルがあります。じつは1968年，私は海外留学でこのホテルにほぼ1ケ月間，家内とともに，まさにこの季節に滞在していたことがあるのです。もし20数年間ウクライナで眠り続け，突然この9月に目覚めたとすればどうなるだろうかを考えてみました。多分まごつくことは全くないでしょう。ホテルから中心部に行くとき，よく利用した②番のバスも同じようによごれた車体で動いていますし，街の外見は基本的に変ってはいないのです。

ただ生活のきびしさは増したようです。百貨店グムの売場でモノがあるのはわずか1割程度，その代り食料品の自由市場は立派になることはなりましたが，国営市場価格の5倍の価格では客は疎ら，価格2倍の協同組合の売場には行列が出来ています。昔は，歩行者がネットの袋をもって歩いているのがモスクワの市民生活のスタイルでした。なにかを売る行列があれば，すぐ並んで買うためです。ただ今日ではこのスタイルは見当らぬようです。それだけモノ不足が深刻なのでしょうか。

タクシーも乗りにくくなりました。客を選んでいるのです。シュレメチボ国際空港では荷物を受取るのに1時間待たされました。入国審査官がお前はタバコを吸うかとたずねたりします。以前にはなかった，むしろ第三世界で見かける情景です。社会主義経済にはガタが来て，市場経済はほとんど軌道に乗っていないようです。だが，われわれの接触したソ連の知的社会は本当に明るくなりました。この自由な雰囲気が市場経済の基盤づくりに直結することを願わずにはいられません。

広報努力空しからず

各　位

野　田　一　夫

「この間ＮＨＫの『テレビコラム』視たよ。だけど，どうして事前にしらせてくれなかったの？」と*TIMIS*の読者である友人から電話がかかり，恐縮しました。先へ先へのマスコミの対応に追われ，私自身も，自分の放送を視ていなかったのです。

「今年の仕事は“広報”だ！」と決意したのは３月です。何しろ，今年の予算を見るかぎり，費用の発生を伴なわない広報活動を学長自らが徹底してやる以外には，本学の知名度を高める方法はなかったからです。マスコミと私とのつきあいは35年になりますが，今年ほど積極的に，しかも特定の問題（つまり多摩大学）にしぼって応じつづけた記憶はありません。幸い，その成果は予期以上だったようです。過去８ケ月間，書籍・新聞・雑誌・テレビ・ラジオとすべての媒体を通して，“広告宣伝”とは全く関係なく多摩大学はいろいろな形で，またくり返し取りあげられた結果，本学は「新しく小さいながら，充実した施設・設備と優れた教授陣・教育方法を誇る個性的な大学」というイメージを世間に定着させることができたようです。

イメージが実態より先行してしまったことにいささか恥じらいを感じはしますが，少くとも来年の入試には価値のある実績に違いありません。そして，本学へのマスコミの関心は未だ衰えていません。雑誌では“退学勧告”といった現象の底にある本学独自の教育理念や教育方法を探ろうとした大型企画として，近刊の月刊「Asahi」（12月号，６ページ），同「政界ジャーナル」（12月号，14ページ）等があり，テレビでは逆に，本学の教育的試みをニュースとしてより周知の事実として報道する傾向があります。たとえば，日本テレビのニュース（10月31日，午後６時）やＮＨＫ「クイズ百点満点」（11月４日，午後７時20分）等です。お時間があれば，ご笑読，ご笑覧下さい。

中国とモナコ

各　位

野　田　一　夫

モナコ，11月4日，日曜日午後4時，快晴・無風。ホテルの私の部屋の窓越しに，夕陽に照り輝く地中海が絵のようにひろがっています。……丁度先週の今日，万里の長城の上の石段に腰をおろし，こころよい小春日和の陽差しを浴びながら，中国5千年の歴史に思いをはせていた自分が，信じられません。

中国，国土面積約960万平方キロ，人口11億人。モナコ，国土面積2平方キロ，人口3万2千人。昔から旅好きの私ですが，一週間のうちに世界最大級の国と最小級の国とを股にかけて旅したのは初めてです。北京では，中国の指導者が，経済発展の目論見と決意を力強く語ってくれました。しかし万里の長城がいみじくも示すように，大国には昔も今も，小国には考えられないような悩みと負担が指導者の肩に重くのしかかり，国家繁栄の実績はとうてい一朝一夕には望むべくもありません。

その点小国は，良き指導者を得て国民がその気になりさえすれば，短期間で変身をとげます。19世紀半ばまで，コートダジュールの片隅の一寒村にすぎなかったモナコは，世紀末には，ヨーロッパの上流階級の一大社交場と化していました。シャルルⅢ世の先見と決断によりカジノが導入され，それを中心に，豪華なホテルの建設と海岸の整備が行なわれたからです。以来百年，レジャー大衆化の時代的趨勢に乗り遅れることなく，モナコは今や，スポーツ，芸術，各種イベント，コンベンション……とあらゆるエンタテインメントを心憎いほど巧みにそして綜合的にとり込み，世界で最も魅力に富む，美しくかつ安全な観光地としての名をほしいままにしています。カジノの収入はモナコの全収入のわずか4％を切ろうとしているとのこと……。

時代の趨勢を察知しつつ常に“卓越した小国”指向の戦略で成功したモナコの歴史は，小さい大学多摩大学にとって無上の教訓を与えてくれます。

平成２年１１月16日

Voice 調査委員会

各　位

中　村　秀一郎

多摩大では，この11月，Voice（学生の声）調査委員会を設置し，全講義で，授業に対するアンケート調査を実施することにしました。アメリカの大学で普及している学生の授業評価は，日本の大学では全く実行されていません。ただし例外として，国際基督教大学が一般教育科目に限定してこれを実施（週刊教育89.6.20号），筑波大学が近く「検討３年激論の末」実施に踏み切ると伝えられています（朝日新聞90.4.12）。

多摩大での学生の声調査は，筑波で考えられているという教員の業績評価，特別昇給，昇格の資料づくりを目的とするものでは全くありません。

我々は，高い授業料を払って教育サービスを購入する学生は，いわば消費者であると考えます。企業は，消費者からの声を受けつける消費者部門を設け，自社製品やサービスへの消費者の反応を聞き，その改善に役立てています。また，大学の消費経済学やマーケティングの講義では，そうすべきだと説いています。とすれば，大学だけが例外というわけにはいかないはずです。もちろん企業の場合でもそうであるように，消費者の声が100％正しいわけではありません。しかし，顧客の声に謙虚に耳を傾けることは，サービス機関がやらなければならないＡＢＣであります。

多摩大での調査は，消費者学生の声に耳を傾け，教師がそれぞれの講義の内容の向上と，教授法の改善と進歩に役立てることが目的であります。それゆえ，調査結果は各教師に直接伝えられるだけで，教授会での審議の対象になることもありません。ただし，個々の教師がその調査結果を持ち寄って，比較検討し，授業のあり方についての研究会を開くことは，まことに好ましいことだと考えます。

二通の手紙

各　位

野　田　一　夫

ヨーロッパから帰ると，いつものように，山積していた仕事の処理に追われて，貴重な時はあっという間に過ぎて行きます。出張中に届いていたたくさんの手紙を読み，ご返事を差上げるのもなかなかの負担ですが，今回は心に残る手紙が２通あったことは救いでした。

ひとつは，多摩大在学生の父親の方からの匿名の手紙で，多摩大の経営および教学上の事柄に関して「日々新たな前進がどんな風になされているのか」また，学生の学業成果に関し「本人がどんなレベルにあるか」，以上の２点を家庭に随時報せて貰えないものかというご提案でした。何れもごもっともなご提案だと同感し，前者に関しては「多摩大新聞」を編集発行するとか，後者に関しては現在の「アドバイザー制度」を活用するとか，何れにせよ早速次回の教授会で具体案を検討しようと考えております。それにしても「……バイトにバイクにクルマと勉強の時間がどの位あるのか……」と息子さんのことを案ずるお父上の気持が私の心に伝ってきて感激しました。

いまひとつの手紙の主は，某大学の１年生。多摩大の入試に失敗しながら，なお多摩大への執着を捨てきれず，室伏哲郎編『多摩大学』を読み，新聞・雑誌に掲載された多摩大の記事を追い，機会あれば編入試験に挑戦してでも多摩大に入りたい等々，綿々と書きつづられた文面にその心情があふれていました。入学したいという熱意で入学を許すわけにはいきませんが，どうせ入学させるなら，そうした熱意のある学生をこそ選抜したいものです。妙にしらけきった輩，考え方のひねくれた輩，礼儀知らずの輩……日常こんな学生に接するにつけ，入試の成績が多少良かったからといって，何でこんな連中を合格させたのかという気になるのは，果して教育者失格の証しでしょうか。

教え甲斐のある学生

各　位

野　田　一　夫

私が理事長職にある(財)日本総合研究所は，開設以来，ハーバード大学の卒業生が次々に研究員として働らきにきています。全て，私の30年来の親友エズラ・ヴォーゲル教授の弟子で，学生時代から日本に関心を持ち，日本語の基礎を学んでから来日したわけです。半年も働らくと彼らの日本語は一様に見違えるように達者になるわけですが，日本語の会話力のみか，読解力，文章表現力……といった綜合点で文句なく№1はマイク・ベレット君で，彼は目下多摩大で「ビジネス英語」を教えています。

その彼の最近の憂鬱は，学生の基礎学力の低さとヤル気のなさです。英語はいうに及ばず，日本語の水準も驚く程低い上に，講義にほとんど出てこないという学生も多いからです。先日，「……出席を強制してもっときびしくしめ上げたら……」という彼の提案に対して，私は彼を慰さめ励ましながらこう答えました。「……学生に出席を強制するのも学力水準の低い学生を進級ないし卒業させるのも，私の理念に反する。したがって，幸い何人かついて来る者がいたら，他の者のことは考えないで，かまわんから彼らにだけ教育の情熱を注いでくれ……」と。

多摩大は教育上学生のためになると思うことはできる限り実行するつもりです。しかし，それでもヤル気のない学生のことを私共は余り案じたくありません。それは何よりも教員のヤル気を喪失させてしまうからです。1～2期生のうちから，たとえ50人でも60人でも，私共が多摩大学を設立した理想を体して卒業していく学生を教育できれば，多摩大が設立された社会的意義は十分あるのです。私共の努力が実り，多摩大の評価が高まるにつれて，年とともに教え甲斐のある学生は確実に増えつづけ，やがて学生全員が多摩大の理想を体して卒業していく日が必らず来ることを，私は信じて疑いません。

TIMIS－87　　平成2年12月7日

品格と表現力

各　位

野　田　一　夫

先週出張先の広島のホテルで朝出発前，英国の新首相ジョン・メージャー氏およびシンガポールの新首相ゴー・チョクトン氏の所信表明を視聴しました。どちらも甲乙なくさわやかな印象を与えてくれたのは，①顔つきや態度ににじみでる品格，②47歳と49歳という年齢以上の若々しさ，③簡潔にして内容のある所信表現力のためで，多少の偏見があるかも知れませんが，わが国の政治指導者に揃って欠落している人間的属性です。

ほぼ同じ時期にわが国でも財界の最高指導者の交代が報じられましたが，78歳が退任して75歳が新任されるということは，お二人の人格・識見とは別に納得できないというのが，国民大衆一般のいつわらざる気持ではないでしょうか。ことに品格や表現力は単なる年齢の積み重ねによって備わるものではない以上，指導者たるもの，この2つの属性だけは身につけておくことが，わが国の"国際化"への必須条件と思われてなりません。

メージャー氏はいわゆる"学歴のない"という点で，英国保守党の党首としては異例中の異例だといえます。しかし，いかに有能でも，氏が遅くとも30歳までに今の品格と表現力を身につけていなかったなら，サッチャー前首相に目をつけられ，閣僚に抜擢されることはなかったでしょう。その意味で，品格と表現力こそは，わが国以外の国々では，能力と同等あるいはそれ以上に重要な人間的属性であると信じます。

ご承知のごとく，多摩大では1～2年次の一般教育の課程で，書く・話すという日本語の表現力を必須科目とし，絵画，メロディー，演技による表現力の1つ以上を選択科目にしています。その効果の程は今のところわかりませんが，大学卒業までに学生の人間としての品性を高めるための方法とか対策には目下頭を痛めております。何かいいご提案はありましょうか？

THE ENIGMA

各　位

野　田　一　夫

目下話題の書，カレル・ウォルフレンのTHE ENIGMA OF JAPANESE POWER（邦訳，篠原勝訳『日本権力構造の謎』，早川書房）は，Japan perplexes the world.という簡潔な非難調で始まります。超大国でありながら一向にその責任を果そうとしない日本に対して諸外国が圧力をかけようとしても，この国独特の権力構造には責任の究極的所在がさっぱり不明で，そのことが世界を苛立たせ当惑させてしまう，というのです。

政治家，高級官僚，財界人といったアドミニストレーターのみならず，労組や学校や暴力団を含めすべての社会構成セクターまでを抱き込んだ壮大なpower processが存在し機能している日本は，国家（state）と呼ぶより，"ザ・システム"と呼ぶにふさわしい……等々，本書を読み進んでいくと，日本の権力構造の魔訶不思議なクモの巣の中で悪戦苦闘をしている著者の知性が痛い程心に伝わってきて，すっかり考えさせられます。

ふと，これも今年話題の，渡辺淳一『うたかた』（講談社）の主人公たちを想い出しました。妻のある熟年の男（安芸）と夫のいる中年の女（抄子）との延々と果てることのない単なる情欲の物語りなのですが，折り折りの密会の立居振舞や背景となる自然の描写の美しさの故に，二人の関係が読者には"不倫"というより"純愛"とまで感じられるのです。「自然の移ろいとともに，二人がそれぞれの家に残してきた愛情も未練も憤怒も，また歳月とともに色褪せていく。……振り返れば，すべてうたかたのごとく儚い」という詠嘆調でこの作品は終ります。

結局，私的にも公的にも欧米的意味での"責任"倫理が稀薄なことが，日本の社会の特色といえます。日本人一般にこの倫理を期待することは無理ですが，少くとも大学生ぐらいにはこの事実をはっきりと理解させておく必要はあると信じます。

春の時代を迎える大学

各　位

野　田　一　夫

今や文部当局や大学経営者の間では「日本の大学が〝冬の時代〟を迎えようとしている」という認識が常識化しています。この認識の最大の根拠は，平成3～4年をピークに18歳人口が減少に転じ，現在200万人の人口が21世紀初頭には150万人を切るであろうという予測にあります。

しかし私は，かりにこのデモグラフィックな予測が的中したとしても，だから日本の大学の経済環境が全般に非常に厳しくなるとは，とても信じられません。この間に大学の経営にとっての好条件も進行してくるからです。その典型的なものが，80年代以降社会人の間に高まりつつある知的好奇心です。

朝日カルチャーセンターに象徴されるように，老若男女を問わず社会人を対象として教育産業は花盛りですし，文部省も高齢化社会に対応して〝生涯教育〟を重要な政策課題としています。社会人が教育欲求を充すためには時間と経済の余裕が必要ですが，明治開国以来百有余年にして，わが国では庶民レベルでやっとその条件が充たされてきたのです。社会人こそこれからの大学にとって新しいそして無限に拡大する市場です。

次は外国人です。逞ましい経済力と不可思議な文化的魅力によって，外国人の日本への関心は高まるばかりです。この関心に対して日本の大学は果して積極的な対応をしているでしょうか。少くとも欧米の大学，ことに米国の大学では，外国人に対して一般に門戸は広く開放されているのに，日本の大学の現行の制度や慣習は，逆に外国人を排除しがちです。

「大学は高校卒業直後の若者を教育するところ」という在来の考え方を改め，時代の要求に沿って教授陣，教育の内容と方法，建物・設備等の刷新・拡充に成功しさえすれば，日本の大学は，これからやっと〝春の時代〟を迎えることができるのです。

多摩大学の光と影

各　位

野　田　一　夫

光がさせば影ができます。光が強い程影も濃くなります。それは単に物理的現象だけでなく社会的現象についてもいえることです。たとえば，現在の多摩大学の場合です。

今年，多摩大学は世間の脚光を浴びました。開学の方針に基づいて実施に移した制度や方式に対してマスコミが予想以上の関心を示し，いろいろな形でくり返し報道してくれたからです。別に本学の方から売り込んだわけではありませんから，本学が浴びた脚光は多分に好運に恵まれたからといえます。

まず何が好運であったかというと，大学の伝統的“権威”が揺らぎ始めていたことです。大した教育の成果があがっていないのに大学自身が一向に改めようとしない世間離れした制度や慣習に対して，人々が疑念をつのらせつつあったのです。『文学部唯野教授』は正にそういう大学ないし大学教授を扱ったパロディーだからこそ爆発的人気を得たといえます。

マスコミが好んでとりあげ喧伝してくれた本学の“退学勧告”にしても，“休講なし”“講義定刻”“年間講義案”……にしても，すべて世間の常識からすれば当り前のことばかり。この当り前のことを真面目に実施しようとしている，というだけで世間は喝采を博し，エールを贈ってくれました。しかし，銘記せねばならぬのは，私共が実施に移した当り前の制度や方式の成果を，世間が評価したわけではないことです。

多摩大学の教育は期待された成果を十分挙げている段階とはいえません。最近つとめて教員の方々や学生諸君に接した印象では，本学のイメージにそぐわない学生も未だかなりおり，一部の学生はイメージに重荷さえ感じているようです。光が当ったからこそはっきりしてきたこの“影の部分”，これこそ，来年度私共が克服すべき最重要課題と信じます。よいお年を……

TIMIS − 91　　平成３年１月４日

今年の主役は学生だ！

各　位

野　田　一　夫

新年おめでとうございます。誰もが元旦には新年の目標を心に抱くものですが，私のそれは標記の「今年の主役は学生だ！」という言葉に集約されます。*TIMIS*-82でも記したごとく，昨年春私は「学長の仕事は広報だ！」と割り切り，新設多摩大学の知名度を高め，また良きイメージを形成するためにあらゆる時間を割きました。幸いこの広報努力は予想以上に実り，今や多摩大学は「小さい新設校ながら大きな理想を掲げ，個性的教育を推進している……」というイメージを確立するとともに，知名度も信じられない程高まったといえます。

しかし，大学の真の評価は，その大学がどんな人材を世に送り出したかによって定まるものです。いよいよ今年４月から専門課程の教育が始まり，就職対策にも本腰が入ります。２年後就職先の方々から「さすがは多摩大学の卒業生だ」と評価されてこそ，私共がつくりあげたイメージは実のあるものとなり，そして永続的に輝きを放ちつづけるわけです。したがって，新年を期して私共は，過去２年間の本学の教育を総点検しつつ，教職員一体となって所期の教育成果の達成に全力を尽くすつもりです。その成否は学生を主役になしうるか否かです。

たとえば昨年末，望月照彦教授の基礎ゼミの発表会がありましたが，その席に来賓として招かれていたある企業経営者は，交互に主役をつとめた学生たちのプレゼンテーションの内容と技術に目を見張り，同席していた中村学部長に「……とても１，２年生とは思えない……」と洩らされたそうです。まことに力強い話です。現代の若者には私共の世代でははかり知れない才能とポテンシャルがあります。彼らが多摩大学に学ぶことによって知に目ざめ，個性を自覚し，自信に充ちて人生を歩みだすこと，それを実現することに本学の存在理由があるのです。

大学設置基準の大綱化

各　位

中　村　秀　一　郎

大学のあり方についての文部省の考え方は大きく変りつつあるようです。大学審議会大学教育部会および高等教育計画部会における審議の概要（平成2年7月30日，10月31日）には，それが端的に示されています。ここでは，これまで大学のカリキュラムの枠組を細かく規定してきた大学設置基準を大幅に簡素化し，それを大綱化することを主張している点が注目されます。

これは革命的な提言といって良いでしょう。なぜなら，もはや学生の卒業要件としては修得すべき単位数が規定されているだけだからです。つまり，大学の各学部はその教育目的達成のために必要な授業科目を自由に開設しうることになり，これまでのような一般教育科目，外国語科目，保健体育科目，専門教育科目の区分によって，それぞれの開設を義務づけられることはなくなります。はじめて各学部が個性的な特徴あるカリキュラムを本格的に展開することが可能となったのです。

「大綱化」は，大学設置認可のあり方をも大きく変えることとなります。大学の評価については大学自身による自己点検・評価が基本となり，それを効果的に実施するために，アメリカのアクレディテーション・システムのような，大学団体などが，各大学の自己評価の検証を行って，その客観性を裏付けることが期待されているのです。いってみれば，これまでの国の大学管理が，大学の自主管理に委ねられることになるのです。

この大学行政の大転換は，多摩大のように，一般教育科目等と専門科目の境界線を低め，担当者の相互乗入を進めて，独創性あるカリキュラムを追求している大学にとっては歓迎すべき事態です。その反面，設置基準のカリキュラムの枠組が既得権化し固定化してしまっている既成の多くの大学にとっては，実現困難な問題を投げかけたことになるでしょう。

理想は遠のいていないか

各　位

野　田　一　夫

「……立派で有名な教授陣を揃え，その情熱もすごいもので，私たち学生にとってこんなありがたいことはなかった。ところが，この教授陣に思わぬ落し穴があったのです。有名で立派なゆえに外での仕事の方が忙しいらしく，大学での講義がなおざりになっているのでは，と感じられる先生が目に付くようになったと思う。……」「……〝多摩大学は他の大学とは違う〟と言われているが，実際にどこが違うのか。……他校の学生が私たちをうらやましがっていることを知りました。それを聞き，はずかしく思います。……何かが間違っています。（本学は）間違った道を進もうとしています。今，この道を正しく直す必要があると思います。……」

何れも本学の学生の本学への率直な所感です。正月休みに，一冊のリポートとして届けられた何人かの学生諸君のこうした声に，私はじっくり耳を傾けました。読み進む過程で私の心に僚友中村学部長の名言―「多摩大学の敵は多摩大学である」が何回も蘇り，読み終えた時は一種厳粛な気持にさえなりました。いよいよこの4月から専門課程の教育が始まりますが，その前に私どもは本学の教育体制を総点検し，もう一度清新な雰囲気をキャンパスの中に蘇らす必要が絶対にあります。

「多摩大学の現実がその理想から遠のきつつあるのではないか」ということを最初に私に直言してくれたのは，松尾欣治氏（学生教育研究所主幹）でした。ある雑誌に本学の記事を寄稿する目的で本学を視察し，学生の何人かをインタビューした後の，氏のいつわらざる感想でした。なぜかピンときた私は，早速本学教職員諸兄に順次アピールし，また松尾氏自身にも協力を仰いで，学生の活力を振興する策をいまこうじ始めました。私共は何としても，建学の理想を実現しようではありませんか。

41歳寿命説

各　位

野　田　一　夫

最近読んだ本の中で，面白さ（感銘度とは別に）の点で，西丸震哉氏の「41歳寿命説」の右に出るものはありません。本書で氏は「昭和34年以降に生まれた日本人は，平均寿命41歳という短命になる」という説を，とうとうと述べています。

少くとも経済的には，わが国は目下未曾有の繁栄を謳歌しています。そして，この間日本人の平均寿命が男女とも世界一となったことは，繁栄の何よりの象徴的事実といえましょう。だが西丸氏は，この事実の裏にあるトリックを指摘するとともに，一歩進んで，繁栄日本に対し深刻な未来を予告するのです。

なぜ昭和34年が転換点なのか？　なぜ41歳なのか？　なぜかくも急速に短命化するのか？……氏の説に対しては，当然のことながら専門家の中から多くの疑問や反論が投げかけられています。いやむしろ，荒唐無稽の説と一笑に付す人々の方が多いのかも知れません。しかし，わが国の一般大衆が，氏の説から大きな衝撃を受けるのはなぜでしょう。

どうやら現在の日本人の中には，わが国の巨大な経済力にふさわしい高遠な理想や逞しい抱負に胸をふくらませる人々はほとんどいません。むしろ，彼らの大部分の心は，この繁栄に突然の終幕を告げる破局の到来をひそかに感じとり，その影におびえているようです。

「10年後には（大学を出て7，8年，やっと社会人として一人前になった年代層の人々の）半数がもはや存在せず，生存者もかなり体力を落としているという惨状を呈する。そんな連中でこれからの社会を責任をもって担ってはいけない。だから大学に行く必要はなく，大学出は役立たずになる。……そこで社会は大卒者をもう間にあわないグループとして拒絶する筈である」……実に明解な“大学冬の時代”論ではありませんか。

各　位

そんな少年よ

野　田　一　夫

先日大学で，学生の一人と熱い議論をたたかわしました。話題は〝ゼネレーション・ギャップ〟。相手はなかなか頭のキレる学生で，「私達の世代の気持なんか，年をとった人達にはどうせ100パーセントは理解できっこない」と言い張るのです。それに対して私は「そんなこと当り前。国，性別，職業…何が違ったって，人と人とのコミュニケーションは昔からむつかしい。しかし，人間お互いの気持が通じれば，理解度は無限に深まっていく。なぜ100パーセントにこだわるの？」と反論。

この議論の余韻さめやらぬ数日後，ある雑誌の読者欄を開くと，徳岡孝夫氏の檄文「若者よ，中東で死ね！」に対する23歳の学生の投書が目につきました。「…あなた方中年オジさんこそ中東で死んだらどうだい。一生働いたところで家は持てない。（…残業して）酔い潰れて最終電車で帰れば女房子供に冷たくあしらわれる。滅私奉公してきた会社からは辞令一つで左遷され，行きつく先は突然死。生き永らえても老後の面倒見る者なし。それよりも……」と，まことに心寒い〝悪口雑言〟。

ひどい国になったものだと教授用ラウンジで嘆いていた私に，同僚の門馬晋さんが，井上靖の「そんな少年よ」をコピーにしてそっと手渡してくれました。「…私は何回もポストを覗きに行った。私宛ての賀状は３枚だけだった。３枚とは少なすぎると思った。自分のことを思い出してくれた人はこの世に３人しかなかったのであろうか。正月の日の明るい陽光の中で，私は妙に怠惰であり，空虚であった。私は15歳だった。あの日の私のように，人生の最初の一歩を踏み出そうとして，小さな不安にたじろいでいる少年はいまもいるだろうか。いるに違いない。そんな少年よ，おめでとう。…」の文章に胸うたれました。

有難う，門馬さん！私と議論した学生に，近くヘミングウェイの『老人と海』を贈るつもりです。

内は福，外は鬼？

各　位

野　田　一　夫

今年の節分も終りました。節分といえば豆まき，豆まきといえば「福は内，鬼は外」です。「鬼が自分の内（家）に入ってこないように外に追っぱらいさえすればよいという考え方は，いかにも日本的である」という批判もあります。一応もっともな意見ですが，よく考えてみると，何とも筋が通りません。いったい，「福は外，鬼は内」という自己犠牲的ないし自虐的考え方のまかり通る国はあるのかというと，ある筈はないからです。

一昨日，昨日と多摩大学は本年度の入学試験を行いました。臨時定員増で収容定員は昨年に比し倍増したのに志願者もふえて，今年も名目倍率は25.2倍という“狭き門”です。当然のことながら，本学の基準に照らして好もしい若者を合格させ（福は内），残りを不合格にする（鬼は外）わけですが，このやり方は古今東西を通じて，あらゆる機関が押しよせる志願者を選考するための普遍的原則ではないのでしょうか。

では何が日本的かといえば，それは「内は福，外は鬼」と表現すべきでしょう。すなわち，わが国では，同じ集団なり組織に属する成員の間には没個人的一体感がみなぎり，外部の人々に対しては考えられないほどの排他性がはたらくのです。大学についていうと，入試はひどく厳しくても，一度入学した学生は，どんなに学力が伴なわなくても卒業させてやろうとします。教員でも，仲間の怠慢には寛容である反面，外部の有能な人材を迎え入れることには本能的抵抗を示す傾向があります。会社でも役所でも日本人の集団には，とかくこうした湿潤な仲間意識がつきものです。それは健康な人間関係をむしばみ，逞しい連帯感の形成を阻み，遂には理想とか正義といった根源的なものまでを風化させていきます。多摩大学は，日本人の組織としても21世紀型ニューモデルを開発し定着させたいものです。

哀れなるかな“生涯現役”

各　位

野　田　一　夫

わが国内では目下，2つの引退話が世間の注目を集めています。申すまでもなく，鈴木都知事と堤セゾングループ代表の引退に関してです。80歳の鈴木氏は“生涯現役”という信念をもって先日立候補を宣言。一方63歳の堤氏の引退表明には，その背景と真意をめぐって，さまざまな憶測が飛びかっています。

80歳の人が引退を表明し，63歳の人が引退勧告を蹴ったというのなら，引退話としてはごく自然ですが，それが逆であるという点で，この話題は私を考え込ませます。社会的影響力の大きいポストであればある程，それを占めている人が何歳で引退するかは，当人の意思と周囲の情勢に依るほかはないでありましょう。しかし個別論ではなく一般論として考えた場合，“生涯現役”論ほど危険なものはありません。

なぜなら，①肉体面にはもちろん（目には見えにくい）精神面においても，人が70歳代，80歳代と老いていくのは自然であり，②強いリーダーの在位が長びけば，必らずといっていい程その周辺には権力体制ががっちりとつくられる結果，組織自体が環境への柔軟な対応力を失い，③優れた後継者を含め後進育成の途は全体として阻まれてしまうからです。

したがって私は，どんな理由にせよ堤氏が引退を表明したことに賛意を表し，逆に，鈴木氏が立候補されることに疑念を感じます。鈴木氏の精神は果して肉体以上に若く保たれているのか？　鈴木氏を支持する勢力は鈴木氏自身より現在の体制を頑固に守りたいのではないか？　鈴木氏にはどんな後継者構想があるのか？　これが一都民としての私の疑念です。

因みに，私自身が“生涯現役”などと言い出した時，私の精神は間違いなく老化してしまったとご判断下さい。本学学長に任期制を定めた最大の理由です。

“良い・悪い”から“好き・嫌い”へ

各　位

野　田　一　夫

入試が終ると入学式，入学式が終ると来年度の学生募集の準備，まずは「学校案内書」の制作。昨年は出遅れて苦労しましたが，今年は素晴らしいものができそうです。先日Ｒ社の若いスタッフのプレゼンテーションがありましたが，その発想とセンスの斬新さにすっかり感心し，そんな自信が生まれました。

「第２次大戦後，大学は数％の特権階級から解放され，誰もが平等に利用できるようになった。ところがその後半世紀，大学は人々の期待外の方向に進むことになる」という認識に立って過去40余年を“大学先史暗黒時代”と呼び，多摩大学こそ時代を突き破るパイオニアだという提案です。これだけでは何となくくすぐったい気がしますが，実はこの先が傑作なのです。しかし，学外秘でここでご説明できないのが残念です。

このプレゼンテーションを聞いていて，最近谷口正和氏から贈られた『10代スキキライ白書』のことを想い出しました。今や日本人の消費の判断基準は「良い・悪い」から「好き・嫌い」へ変ったといわれますが，本書は時代を最も敏感に感じとる十代の少年少女156人を渋谷の街頭でインタビューし，その所見から21世紀の経済社会を洞察しようという異色の本です。

「本木雅弘，真木蔵人……」「プリンセス・プリンセス，ユニコーン……」「Fine，Mcシスター……」，ご存知ですか？彼らが好きな芸能人，音楽バンド，雑誌の順位です。逆に「東大，国士館……」「三越，東急……」「新宿，竹下口（原宿）……」が嫌いな大学，百貨店，街の順位です。古ぼけた権威，洗練されない華やかさ，幼稚っぽい媚び等々は見事に否定されています。多摩大学は単に“良い”大学を目ざすだけでなく，若者にたまらなく“好かれる”大学になる必要があると，つくづく感じさせられました。

大学設置制限への疑問

各　位

中　村　秀　一　郎

大学審議会による大学設置基準の大綱化がもつ革新性についてはすでに広く評価されていますが，それに関連して高等教育計画部会審議概要にも示されている「首都圏及び近畿圏における工業（場）等制限地域については，現行計画に引き続き，大学・短期大学の新増設は原則として行わない」という大学の地域配置の考え方は，とくに再検討を要望したいところです。

もともと大学が「工場規制三法」によって規制されるというのは，まことに奇妙なことといわざるをえません。こうなったのは，最先進地域では過密と環境破壊を喰いとめるという目標達成のために，大学は過密を促進するものと位置づけられてしまったからです。しかし工場を問題とする発想でさえ，ＦＡの時代，公害防止先進国日本では，すでに過去のものとなり，むしろ大都市における工業をふくむ産業のバランスこそその活性化のキメ手とみなされる（東京都「地域産業振興ビジョン」）に至っています。

まして情報化のるつぼとでもいうべきこの地域こそは大学にもっともふさわしい学問的環境であることはいうまでもありません。もし国土のバランスのとれた発展のために，それが有害というのでしたら，首都・近畿圏大学と地方大学とのネットワーク形成を進めたらどうでしょう。これによって教師も学生も巨大都市と地方の双方の良さを享受できることとなるからです。

この１月，国土・運輸・建設・通産の四省庁連合による東京湾南西地域総合再生計画調査委員会が発足し，2010年を目標にこの地域の再生計画の作成が開始されました。筆者は通産側の委員長をお引受けしていますが，このなかで，情報化先進地域における研究機関と高等教育機関のあり方について，積極的な見解を表明したいと考えています。

アッシー・メッシーの時代

各　位

野　田　一　夫

いよいよ近く多摩大学の新聞 THE TIMIS が発刊されます。学生の有志が編集の責任を負い学校側が物心両面で衷心協力するという形で，作業が進められています。編集部員5人は，編集者の公募が行われた際率先申し出てくれた学生で，1年生の男子ばかり。いざ仕事が始まると，取材その他でどうしても女性の協力が必要であることがわかったため，5人の男子編集部員が手分けして適当な女子学生をくどき落そうということになりましたが，結果は失敗に終ったようです。

戦前派の私なんか，その話をきくと何とも情ない気持になります。仕事にもっと情熱と理想と自信があったなら，どんな女性の協力だって得られない筈はないと思ってしまうからです。しかし，余りそう思い込むことも間違いのもとかも知れません。時代は大きく変ったからです。先日某テレビ局の有名美人キャスターが離婚するに際し，何と原稿用紙400字にして550枚に及ぶ14通の手紙を彼女に綿々と書き送った夫は「彼女からは一通の返事ももらえなかった」と涙を流して嘆いたとのこと。何と女々しい男でしょうか。それに反し，この件に関し一切弁明しなかった彼女の立派さ！

先日大学生のわが娘が「私のことではない」とわざわざことわって教えてくれた現代女子学生のボーイフレンドの類型は，「キープ君」（本命の人が見つかるまでの束の間の人），「ミツグ君」（欲しいものをねだる相手），「アッシー君」（車の必要な時の友達），「メッシー君」（食事をおごらせるための友達）……。これでは男子学生も浮ばれません。希わくは，この軽薄にして不遜な女子学生どもに神が天罰を下されんことを，と祈りつつ，ひたすらに天使のような女子編集部員の出現を待ち望む日々です。

パラダイム変換

各　位

野　田　一　夫

トーマス・クーンが好んで使った“パラダイム”という用語は今や時代の流行語のひとつです。ほとんどどんな分野でもこの用語が使われる反面，余りに使われるためにその概念内容はますます曖昧になっていくばかりです。現実は早いテンポで多様に変化していくのに，現実を理解するための思考の基本様式や枠組みはそれに応じて変化しませんから，いつしか，既成のパラダイムが新しい現実の理解を妨げたり，偏見や固定観念を生みだしたりしているのみか，好ましい現実を形成するための表現とか発想そのものを圧迫しさえします。

本学の井上一郎（ペンネーム，那野比古）教授から数週間前に恵贈された近刊「東大先端研」（ＮＴＴ書房）を，この週末やっと通読しましたが，本書は，大学研究機関における典型的パラダイム変換の試みとその成功過程に関する誠に説得力のあるリポートです。1987年４月に発足したばかりの東京大学先端科学技術研究センターは，東大の付置機関でありながら，東大の各学部や研究所とは全く違った制度と運営方式を導入しています。センター長をはじめ各教授連が“学際性”，“流動性”，“国際性”，“公開性”という４つのモットーに共鳴して，本郷や駒場から進んでここへ移ってきたからです。

積極的な産学協同の推進，時限任期制とか学外（他大学，産業界等）からの客員教授制の導入，自然科学と社会科学の境界の打破，日本一ではなく世界一を目ざす研究……は全てこうした方針の産物です。本学も国際性・学際性・実際性という３つの教育方針をかかげ，在来の日本の大学とは全く違ったパラダイムのもとで発足しましたが，東大先端研に典型的にみられるような，私共よりもっと先を行く教育・研究機関の試みを常に注目しつつ我が身を反省しつづけていきたいものです。

平成３年３月22日

コミュニティ・カレッジ '91

各　位

野　田　一　夫

「市民への大学の開放」と「社会人を対象とした各種活動の展開」という本学の基本方針に沿って昨年秋から手さぐり的に“多摩大学コミュニティ・カレッジ”（略称：ＴＣＣ）が開講されましたが，幸いその結果は好評でした。これに力を得て本学では，今年は昨年より一歩進んだ形でＴＣＣを開催致します。

今年度のＴＣＣの柱は(1)通常講義の公開，(2)特別講座＆ミニコンサート，(3)コンピュータ講座です。(2)と(3)は内容的に昨年のＴＣＣの延長で，(2)は５月下旬から11月中旬にかけて土曜日午後，井上宗迪，山口令子，木村尚三郎，青井紀子，門馬晋，日下公人氏を講師とする全６回の講座，(3)は尾高敏樹，今泉忠，川端敏郎３講師による①日本語ワープロソフト（一太郎Ver３）を利用した入門講座，②Ms-Works を利用したコンピュータソフト活用講座，③プログラミング講座（PASCALを用いて）の３コース，何れも９月から12月にかけて各24時間の講座です。

今年度からのはじめての試みは(1)で，井上一郎教授「自然科学概論」（月曜14:40〜16:10），井上宗迪教授「日米企業経営論」（月曜14:40〜16:10），井上一郎教授「コンピュータ概論」（火曜9:00〜10:30），山本満講師「国際関係論」（火曜10:40〜12:10），日下公人教授「日米企業論」（水曜10:40〜12:10），星野克美教授「消費経済論」（水曜10:40〜12:10），志賀信夫講師「コミュニケーション論」（水曜14:40〜16:10），金子満講師「映画演劇論」（木曜9:00〜10:30），白根禮吉教授「情報概論」（木曜14:40〜16:10）といった豪華版です。

受講者全員には本学図書館を自由に利用して頂ける等の配慮も致しますから，ご関心を抱かれる方は，多摩大学ＴＣＣ係（〒206 多摩市聖ケ丘４－１－１）宛に資料をご請求下さい。なお，問い合せのお電話は 0423-(37)-7111です。

各　位

ボイス（学生の声）調査の所見

中　村　秀　一　郎

学生の声に耳を傾け，教師がそれぞれの講義内容の向上と教授法の改善・進歩に役立てることを目的とした多摩大ボイス（学生の声）委員会は，調査（昨年12月10日～14日実施）結果を２月16日に公表しました。個人別の集計は，私から直接に各教師にお渡ししてあります。早くも今週のAERA（４月２日号，朝日新聞）はこの調査を大きくとりあげています。

全体集計（配布枚数2,351枚，有効回収率67.5％）によって，多摩大の学生による教師の教育効果評価（７段階）を見ると，中間点４点を超えるもの83.6％，最高点（６～７）38.5％に達し，「説明が明解」「全体としてまとまりがある」等9項目による授業内容評価（５段階）も平均値（３点）をこえる3.51となっており，講義は一応の評価を得ているものと思われます。

調査表には，学生諸君の授業に対する意見や感想も多く書かれています。そのためもあって，各自の調査結果の公表を入会条件とする教師有志による「授業マネジメント研究会」も発足しました。３月16日その第一回会合を傍聴していますと，学生の意見をめぐって「やはり聞いてよかった」「それは気付かなかった」「ここをこう変えてみよう」といった卒直な意見が交わされているのが印象的でした。

学生側の全く見当違いな意見もありますが，教師の気持をおしはかった改善策の提案が圧倒的です。調査委のリーダー，大槻博教授の話では，私共のこの試みについて大学人からの批判があり，ただしそれらの多くは，「学生は躾けの対象」「その意見をありがたく拝聴しようとする姿勢は疑問」「学生は教師の評価能力なし」といった見解のようです。本学では，これらとは逆に，まず粉飾されない学生の声に耳を傾けるのを教育の原点と考えているのですが……。

“大量留年”に想う

各　位

野　田　一　夫

今年も４月に入りました。３月末といえば“卒業式”，４月初めといえば“入学式”というのが，わが国の慣習です。この季節に今年マスコミを通して広く話題となったのが，明治大学法学部の大量留年です。ご存知のごとく，同学部の卒業予定者1,424人中実に148人が必修課目である新美教授の「債権法」一科目を落としたために，卒業できなくなったという事件です。

しかしよく考えてみると，これは果して事件といえるのでしょうか。卒業資格のない学生が留年させられるのは，言わば当り前の話。そういえばその数日前，必修単位の足りない学生に対して規則を曲げて卒業させた駿河台大学の“温情措置”は，マスコミに報道はされたものの，大して話題にはなりませんでした。新聞学でよく使われる「犬が人に噛みついてもニュースにならないが，人が犬に噛みつくとニュースになる」というたとえがありますが，大学の世界はどうやら逆のようです。

先週は新聞社や雑誌社からやたらに電話がかかってきました。みな決ったように「今回の明大の措置をどう思われますか？」という切り出し方でした。最初のうちは「ところで何故，私のところへ？」と聞き返したのですが，答は必らず「あの事実をキャッチした途端に，多摩大学のことを想い出したので……」というわけです。本学の“退学勧告”が短期間のうちにいかに世間に浸透したかが裏づけられた感じでした。

ところで，昨年私が“退学勧告”をした12名の学生のうち退学者は２名で，残り10名のうち３年へ進級できなかった学生は６名，何と４名は２年次で頑張ったおかげで見事進級，そのうち１名は全教員が驚くほどの成績をあげてくれました。誰よりもそれを嬉しく思う私は，今年の“退学勧告”者10名の健闘をいま切に祈っています。必らず彼らは頑張るでしょう。

第3回入学式

各　位

野　田　一　夫

4月9日午前10時30分より，本学の第3回入学式が「パルテノン多摩」で挙行されました。今年のゲストは多摩市長の臼井千秋氏とハーバード大学教授のエズラ・ヴォーゲル氏。

臼井氏は，開学わずか2年にして多摩大学が確立した社会的評価を絶賛され，多摩市は多摩大学をよきライバルとして今後も素晴らしい街づくりをしていきたい，と新入生をあたたかく励まして下さいました。一方，ヴォーゲル教授は，“ボーダーレス時代”に日本の青年に期待される役割を強調され，例のクラーク博士の名言をもじって，“Boys and girls, be ambitious for the world！”という軽妙な言葉で話を終えられました。ともに出席者全員には忘れがたい名スピーチでした。

すでにご承知のごとく，今年は文部省の臨時定員増のワクの大幅緩和措置により，過去2年異常に高い入試倍率のつづいた本学の収容定員は，一挙に倍の320名にはね上りましたが，入学志願者数は昨年より34％も増加した結果，名目倍率は20倍を軽く超えてしまいました。つまり，今年の本学の入試は依然として難関であった上に，昨年来一気に高まった本学の知名度のおかげで，志願者の質は昨年度のそれより一段と上ったと思われ，新入生にも大いに期待がもてそうです。

ただし，多摩大学の現状に対して私は安心も満足も致しておりません。率直に言って何から何まで，多摩大学はまだ未完成の段階です。マスコミが喧伝してくれたことは，本学が日本の他大学に率先して実行した方策や措置であって，それらの実績ではありません。また本学の理想に対して，現実はまだ程遠いといわざるをえません。本学の教職員一人一人は気負いもせずまた気落ちすることもなく，今年も所期の理想に向ってマイ・ウェイを黙々と歩みつづけるのみです。

怒鳴り合い

各　位

野　田　一　夫

先週土曜日は，各学年オリエンテーションのあと，昼食時にスポーツアリーナで「新入生歓迎」の全学パーティーを開催しましたが，予想以上の盛り上りでした。やはり学生の数が増えたことが，本学の活気を一段と高めてくれたようです。その盛り上った雰囲気の中で，私にとっては，その日学長になって始めて学生の１人と怒鳴りあったことが，忘れられません。

ことの起りは，私にあり大いに反省しています。本学学生の劇団「サザンクロス」の諸君が大教室で新入生のために自作の舞台劇「欲望の果て」を演じてくれたのですが，最近の学生はしらけていて，折角の芝居をなかなか観に入ろうとしてくれません。私は「サザンクロス」の諸君が春休み中も学校へ出てきて，何日も何日も懸命に稽古を積んでいるのを知っていましたから気が気でなく，そこここに屯している学生に声をかけて廻っていたのですが，たまたま声をかけたあるグループの学生のリーダーの態度が不愉快だったので，怒鳴ったのです。

いや嬉しいことに，他の仲間への見得もあったのか，あるいは余程腹にすえかねたのか，彼は階段をかなり降りかけていた私に，後から言葉を返してきたのです。私も振向きざま大声に早口で「……貴様なんか豆腐のカドに頭でもぶっつけて……」などと怒鳴り，その大声が廊下中にひびきわたって，あたりにいた学生は呆気にとられたようでした。

「学長に大声で口答えするなんて……」と憤慨される前に，「学長ともあろう者が……」とお嘲い下さい。しかし私自身の気分は実にスッキリしました。礼儀はともかく，気に食わなかったら学長にでも食ってかかるだけの気概は，今の学生には貴重なものです。そして，気概のある学生に礼儀を教えることは，礼儀正しい学生に気概を持たせるより遙かに容易と信じます。

2冊の本

各　位

野　田　一　夫

いま全国の主要書店の店頭には，多摩大学に関する本が2冊並べられています。ひとつは中村秀一郎氏の『わが大学改革への挑戦』（東洋経済新報社），もうひとつは拙著『大学を創る ― 多摩大学の1000日』（紀伊国屋書店）です。ちょうど1年前には，室伏哲郎編『多摩大学』（二期出版）が出版され，その直後に例の"退学勧告"が朝日新聞に大々的に報じられたため，両者が火つけ役となって，新設の多摩大学が「小さいながら大きな理想を追求する個性的大学」として一挙に世間の注目を集め始めたのです。

中村氏はご存じのごとく「中小・中堅企業論」の国際的権威ですが，日本の学者には珍らしく産業界の実情に精通し，実に数多くの経営者と親交を重ねておられます。過去数十年，とくに氏が終始強い関心をもちつづけてこられたのはベンチャー，つまり革新的新規事業です。これらの事業は，成功すれば経済社会への影響も多大ですが，反面事業をスタートアップするための苦労も並大抵ではなく，また失敗の可能性も高いのです。いつか氏は「多摩大学をつくってみて，はじめてベンチャーを真から体験でき，その道の経営者にもやっと顔が立つようになった」と私に述懐されましたが，本書のページを追っていくと，多摩大学を開学するまで氏が傾けられた知恵と努力と誠実さの重みが，私には改めて心に伝って来ます。実にこの人を得て，多摩大学は今日あるのです。ご一読を心からお奨め致します。

拙著は私が開学以前より3年余り，多摩大学の関係者ならびに支援者の方々に毎週送りつづけたハガキ通信（Rapport およびTIMIS）の集成本です。熱心な愛読者のお一人吉枝喜久保氏（紀伊国屋書店副社長）のご好意により，この度同社より立派な一冊の本として世に出ました。誠に光栄の至りです。

阪神タイガース

各　位

野　田　一　夫

人生はすべてうまくいったと自分で思うようにしている私ですが，どうしてもそう思えないのは阪神タイガースの熱狂的ファンになってしまったことです。別に関西とは縁もないのに，もう50年以上も前から一年の半分はこのチームのことに一喜一憂して過ごしてきました。そもそものキッカケは，叔父の一人が小学生だった私を，生れて初めてプロ野球（当時は職業野球）の試合を観につれて行ったことにあります。その時たまたま試合をしていたタイガースの選手たちが，子供心にも何とも豪快でたのもしい男達に感じとれたのです。あとから知ったのですが，その頃のタイガースは，呉，土井垣，景浦，藤村……といった史上最強のダイナマイト打線を誇っていたのです。

ご存知のごとく，最近のタイガースは“ダメ虎”などと酷評されるように，打たれ打てずの情ない試合が目立ち，セ・リーグのお荷物になり果てています。私だって何百回となく「こんなチームになんか２度と…」と頭では見離したのですが，結局情を捨てきれず，今年も不当に心を傷つけられ，不快感を味わう日が続いています。そういえば，辞引で「はんしん」を引くと，タイガースは出てこない反面，“半身不随”とか“半信半疑”などという縁起の悪い語句ばかり出てくるのも納得できます。

要するに，最近のタイガースの選手にはチームにも自分にも自信がもてないため，ここぞという時に固くなって，まるで力を発揮できないのです。ちょうど，自他ともに二流とか三流と認めざるを得ない大学の学生と一流と認められた大学の学生とが対決する時のようなものです。幸い新設の多摩大の社会的評価は未定ですが，入学した学生達は，どれ程の自負を持っているでしょうか。どうも，１期生の方が３期生に比して，こうした自負の念が乏しいのが気になります。

飽食と飢餓

各　位

野　田　一　夫

“ゴールデン・ウィーク”も終りました。われわれ日本人の誰もがそれぞれに長い休日を思う存分に楽しんだことでしょうが，この期間中，クルド難民やバングラデシュ被災者の悲惨なニュースが伝えられ，何となく後ろめたい気持に襲われたのは，私だけではなかった筈です。世紀末を生きる人間のこの対照的な状況は，21世紀の不安な現実を予知してくれているようです。

それにつけても，現在の日本の経済力とそれを基礎とする“豊かな生活”はいったいどこまで高まりつづけるのでしょうか。先日オーストラリア滞在中，メルボルン郊外の広大な会員制リゾートのオーナーにお招きを受け，２日間滞在してつぶさに現地を視察しましたが，彼は近く，日本人のパートナーとそこに瀟洒なホテルを建設しはじめるところです。ゴルフ，テニス，乗馬，トローリング，スキューバ・ダイビング……何でもやり放題のこのリゾートでは，先頃日本人会員を募集したところ，湾岸戦争直後の時期であったにもかかわらず，数百人の会員枠は２週間のうちに簡単にうまってしまったそうです。

ゴールデン・ウィークが明ける前の晩，横浜一の会員制倶楽部「エクセレント　コースト」で開催されたディナー・パーティは豪華の極みでした。何しろ日本の生んだ天才シェフと呼名の高い三國清三と現在フランスで指折りのソムリエＪ.Ｃ.ジャンボンとが知恵をしぼりウデに縒りをかけて素晴しいディナーを案出してくれたのです。当夜出席した紳士淑女の何人が真にこのディナーを堪能されたのかわかりませんが，私はワインを料理ごとにあれ程かえるものなのかを知って驚いた次第です。今やさほど広くはなくなった地球の上で，７億の飽食する人々と43億の飢えにおびえる人々の共存がいつまでつづくものでしょうか。来週の教室では，学生とこの問題を論ずるつもりです。

燃えつきて

各　位

野　田　一　夫

15日朝，新聞で千代の富士の引退に関する記事を読んでいる時，テレビで安倍晋太郎氏の訃報に接しました。私が一番好きな力士，私が最も好感をもっていた政治家だっただけに，このお二人を惜しむ私の気持は一入です。

それにしても，安倍氏は昨年来入退院をくり返し，はた目にも痛々しい程の衰えようの身体でありながら，なお現役から引退しようという気は起きなかったのでしょうか？ 当人はともかく，周辺の心ある人々は，そういう健康状態である安倍氏が今秋の総裁選に立候補することを思い留らせようとはしなかったのでしょうか？　自民党の総裁とか総理大臣というのは病人でもつとまる程。気楽で責任のない地位と思われているのでしょうか？

千代の富士の引退ですら，私には遅きに失した感があります。２場所休場して再起を期し，最後の大目標に挑戦したいというのは，単に本人の望みであったのみか，千代の富士を応援する全ての人々の望みでもありました。それにしても，初日貴花田に，３日目貴闘力にあれ程無惨な敗け方を喫しなければ，本人も周辺も引退の納得がゆかないものなのでしょうか？　“燃えつきて”というのは，日本人のセンチメンタリズムにはたまらない刺激のようですが，少くとも私の好みには合いません。

千代の富士には，本場所出場することなく引退してほしかったと思います。また安倍氏には先輩石橋湛山氏の引き際を見習ってほしかったと思います。政治家とか経営者の地位は，適・不適がスポーツのようにハッキリしないとはいえ，社会的責任は限りなく重かつ大だからです。大学学長も同じこと，“燃えつきて”交替するなど，とんでもないことです。だから私は就任以来，引き際のことが毎日念頭を去りません。

いたずらにすまじきもの

各　位

野　田　一　夫

本学も学内に就職相談室を設け，専任のスタッフが就職戦略を練る時期が来ました。この数年大卒者に関しては異常の売り手市場がつづいているとはいえ，私どもは決して気を許してはいません。学生たちを望み通りの会社に就職させることより，入社後会社が彼らに対して真に満足してくれるかどうかを真剣に心配しているからです。

何しろ，過去１年余りマスコミによって高められた多摩大学の知名度と世間的評価・期待は，私どもの予想を遙かに上廻っています。私どもが設立に当って掲げた理想や理念は，世間ではすでにそれが現実だと受けとられているのです。たまたま手元に送られてきた経済誌『財界』も６ページの大型記事「大学を経営する時代が始まった」の中で，慶応の新学部とともに徹底して多摩大学をマークし，とくに本学は「卒業生の品質保証してくれる」とまで報じてくれています。

本学の知名度・評価が高まったことは，就職先の開拓にはどれ程有利かわかりませんが，先方の期待が大きいだけに，就職したあとの卒業生のことは，なお更気にならざるをえません。下手をすると，その反動が２期生・３期生の就職にもひびきかねないからです。そこで本学ではとりあえず，卒業証書（ないし見込書）と推薦書をはっきり区分するつもりです。大別すれば，前者が学力の保証，後者が人物の保証ですが，わが国の大学では慣習的に，学生の就職に当っては，かなりいい加減な仕方で両者を乱発してきました。

本学が学力の修得結果に厳しいことは周知の事実ですが，講義のほかに近く就職講座を開講し，社会人としての心構えから礼儀・作法に至るまでを教育した上で，納得できない学生にはいたずらに推薦書の発行はすまじきものと思っております。

アスペンを想う

各　位

野　田　一　夫

最近，財界人による相次ぐ政治家批判が政治家側の強い反撃にあって，マスコミの話題となっています。近く産業界に卒業生を送り出す筈の多摩大学としては，財界こそ広く国民の尊敬と信頼を得るリーダーを育ててほしいと念願するのみです。それにつけても想い出されるのは，米国のアスペン研究所です。

19世紀後半コロラド州で発見された銀が生んだこのブーム・タウンは，20世紀前半には完全なゴースト・タウンと化しましたが，20世紀後半には，美しいロッキー山脈の自然に憧れる人々を季節ごと全米いや全世界から集めて賑っています。しかし，アスペンの名を高からしめているのは決してスキー場ではなく，実は世界に比肩するもののない知的生産の場なのです。

アスペン研究所の生みの親は，シカゴの実業家ウォルター・ペプキーです。卓越した教養人であった彼は，第２次大戦後アスペンを保養地として再開発するに当り，是非ともそこに，知的・文化的雰囲気を加味しようと思いたち，私財を投入し，友人達を説得して独特の目的と教育方法の研究所を設立しました。

政・財界のみならず官・学・労・マスコミ等社会のあらゆる分野でリーダーの立場にいる人々に対し，相互啓発を通じて真にリーダーとしての自覚と素養を身につけさせること，これがこの研究所の設立以来の目的です。そのためにそこでは①好んで古今の文学・思想の名作を知的会話の材料とし，②ごく小人数の参加者がテーブルを囲んで徹底的に語り合い，③そこから導き出される，あるいはその間にひらめくさまざまな貴重なアイディアを参加者がそれぞれに持ち帰り，現実的諸問題の好ましい解決に積極的に役立てようというわけです。

アスペン研究所の成功は，“一般教養”が学生より功成り名遂げた大人たちにこそ真に有効なことを示してくれます。

時代は“多摩紀”

各　位

野　田　一　夫

朝日新聞朝刊の連載「はたちの実験都市――多摩ニュータウン」は今週終了しました。講談社刊の総合雑誌『NEXT』も6月号で多摩ニュータウンを特集しています。総面積3,000ヘクタールに及ぶわが国最大のこの新都市開発は，都市計画決定後4半世紀にして，やっと全国民の注目を集めるだけの体裁と内実を整えるようになりました。

この多摩ニュータウンにある本学は「多摩ニュータウンにある多摩大学」ではなく「多摩大学のある多摩ニュータウン」を設立時のスローガンに揚げました。子供じみた気負いと受け止められるかもしれませんが，われわれは本気でそれを目ざしてきたのです。開学後2年余り，やっと世間はわれわれのスローガンを，たわいのない自負とは受けとらなくなりました。

来年は多摩大学にもいよいよ4年生が登場し，われわれの期待を担った1期生が就職受入れ先の人事担当者の冷厳な評価を受けることとなります。だからこそ関係者は目下，来年度の「学校案内」の編集・制作に知恵と努力を傾けているのです。そのキャッチフレーズは「大学史は遂に多摩紀に突入した」というユニークかつ訴求力のあるものです。もちろん，ユニークさと訴求力とは単にキャッチフレーズだけではありません。

大学史を世界史になぞらえ，戦前まで一部特権階級のみが大学へ進学していたのどかな時代を古代。戦後“大学信仰”に群がる善男善女に対して心なき学校経営者や教授が“免罪符”もどきに卒業証書を乱発し，宗教の堕落のごとく教育の堕落を招いた時代を中世。……その後，国家財政と行政権力を背景として国立大学がのさばった帝国主義の時代が終わりを告げ，今ほのぼのと新しい時代――“多摩紀”が多摩大学によって拓かれようとしている，ざっとこんなコンセプトです。乞ご期待！

夏休みの勧め

各　位

中　村　秀一郎

学生諸君！いよいよ6月，夏休みは近い。心に残る夏休みを過ごすには，何といってもそのメインテーマを持つことだ。たとえば，本当の日本を知り，その強さの根源，ものづくりの現場に学ぶといったことはどうなのだろうか。それには，世界一流の中小企業を訪問しその実態に学ぶことをお勧めしたい。

まず地域の設定。文句なく長野県。夏に涼しい高原地帯であるとともに先進型ハイテク企業の集積地であるからだ。そこで，須坂市に近い高山村に本社をおくアキタを訪ねる。南志賀の9万平方米をこえる原野のなかに自前の技術開発による多角的な生産拠点――鋳造による門扉，セラミックスのパーツ，きのこの改良によるバイオ食品，高性能コンクリート製品の生産――が設置されている。つぎに長野市川中島のコヤマという鋳造品メーカー。3Kそのものといわれる鋳造工場を，多くの創意工夫によってクリーンにし，工場公園を実現している。

ここから中央線経由で伊那に向かう。ここでは伝統的な地場産業から生れた食品工業に眼を向けよう。杜氏といわれる熟練肉体労働依存を脱却し，進んでコンピュータ，ロボットを大幅に導入し，“サケトロニクス”を実現した仙醸というメーカーもあり，また天日乾燥による寒天製造を工業化，良質の寒天を造り出すだけでなく，バイオテクノロジー最先端分野で利用される高純度寒天づくりに成功したメーカーもある。

これらの企業を訪問し，経営者からそれぞれの事業の説明を，それに賭けるロマンとともに聞くことは何と素晴らしい勉強だろう。勉強させて頂く以上，なにかおみやげも必要だろうか。私なら作業服を持参し，まる一日会社の仕事を掃除でも何でもお手伝いするだろう。そのことを通して経営者の話を，諸君はより深い次元で理解できるようになるに違いないからだ。

地域からみた企業者活動

各　位

中　村　秀一郎

6月1・2日東北大学で開かれた，本年度組織学会大会での新しい試みであるセッション（ミニシンポジュウム）にディスカサントとして出席してきました。

その標題は「地域からみた企業者活動」，報告者は大滝精一（東北大）金井一頼（北大）金井壽宏（神戸大）の三氏，第一線の有能な研究者というにふさわしい人々で，討論には私のほかにベンチャー経営者柳田一千一氏が参加されました。

三氏の問題提起を聞いて，私はある種の感慨にふけらざるをえませんでした。それはこの方々がその大学の立地する地域社会に根ざすイノベーター中堅企業群をケースとしてとりあげ，それによって地域社会活性化のための理論假説を追求されていたからです。経営者の伝統といって良い，ヨコ書き文献をタテに変えることが学問だった時代がようやく終わり，欧米の大学なら珍しくない，大学と地域社会との交流が優秀な研究者によって開かれつつあることを実感できたからです。

15分という限られた時間で密度の濃い主張をするために報告者は，レジュメに注目に値するキイワードを示していました。情報創造，知識の苗床，社会的企業家（Social Entrepreneur），地域産業機会マップ，地域産業間シナジー，企業家ネットワーク・アライアンス・戦略的提携等々です。

私のコメントは，地域に根ざす企業家活動の現代性を問う問題提起でした。すなわちわが国に多い伝統型の地場産業における企業家はその地域集団から生まれ，その集団に衝撃を与えたのに対して，今日の企業家活動は脱地場産業型，一業一社型です。だからこそこれらの企業家の地域革新に果たす役割は，わが国独自の展開というべき異業種企業交流のリーダーとしての活動となるのは，ごく自然の成り行きというべきでしょう。

3種類の卒業生

各　位

野　田　一　夫

今や世は就職戦線たけなわ。大学卒業生の異常な“売り手市場”は今でもつづいていますから，いわゆる一流校の卒業生に関しては，大勢は今年も夏休み前には決着がついていることでしょう。多摩大学も来年には1期生がようやく就職活動の時期を迎えます。本学でも早々と学内に「就職相談室」をもうけ，たくさんの資料をとり寄せ，人手のない中で会社廻りまでやっていますが，「それにしては，3年生の就職への関心は今ひとつ真剣味が感じられない」と山田就職課長の嘆きです。

私はそんなことを全然気にしていません。なぜなら私は，1期生と限らず本学の卒業予定者に関して，大学が過度に就職の面倒を見る必要はないと考えているからです。どこの大学でも，卒業予定者には大別して3つの種類があります。①卒業後の身のふり方がすでに決まっている者（親の仕事を継ぐとか結婚を前提に家事手伝いをするとかいったケースも含めて…），②学校に頼らず自分自身で就職先を開拓する者（両親・親戚・先輩等の強力なコネを期待できるケースを含めて…），③学校（または教師）の協力・助言のもとに就職先を探す者，の3つです。

“就職活動”を必要とする者はこの中③だけです。本学1期生の卒業予定数は留年等を勘案すればせいぜい200名ですから，就職活動の必要な者は100名にも達しないでしょう。近いうちに私は，この100名にアピールし，就職に関する多摩大学としての協力・助言のあり方を，徹底的に理解し，覚悟して貰うつもりです。大学の協力・助言を必要とする以上，彼らには当然，単に基礎知識や学力のみならず，是非とも本学の期待する礼儀・作法・態度・物腰・言葉遣い……といった人間的属性までをも身につけて世の中に出て行って貰いたいものです。彼らに対する評価が，今後の多摩大の評価を左右することを1期生諸君には是非わかってほしいと思っています。

東京夢幻図絵

各　位

野　田　一　夫

“カッチャン”こと北村和夫君は、暫く会わなくても暖かい心の通い合う私の大切な友人の一人です。彼のおかげで“雲の上の人”だった杉村春子さんとも親しくなり、彼が杉村さんの相手役として扮する「欲望という名の電車」なども何回も見に行きました。スタンレー役500回という輝かしい実績にもかかわらず、杉村さんによると「あのひと、せりふを忘れる名人なのよ…」という微笑ましい一面をもっています。

その北村君が悪友今村昌平氏の演出で、2時間に及ぶ独白劇をやるという便りが届いた時、私は多少の不安を感じながらも、本学の演劇同好会「サザンクロス」の連中をひきつれて彼を応援に行こうと決意しました。4月13日の新入生歓迎会の後101番教室で彼らの芝居を観て、痛く感心したからです。先週土曜日の午後、学生10名と渋谷で待ち合わせ、PARCOの“SPACE PART 3”で「東京夢幻図絵」を観ました。

舞台は講演会場の設営、講師の北村君が「B29と私」というテーマで、太平洋戦争末期の東京での空襲下の体験を迫真の演技を随所に交えて生々しく語りつづけるわけです。テーマも時代背景もおよそ観客を魅きつけるのには不適と感じたのも束の間、芝居が始まって5分もすると、われわれはすっかり彼のセリフと演技のとりこになり、息をのみ、笑い、そして感激して時を忘れてしまいました。

万雷の拍手で芝居が終ったあと、学生を連れて楽屋に北村君を訪ねると、舞台衣装のままの北村君は、いつも彼らしい愛嬌のある表情と持前の太い大きい声でよろこび、学生一人一人と固い握手を交わしながら、彼らを激励してくれました。帰りがけ「…やっぱりプロはすげぇや…」という学生の声を背に聴きながら、私はひどくいいことをした気分でした。

東南アジアの日本企業

各　位

中　村　秀一郎

6月始め、東南アジアに進出している日本企業十数社を訪問し、現場の問題点を探ってきました。現地の企業が直面する問題点として、雇用者の高い企業間移動の問題があります。タイでは、工場操業開始に先立って日本で職長クラスの人材数十人を1年間教育したのに、3年たった今日ではわずか3分の1しか残っていないといったケースは、例外ではないのです。

バンコク周辺の工業団地で驚いたのは、昼休みの時間、工場入口のロビーに、同じ団地の他工場で働いている人が採用面接に何人も訪れていることでした。比較的日本企業の進出の早かったシンガポールで、メカトロ系の企業では、作業者の定着度は高くなった反面、技術者の移動率のみが高いのですが、一般企業の側では打つ手もなく、大学・専門校卒の若い人々を指導する日本人の技術者からは、たえず同じことの繰り返しとなるから技術移転はゆっくりやろうということになる、という声も聞かれました。

こういった空気のなかで、この問題についての革新的な意見をある華僑系企業の社長から聞くことが出来ました。外為自由化の進むインドネシアで、米系シティバンクの社長は、自社の人材が他社に引き抜かれることは結局営業活動の拡大となる、と見ているとのことです。日本人では八百半シンガポールの責任者の意見が明快でした。現地の人材が外資系に入社するのは、チャレンジしがいのある仕事がしたいと思うからで、これをマネジメントが理解していないことが問題だというのです。

21世紀に向けて日本では、若い従業者の企業間流動性は高くなる予感がします。その反面東南アジアでは、すでに35才以上の管理者層の定着度は高いといわれています。長い目でみれば、アジアの労使関係は次第に均質化するといってよいでしょう。

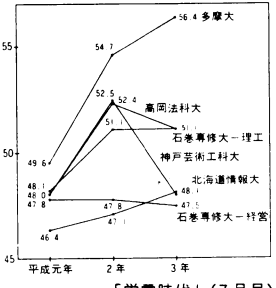
偏差値を考える

各　位

野　田　一　夫

本来統計用語である“偏差値”がわが国では受験用語として世間で広く使われていることは、周知の事実です。それは、目ぼしい学校の合格者の平均学力を表す数値として大手進学塾によって毎年発表され、その数値の高さで学校の社会的序列がきめられます。現在まかり通っている入試方法にはいろいろ問題がある以上、偏差値の独り歩きは誠にイマイマしい限りですが、どうにもなりません。因みに最近新設された大学の過去3年間の偏差値の推移は以下のごとくです。本学の伸びは著しいとはいえ、数値そのものは、今のところ大したことはありません。

《平成元年新設大学例》



「蛍雪時代」（7月号）

私を含め本学教員一同は、開学以来“偏差値至上主義”を打破すべく、入試方法その他であらゆる努力をつづけてきましたが、最近私は、偏差値を改めて考え直しています。キッカケは、今年から久しぶりに教室で学生に接して、彼らの予想以上の勉学心の低さに驚き呆れ果てたためです。現行の大学の教室で講義から何かを学びとるためには、とくにいい頭は必要ありませんが、ある程度以上の勉強への意欲ないし努力の持続はやっぱり必要です。入試も同じだとすると、偏差値とは、それぞれの大学の教育レベルに対応できるこの持続力の程度を示しているのかもしれません。現在の本学学生、とくに3年生にとって、この意味での偏差値の向上は、受験生時代より大学生時代にこそ切望されるものと信じます。

男も愛嬌

各　位

野　田　一　夫

TIMIS－108で「阪神タイガースの熱狂的ファンである私」について告白して以来12週間、その間実に多くの方から嘲われたり、同情されたり、あるいは励まされたりしました。実は最近、小生は急にオリックスを応援し始めたのです。今季プロ野球が開幕して約2カ月ほど、パ・リーグのオリックスはセ・リーグのタイガースと並んでダントツの最下位で低迷をつづけていたのですが、この1カ月余り、オリックスの奮起は著しく、いつしか5位に浮上して、更に上位をうかがう勢いです。

これもオリックスの魅力ですが、いまひとつ小生をオリックスに魅きつけるのは、全く奇妙な選手佐藤和弘内野手の出現です。硬派に属する週刊誌にすら「パンチ（パーマ）佐藤の笑撃野球」などと特集される程人気の的ですからご存知の方も多いことでしょうが、彼の人気の源泉はこれまでのプロ野球の人気選手の場合とは違って、選手としての輝かしい実績ではなく、明るく、豪気な人柄、型にはまらない痛快な生きざま、そしてそれらに全くふさわしい容貌・からだつき・服装です。

彼は打率もまあまあな上に守備もからきし駄目ですが、その存在感は抜群で、代打で彼がグランドに出てくるだけで観衆はどよめき、球場は華やぎます。ましてや、たまに好打など放った時には、相手方の応援団まで一斉に拍手を惜しまないわけですから、彼の後援会に西武の清原選手までが入会したことがよく理解できます。昔から「女は愛嬌」ということが言われてきましたが、佐藤選手の出現でつくづく考えさせられるのは今や「男も愛嬌」の時代が来たということです。最近の男子学生を見ていると、総じて気力も個性も欠落している上に、無愛想きわまりないときていますから、佐藤選手の爪のアカでも煎じて飲ませてやりたいくらいです。

花　数　寄

各　位

野　田　一　夫

大学教師という職業の最大の魅力は、長い夏休みです。とくにエア・コンディションが普及した昨今は、都会に居とどまって、いつもは雑務にわずらわされて簡単には読めない高踏的内容の本にじっくり対していられる時など、この職業の有難さは格別です。今週は、友人の黒川紀章氏から贈られてきた「花数寄」（彰国社）を考え考えながら読み了えました。

花数寄、聞きなれない用語ですが、もちろん黒川氏の造語です。氏は、茶道に集約されている“わび”が日本の伝統美として“寡黙で簡素な性格”として定説化されていることにいたく疑問を抱いているようです。古くは縄文文化と弥生文化、新らしくは桂離宮と日光東照宮に象徴されるように、日本の伝統美には、従来定説化されてきた“わび”と対照的に活動的で華やかな性格が共生しているというのが、氏の年来の信念であり主張です。

建築家である氏は、定説化された考え方に偏った“侘数寄”に対抗した数寄屋建築の様式を花数寄と名付け、この様式が茶の湯の歴史とともに古く長く存在しつづけてきたことを、わが国の著名な数寄屋建築をひきあいに出して検証するとともに、花数寄のコンセプトが、現代においては日本を超え、世界の建築家の共感を呼ぶものであることを強く訴えているのです。

建築界の鬼才と呼ばれる黒川氏の説は独断スレスレと思われる程個性的で、かつ表現は全編ペダンチックなにおいにつつまれています。しかし論理は実に明快で説得力があり、こういう本に接しているとわれわれは、久しぶりに「読書を楽しんだ！」という歯ごたえのある満足感を覚え、旧制高校生だったころの自分にかえった気がします。いまの大学生には、果してこうした読書の楽しみがあるのだろうかと、何となく気がかりです。

例の仲間

各　位

野　田　一　夫

平松さん（大分県知事）から私のオフィスに電話がかかってきたのは、3週間程前だった。「ノダちゃん、7月31日上京するけれど、仕事は8時半頃には片づくから、また例の仲間に声かけてくれない。場所はノダちゃんに一任するよ……」。男っぽくそして暖か味のあるその太い声で頼まれると、私は無性に嬉しくなって、東京にいる限り時間の都合をつけようという気になり、すぐ例の仲間に電話の“召集令”をかけ始める。

例の仲間とは、男なら阿久悠、椎名武雄、白根禮吉、鈴木義雄、鈴木哲夫……、女なら阿木燿子、草柳文恵、高原須美子、壇ふみ、中村紘子……といった面々、何れも職業こそ異なれ、日常の多忙さは察するに余りあるが、私と同じく平松さんの魅力には抗しきれず、毎回メンバーはすぐ十人ぐらいになってしまう。場所は必ずいい雰囲気のカラオケ・バー。だからといって、カラオケに打興ずるわけではない。順番に誰かが歌うのを小耳にしながら、政治・経済から社会・文化にわたる相当次元の高い話に華を咲かせる。しかも、歌の始まりと終わりには盛んな拍手という歌い手への礼儀と激励は絶対欠かさないのだ。

別に会規も会員も定っていないこの会に“例の仲間”たちの出席率はなぜあんなに高いのだろう。平松さんの人間的魅力は言うまでもないが、仲間たちそれぞれの人間的魅力も大したものである。そしてこうした仲間が集まって話に華を咲かせるのは、限りなく楽しくかつ有益な人生のひと時である。最近多摩大の同僚の何人かから、ゼミナールの効用を聞くことが多くなった。学生の勉学意欲が高まり、彼らが目立って積極的に発言するようになったという。私が“例の仲間”と過ごすように、魅力ある教師を中心に集まるゼミが学生にとって限りなく楽しくかつ有益な時間となりつつあるのが、何よりうれしい。

東南アジア大都市交通

各　位

中　村　秀一郎

東南アジアの大都市では、急速な経済成長が、インフラストラクチュアの立ち遅れを際立ったものとしています。地下鉄整備の進んだ香港とシンガポールを例外として、公共交通機関の未整備はたえ難いものとなってきているように思われます。バンコクでは、すでに通勤対策が企業の課題となっているのです。

だが大量輸送交通網整備の問題は、少なくとも東南アジアでは、既存の先進国にはない交通システムの評価から出発すべきでしょう。これがよくわかるのはジャカルタです。幹線道路には大型バスとタクシーが走っています。ところがここに、路線は決まっているが、どこでも乗・下車が出来るマイクロバスの相乗りタクシーも走っているのです。（これは運転手と車掌が一組となってオーナーから車を借用して運行するシステムのため、乗客へのサービスはきわめてよいのです。）

ところで、裏通りにはハジャイという名のミニオート三輪タクシーが走り、さらに、周辺地区にはベチャという三輪自転車があります。その上バス停には狭いローカルな道路に向かうオートバイタクシー（一人乗り）が数台待機しているのです。タクシーの最低基本料金は70円位ですがハジャイはその半額、相乗りタクシーはもう1ケタ安いのです。

とにかく、ジャカルタでは細かな個人サービス提供に生きる道を求めている庶民の大衆と切っても切れず、また官僚主義のかけらもない便利なシステムが出来上がっているのは驚かされます。ただちに21世紀型の交通システムを構想するより、こういうシステムを大切にしながら、中心部に乗入れている鉄道の通勤路線への転換を進め、これを大量輸送機関として活用することが、現実性ある問題解決への基本線と思われます。

ひとつの不条理

各　位

野　田　一　夫

今年の芥川賞受賞作品のひとつは、辺見庸「自動起床装置」。題名を見た時は、読む気は全く起こらなかったのですが、この小説の主人公がある国際通信社で夜働くアルバイト学生であることから何となく読み始め、やがてひきこまれて一気に読みおえ、ひどく感銘を受けました。

彼はアルバイト先で自分より1年前からそこで働いている、総という読書家の大学生と出会います。法学部の学生であるのに総は法律の本をもっていたことはなく、常に“植物”とか“眠り”に関する本に読みふけり、折りにふれてこの2つを結び付けて語りかけるのです。宿直する社員のうち何人かを指定された時間に起こすのが彼らの仕事ですが、主人公はその仕事をやってみて、一見なんでもなさそうなこの仕事が実は大変微妙な感性と熟練を必要とすることに気づきます。また他人の眠りに接してみて、眠りの世界が人間にとって起きている世界以上に複雑怪奇な深さと広がりをもつことを知るにつけ、主人公は、色白でひ弱わそうな総の個性的才能と人柄に引かれていきます。もちろん、読者である私の気持ちは主人公と一緒に総にかたむいていくのですが、その過程で徐々に気になっていったことがありました。それは人間の能力評価についてです。

法学部の学生として、総は優等生ではないはずです。単位を落として卒業もできないかも知れません。いや、法学部へ入ったことがもともと誤りだったのです。もし私が法学部の教師でしたら、総は私から無能のラク印を押されたことでしょう。多摩大学で私が「どうしようもない奴」と評価し、とくに退学勧告までした学生の中には、現行の大学制度の中で不当に評価される総のような若者がいっぱいいるに違いありません。その不条理をしきりに感じつつ、私はこの小説を読み続けたのです。

今、縄文ブーム

各　位

野　田　一　夫

常に受身であるために一向解決のメドのつきそうにない対外経済摩擦、国際政治の舞台でのわが国リーダーの余りに情けない無能ぶり、“踏んだり蹴ったり”の感のある各国の対日論調……こんな中で、最近日本人は深層心理的に自己嫌悪に陥っているせいでしょうか、マダム・クレッソンの暴言さえ、いちいち思い当たることばかりで、反感さえ心に湧き上がってきません。だからこそ、今俄然、“縄文”がわが国社会でブームになったに違いありません。

先週終わった今年の天城会議（TIMIS－73参照）でも、問題提起者の梅原猛氏は、現代日本文化の深層には未だ脈々と縄文文化の伝統が流れているとされ、かく言う自分は「（農耕型社会には全く不向きな）縄文人である」と胸を張り、喝采を浴びました。稲作技術が中国からもたらされて弥生時代の幕があける前の6～7,000年間、全島森林に覆われていた日本列島に住んでいた縄文人は当然狩猟民で、事なかれ右へ倣え式の現在の平均的日本人よりは遥かに行動的、個性的、かつロマンティックな人間的属性にあふれていたと十分推定されます。

ところで、縄文のふるさとは東北地方とのこと、盛岡を父祖の地とする私には何となく誇らしい気がします。天城会議の帰途列車の中で手にした『AERA』（8．27号）には、坂上田村麻呂を相手に奮戦した幻の蝦夷の英雄アテルイの血湧き肉踊る物語が……。「蝦夷というのはアナーキーで、こせこせ管理されたり、組織に組み込まれるのがきらいな人たちだったと思う…」という詩人相沢史郎氏の談話に思わずヒザをたたきながら、何か子供の頃から生まれ育った国を好きになれなかった自分自身のことがやっと解ったような気がしました。日本社会は今こそ、縄文人の立場からの大改革が必要と思われます。

大学史はついに……

各　位

野　田　一　夫

最近、学内誌に巻頭言を求められ、次の一文を草しました。

「大学史はついに、多摩紀に突入した」、今年の本学の案内書の表紙を飾るキャッチフレーズだ。このフレーズは、エージェントの案をしりぞけ、強引に押し込んだ私自身の作だ。別に自慢するわけではない。多摩大学の創立に参加した関係者全員は、正にこの理想と意気込みをもって、事を始めたのだ。

幸い多摩大学が打ち出した教育方針や方法は、そのことごとくが予想外に世間の反響を呼び起こし、数えきれない程各種のマスコミに報道されつづけてきた。今や多摩大学は「新しい小さい大学ながら、本格的教育を目ざす個性的大学」として高い評価を確立し、その知名度も高い。しかし、世間的評価や知名度は、実態からかけ離れがちであることを忘れてはならない。

多摩大学の学生のうちで、多摩大学の教育の現状に満足し、多摩大学に誇りをもっている者は何割いるか？ 多摩大学の教員の中に、学生の現状に満足し、毎日充足感をもって教壇に立つ者は何割いるか？ どちらの問に対しても、その答は世間の予想を下廻るに違いない。しかし諸君、そんなことに失望したり落胆してはだめだ。私はそんなことを何とも思っていない。

われわれは高い理想をかかげ、確固たる信念をもってスタートした。2年や3年で簡単に達成できる理想が高かろう筈はない。数年の成果を見て一喜一憂する信念が確固たるものであろう筈はない。多摩大学の創立の理想がいささかでも実現されるためには、少なくとも5年いや10年の歳月が必要だ。しかし、われわれの理想が幻でなかったなら、努力を怠らない限り、それは必ず近い将来力強く実現されていくに違いない。われわれは常にそのことを自分の心に言いきかせ続けようではないか。

成功の甘いワナ

各　位

野　田　一　夫

中尊寺ゆつ子さんの漫画家としてのセンスを愛好していた僕は、今つくづく失望感を味わっています。仕事に追い回されているせいか、作品の質は最近とみに低下気味です。例えば、週刊SPA 9月4日号の「サンプリングしてみる」に至っては、専門用語の使い方がデタラメ、読者の方が恥ずかしくなります。

これを読みながら昔観た映画「A CHORUS LINE」の感銘を懐かしく想い出しました。ブロードウェイの舞台での端役を獲ちとるための俳優志願者たちのすさまじいまでの日々の修練、どっとオーディションに押しかけた彼らの中からほんの数人を選び出すために、恋人とのデートまですっぽかして徹夜する演出家の執念……、あのきびしいプロの世界は、現在の米国社会にまだ残っているでしょうか。

ちょっと可愛い顔をして歌を唄えば忽ち歌手としてデビューでき、ちょっとお喋りがうまくて本でも一冊書けば忽ち評論家としてブラウン管に登場するというわが国社会の風土では、降って湧いたような人気のために、タレントはすぐ有頂天になり、ワンサとくる仕事をこなすために、基礎的な勉強をなおざりにします。このために、せっかくの才能の芽も大部分は結局短期間で枯渇するか、異常な方向に成長する他はないようです。

まだ問題があります。情報の“国際化”によって、今や日本での人気はすぐ世界に報道されます。先日も THE JAPAN TIMES は彼女の人気作品をとり上げ、（社会人になってからも）両親のスネをかじり、（ロクな仕事もしないで）全収入を遊びに投じて北欧にゴルフ旅行し、ビバリーヒルズで宝石を買い漁る“OL”族を皮肉っています。OL経験の全くない一漫画家のつくり上げた虚像が、外国人の日本人への誤解や反発の一因とならないことを、切に祈るのみです。

石井和子さんのこと

各　位

野　田　一　夫

9月15日の“敬老の日”は、私にとって、私より年上でなお素晴らしい生き方をしておられる方々のことを考える日です。今年のその日、私は石井和子さんから贈られた新刊の翻訳書『シュリーマン旅行記　清国・日本』（新潮社）を読み、ひどく感銘を受けました。石井さんは、親友石井宏治君（石井鐵工所社長）のご母堂、著書H. シュリーマンは、トロイアの発掘で世界的に名を成した考古学者、そして訳業のキッカケは、かねてからシュリーマンに憧れていた石井君が先年欧州出張の折、パリの国立国会図書館でフランス語版の原書を見つけたことです。

石井君はMITで工学博士号をとった程の秀才ですが、自分で読みたいこの本の翻訳を母親に依頼されたとのこと。一方石井さんは、先年ご主人を亡くされたあとの整理を終えられると、気持ちの切り替えのため、昔身につけたフランス語をブラッシュ・アップする目的で「3年つづけてパリで、寂しいけれど自由な“学生暮し”」を送られて帰国され、息子さんからこの大役を引き受けさせられたとのこと。フランス語とはいえ、何しろ出版年は130年昔、訳業がラクであろう筈はありません。それに内容は幕末期の日本。訳者は江戸時代の文献を渉猟し、東京や横浜の古跡に足を運び、多くの専門家の門をたたき、読者のために訳書を原書以上のものとすべく大変な努力を重ねられた筈です。同書「訳者あとがき」の短くつつましい名文が、翻訳の苦心の跡を何よりもよく物語ってくれます。

しかし誤解なさらないで下さい。この名文には、課せられた重荷としての訳業の苦しみはいささかも感じられません。むしろ、苦心して創造的な仕事ととり組んだ彼女の満足感が行間至るところに躍動しているのです。今年64歳を迎えた私にとって、石井さんの存在を知ったことは、この上もない励ましでした。

移ろいやすきは人の心

各　位

野　田　一　夫

「……稽古も怠ければ女性問題はひき起こす、こんな（琴錦のような）力士が優勝したことは、私のように（学生時代に）優等生でなかった者には、殊に嬉しいですね……」僕が毎朝視ているテレビ朝日の「やじうまワイド」の解説者塩田丸男さんのこのひと言、今週最も印象に残る暖かい言葉でした。

“若貴”人気一色で始まった今場所でしたが、両横綱の休場などがあって、取り組みは総じて盛り上がりは少なかったものの、琴錦の全く予想外の大活躍がどうやら大相撲の人気を千秋楽までもたせてくれたといえます。琴錦は今まで僕にとって全く興味のない力士でしたが、今場所だけは、僕は後半になって彼を本気で応援しました。彼がもし優勝したらマスコミがどんな反応を示すのだろうかということに興味を抱いたからです。

若貴両兄弟は稽古熱心で、まじめで、親孝行で、加うるに兄弟仲も抜群だという点で、最近では見上げた若者であるようです。しかしこうした事実は、マスコミによって多かれ少なかれ誇張されることも否定できません。マスコミにとって“善玉”には“悪玉”の存在が必要です。その点、稽古はさぼり、女遊びには精を出し、おまけに八百長の噂まであった琴錦は、正に格好の攻撃材料となったのでしょう。しかしその報道にも多少とも不当な誇張はあったに違いありません。

琴錦はそれを不当と感じたが故に、言い知れぬ社会的圧迫をはね返し、実力で世間を見返したのだと信じたいものです。群れ寄る記者達の質問に対し、言葉少なめに答える彼の眼に涙、あれは果して真の嬉し涙だったのでしょうか？「勝てば官軍」というあさましい世の中だからこそ、わずか数日でマスコミがつくり上げた新しい英雄像に琴錦関が酔いしれることのないよう、くれぐれも自重を、と切に祈る気持ちです。

当世就職事情

各　位

野　田　一　夫

いよいよ秋十月。産業界入りを希望する来年度大学卒業予定者諸君は，待望の「採用内定通知」を各社から受けとることになります。もちろん，建前だけのことですが…。というのは，主要な企業等関係団体と主要な大学等関係団体との間で結ばれている「就職協定」によると，会社説明会とか会社訪問が公けに許されるのは8月1日ですが，実際には，ほとんどの企業の求人活動は春先には始められ，8月1日までに多くの学生は，実質的な“採用内定”をもらってしまっているからです。

内定といっても最近の学生のことですから，複数社の内定を前提に就職先をゆっくり値踏みする者がふつうです。企業は企業で内定者に対して引き留策として，あの手この手を考えて実行します。傑作なのは，“学歴打破・実力主義”を標榜しながら，内定者を3分し，一流校卒はハワイ，二流校卒はグアム，三流校卒は東京ディズニーランドへと“研修旅行”を実施し，学生側のヒンシュクを買ったりする会社もあったことです。

さて，本学にも来年はいよいよ4年生が登場し，こうした矛盾をはらんだ求人求職の渦の中にまき込まれていくわけです。幸い各種のマスコミ報道を通しての広報効果のおかげで，産業界から本学への期待は予想外に大きく，多くの先生方に対して，求人の打診やら申し込みがひきをきりません。しかし，そのことにかえって責任を感じた私共は，近く3年生を対象に長期的に「就職講座」を開講し，礼儀・作法や言葉使いをはじめ，学力以外の人間的属性の錬磨に努めたいと考えております。

一方来る11月18日(月)には東京丸の内の日本工業倶楽部で「企業と多摩大学の懇親会」を開催し，広く産業界各社に本学の経営理念や教育方法を認識して頂くつもりです。ご出席ご希望の方はTIMIS事務局にご連絡下されば幸甚です。

上々のスタート

各　位

野　田　一　夫

近い将来の本学の学部ないし学科増設計画については、すでにTIMIS − 12にて構想を述べさせて頂きましたが、最初に着手するのはレストラン・ホテル学部（ないし学科）になる可能性が大です。何といっても、卒業生を受け容れるこれら産業の規模が急速に拡大をつづけているのに、少なくともわが国の4年制大学には、立教大学の観光学科を除いてはその分野へ送り出す人材を意識して組織された教育機関がないからです。

かといって学科はもちろん学部の設置も、本学の一存でできるわけのものではなく、道を踏んで行けば、実現には3〜4年の歳月がかかりましょう。そこで本学では来年春を期し、現在の経営情報学部内にレストラン・ホテルコース（仮称）を設置するとともに、このコースに入った学生も受講できるホテル・レストラン・リゾート関連の「社会人講座」を、都心の交通至便の場所で夜間に開講すべく準備を始めました。

何しろこの分野は、これまで立教大学のみが長年培ってきた領域で、各業界の信用も抜群ですが、幸い24年前「観光学科」を設置するに際して責任者の役割を果たし、また設置後5年間初代学科長をつとめたのは小生ですので、小生としては、“古巣の同僚”に協力を求め、末長く手を組んで有無相通じ合いながら、教育・研究両面で該業界に貢献していく方針です。

この方針に沿って、私共はまず10月4日に、多摩大学総合研究所・立教大学観光研究所主催でセミナーを実施しました。場所は平河町の『日本海運倶楽部』国際ホールでしたが、参加申し込み者は定員300名を遥かに越すという上々のスタートでした。私共は11月中旬には東京・大阪で「21世紀のホテル」と題する公開セミナーを開催致します。ご関心のあられる方々は、どうかTIMIS事務局にご連絡下さい。

人はオカシクあるべきだ

各　位

野　田　一　夫

この日曜日、久方ぶりに雲間から洩れた薄陽に浮かれた気持ちになって、新宿に出かけました。目的は三越美術館で開催中の「ダリ展」。行きの地下鉄の中で、昔ニューヨークのホテルのエレベータの中で偶然ダリと乗り合わせた時のことを懐かしく想い出しました。私の乗っていたエレベータに彼が入ってきた時、あの独特のヒゲとギョロ目ですぐダリだと分りましたが、眼が合うと彼は、「日本人か？」と話しかけてきたのです。「……日本人なら誰でも貴方のことを知っているよ……」と答えると、ニヤリと笑った彼が「日本人は不敗のサムライだ」と刀を抜くような身振りでおどけた姿が忘れられません。

「ダリ展」は予想以上の混雑で入場券の売り場は長蛇の列でした。平和で豊かな民主主義社会では、あらゆる分野で凡庸な人物が指導者に選ばれる結果、大衆は凡庸さに食傷します。その意味では、今世紀最後の天才画家といわれるダリに対して、人気が集まるのは当然のことでしょうか。先日の新聞によると、文部省でも遅まきながら“天才児”を育てるために「教育上の例外措置に関する調査研究協力者会議」を設置するとのこと。教師の方がとても非凡とは思われないのに、天才児はどうやって育つのか疑問ですが、成果を待ちましょう。

現在の大学入試の“偏差値”は、凡人の中での優劣を決める典型的指標ですから、上述の風潮の中では愚弄の対象とならざるをえません。たとえば、今週土曜からビートたけし主演のフジテレビの新番組「平成教育委員会」が始まりましたが、その宣伝文句に曰く「“変差値”重視！　偏差値を笑い飛ばせば日本晴れ。人はオカシクあるべきだ」と。今後の大学入試は“変差値”とか“個性値”（衛藤瀋吉氏）をもっと重視すべきですが、果してそれらを測定する客観的尺度となると？……。

りえ・エフワン・学園祭

各　位

野　田　一　夫

21日カナダから帰国した宮沢りえに報道陣が殺到し、正に成田空港では阿鼻叫喚の騒ぎ。記者会見には、いい歳をした新聞・雑誌記者200名が神妙な顔で出席、滑稽でした。それもこれも、18歳の彼女の“衝撃ヌード”写真集出版の余波ですが、それにしてもその予約申し込み数30万部とは……。20日、鈴鹿サーキットで行われた「F1世界選手権日本グランプリレース」には、日本全国から15万ものファンが押しかけ、スタンドは大入満員の盛況。その晩の8チャンネルの録画放送の視聴率は何と20.8％、約600万人がブラウン管の前にクギづけになったことになります。結局は、“エフワンの星”中嶋悟に対するセンチメンタルな人気によるものでしょう。

20日、21日両日、本学では学園祭が開催されました。豊田武志君を委員長とする実行委員会のメンバー20名を中心とする学生諸君の努力の賜、両日とも好天にも恵まれ、行事は万事順調に終了したようで、ホッとしました。ただし、人出は今ひとつの感あり、残念でした。実は昨年、私は直前になって学園祭を中止させました。準備が大幅に遅れていて、大勢の人々にとてもお出で願えそうにもないと判断したからです。しかし、この措置は実行委員会の学生をひどく落胆させたため、今年私は、最後まで目をつぶっていました。ところで、学園祭当日、渡されたパンフレットの出来は装丁内容とも予想以上で、私は改めて感心しました。が、製本が完了したのが学園祭の3日前と聞いて、思わず口をアングリ……。宮沢りえや中嶋悟の人気をもり上げたスサマジイ商業主義と対照的に、学生諸君は“観客動員”意識が余りに希薄です。観客の少ない芝居で役者の芸は磨かれません。学園祭実行委員諸君！　今年はよくやった。しかし、“観客動員”こそ来年の最大の課題ではないだろうか。

山気佳日夕

各　位

野　田　一　夫

長谷川恒男氏は、ヒマラヤの未踏峰ウルタルⅡ登頂中、先月10日、雪崩のため遭難死されましたが、その生前最後のインタビューが『週刊文春』（10月31日号）に掲載されました。「……誰にも生きている実感というものがあるでしょう。仕事をしている時の充実感、趣味に打ち込んでいる時の充実感、……そういう意味でも、山登りは僕の人生そのものです……」と語る氏が一番愛した言葉は、意外にも「山気佳日夕」とのこと。好天に恵まれて一日の山旅を終え、小屋で夕食を済ませたあと、窓外に夕暮れの山なみを眺めながら味わう何ともいえぬ充実感……。若い頃、毎年何十回となく狂ったように山へ登り続けた僕にも、この気持ちは痛い程懐かしく想いかえされます。

長谷川恒男といえば、僕達のようなアマチュアにとっては、神様のような存在。何しろアルプスの三大北壁の冬季登頂にことごとく成功、とくに名にし負うアイガー北壁に関しては世界初という輝かしい記録が山岳史に残っているのです。しかし最後の山旅へ出発前の氏の心境は、「……体力、技術力、僕の登山家としての頂点は、残念ながら、もう過ぎてしまったと思ってます。今は下り坂。これからどんどん下がって行って、結局、最初のスタートライン、15歳のときの自分に帰ってゆくんだろうと、今はそんな気がしています」と想像を絶する謙虚さ。

氏の登山は、15歳の時丹沢へ登り生まれて初めて“おだやかな自然との触れ合い”を体験して以来とのことですが、山岳家としてあれだけの超人的偉業を次々と成し遂げながら、40そこそこの年齢ですでに、氏は自らの限界をきびしく受けとめていたのです。今週は、72歳の自民党総裁誕生。宮沢さんは立派な政治家でしょうが、氏の人生で、果して政治家としての能力は今最盛期なのかどうか、それだけが気になります。

Miss Saigon

各　位

野　田　一　夫

先週から今週にかけて5日間、珍しくマンハッタンの中心から離れることなく過ごしました。時間的余裕にも恵まれ、またワイフを伴ったこともあって、連日ミュージカルを楽しめました。楽しむといっても、これまで俳優の早口の英語が理解できずいつも欲求不満を感じてきたので、今回は目標をストーリー性の強いものに定め、その筋書きを日本にいる間に完全に覚えて行きました。米国の劇場で手に入るプログラムには、出し物の筋書きなぞ見当らないのが普通だからです。

経済は低迷し、街は汚れ、犯罪は横行するとはいえ、ニューヨークは何といってもミュージカルの本場。丁度30年前僕がはじめて観た「The Fantasticks」がまだオフ・ブロードウェイの劇場でロングランをつづけ、例の「Cats」の上演年も2ケタに入りました。ところで、今回の僕の最大のお目当ては「Miss Saigon」。若い美しいベトナム娘と米国軍人との悲恋の物語り。このミュージカルがまずロンドンで大ヒットした後大西洋を渡って、いま日ごと夜ごとニューヨーカーを感動させています。筋書きが頭に入っていた上に素晴らしい歌と演技、それに目を見張る舞台装置で、僕も感動し暫し時を忘れました。

「Miss Saigon」で主演のキム役を演ずるのは明眸のフィリピン女性リー・サロンガ、同じ日の夜、リンカーン・センターのメトロポリタン・オペラで観た「魔笛」のプリマドンナは韓国のヘイ・キュン・ホン、ともに最高の歌唱力で満員の観客を魅了しています。“国際化”はこの面でもごく自然な形で進展しています。若い世代の諸君がこうした国際化の趨勢に対応し、教養を深め感性を磨き外国語をものにし、人の和を世界に拡げる努力を傾けたなら、彼らの人生は、僕達の世代では味わえなかった程豊かなものとなるのでしょうが……。

萬里の長城

各　位

野　田　一　夫

来週が楽しみです。月曜から水曜まで、毎夜TBSの大型連続番組『萬里の長城』が放送されるからです。「宮沢りえのヌードにヘアは写っているか」などという愚にもつかぬ話題をやっきになって追っかけているマスコミに嘔吐を感じている向きには、この番組は多分一服の清涼剤となってくれるものと信じます。何しろ取材陣が、井上靖氏の指導のもと、4年の歳月をかけて万里の長城をくまなく踏査し、世界ではじめて映像記録された成果を、7時間の作品にしてわれわれに公開してくれるわけです。腰をすえて対せざるをえません。

丁度1年前、僕は北京郊外の万里の長城の石段に腰をおろし、山なみの彼方地平線まで続いている長城を眺めて何時間も呆然としていました（TIMIS－83)。壮大な中国史に想いをはせつつ西へ西へと長城の上をどこまでも歩いていきたかった…その時の僕の願望を、この番組が充してくれる筈です。延々6500キロの長城の西の果ては敦煌、井上靖氏がその代表作の題名とした辺境の町。この作品を読み進んだ読者は誰でも、主人公趙行徳の波乱の人生の後半の舞台となった没落前の敦煌の都のたたずまいを、知らず知らずのうちに頭に描いた筈です。

だが、僕も後から知って驚いたのですが、井上氏がこの地を初めて訪れたのは、作品刊行後20年経ってからでした。しかも、誰よりも敦煌への旅を憧れつづけていた氏は、その地に着くと同行した夫人に一言「想像していた通りだ」と呟かれたとのこと。膨大な文献を渉猟し尽くしたとはいえ、氏の想像力の凄さには舌をまく他はありません。ものを知っていること（知識）と、より高次元の発想のできること（見識）とは全く違うものですが、現行の大学教育は果して“見識ある人材”を育てようとしてもろもろの知識を学生に授けているのでしょうか。

永平寺　晩秋

各　位

野　田　一　夫

先日、新しいゴルフ倶楽部ができたからと関西の友人に誘われるままに、早朝の新幹線で西下しました。が、米原駅に降り立つと、余りの上天気に気が変わり、車を借りて、そのまま独り気ままな旅に出ました。北陸道を北へ、目指すは永平寺。僕の家は禅宗ですから、かねてより一度曹洞宗の大本山へお参りしたいと思っていたのです。

わが国は仏教国だといわれていますが、残念ながら、日本人がそれを意識するのは葬式の時ぐらいのものでしょうか。しかし僕はちょっと違います。15歳の春、僕がひとつ年下の少女との結婚を真剣に考えていることを知った中学の恩師が、三河の山奥にある禅寺へ僕を送りこんだからです。それから約1週間僕は早朝から深夜まで、懸命に「般若心経」を唱え続けました。或る日夕食の後、この寺の住職は僕を庫裏へ招じ入れ、般若湯など飲みながら、実に遠まわしに、一途な恋に思いつめた僕を説諭してくれました。住職の教えてくれた煩悩（ぼんのう）とか涅槃（ねはん）といった仏教用語の意味をどれ程理解できたのかは解りませんが、翌朝、庭の沈丁花の香りが薫風となって堂内に満ちわたる中で一心に座禅を組んでいた僕の体内に突然、愛の本質に目ざめたのだという快感が襲ってきたのです。

……50年後、永平寺の大法堂の階段に腰を下ろし晩秋の庭に目をやると、見上げる老杉の木漏れ日を浴びて金色に輝く公孫樹の黄葉……、僕の心には、あの少年の日のほろにがくも甘い想い出がふつふつと湧き上ってきました。帰り道の車の中で、カーステレオから流れてきたアリスの「秋止符」を口ずさんでいると、時代は変わっても若者たちの繊細な情感は昔も今も全然変わっていないという気がして、ひどく心が安らぎました。これから、学生達にもっと優しくしなければと思っています。

それぞれの青春

各　位

野　田　一　夫

先日の日曜日の朝、ワイフは娘と一緒にデパートへ、息子どもはそれぞれガールフレンドとデートへ……残されたのは家の主と猫だけ、われわれの年齢の男にはよくある状況です。新聞なぞ丹念に読むうち昼となり、お腹も減って、カレーライスが無性に食べたくなりましたが、残りメシにインスタントカレーでは余りに侘しいと、服装をととのえて外出。赤坂はTBS本社地下のカレー専門店 Top's & saXon に向いました。味も雰囲気も僕の気に入りの店です。

案内されて席へ着き、渡されたメニューを満たされた気持ちで見ていると突然「学長！」と思いがけぬ呼掛け。何とこの店では、本学の高崎尚彦、九鬼崇両君がアルバイトでウェイターをしていたのです。立教時代と違って、多摩大に来てからははじめての経験。両君の礼儀正しくキビキビした応対にすっかり嬉しくなり、両君を激励したり支配人に挨拶をしたりして……、店を出てからもその日は一日中、殊のほかご機嫌でした。

実はこのところご機嫌なことが立て続けです。今月はじめ開催された Penn Collegiate Tennis Circuit で本学のテニス同好会“アボガド”の諸君は、男子64組、女子10組のチームの間でせりあい、男女揃って準優勝を遂げました。18日学長室へ大場達也、上山哲生、久保田剛、村上千予、山口美紀、佐々木恵子、酒井有子の諸君が届けてくれた盾は、学長室を飾ってくれています。先月20日に開催された全日本通信珠算競技大会の高校・一般の部では、斎藤聡子、川口嘉治、高田広忠3君が、昨年につづき今年もまた見事団体総合優勝、この優勝杯は今図書館に飾られています。

何と頼もしいそれぞれの青春！秀さんと語り合い、近くこの学生諸君を全部集め、一大コンパを開くことにしました。

本田宗一郎さんを偲ぶ

各　位

中　村　秀一郎

本田さんに初めてお会いしたのは、1973年日経流通新聞に連載中だった経営者論『商魂の系譜』の取材のためだったと思う。

その晩ご馳走になったときのことである。西銀座の小料理屋の二階に上がるやいなや、本田さんが階下に向かって「おかみ、おれの運転手にめしを喰わせろ」と大声で叫ばれたのにはびっくりした。帰途、本田さんに自宅まで送っていただいたハイヤーの運転手さんは、「社長が私達にいろいろと気をつかわれるので、全く恐縮しています」と語っていた。

1986年、中国社会科学院と本田財団との共催による「技術文明」に関するシンポジウムの際、本田さん主催のパーティーが北京のシェラトンホテルで開かれたときのことである。

宴がお開きになったとき、本田さんは会場の一角で「北国の春」をはじめポピュラーな曲目を演奏していた楽団の前に足早に行かれて、「皆さんご苦労さんでした」と挨拶されたのには感動した。中国の偉い人たちも驚いたようである。楽団のメンバーは大喜び。本田さんは多くの人たちに支えられて自分があるという自覚をたえず、持ち続けられた方であった。

本田さんは社長時代にもハイヤーに乗っておられた。なぜ社用車でないのですかとお尋ねすると、50年代半ばに廃止されたとのこと、その理由として女房子供などが利用するといった公私混同を招きやすいこと、運転手が機密を知っていると思われやすく、そのため不幸に陥る心配があるため、といわれていた。のちにロッキード事件に関連した元総理の運転手自殺の報に接したとき、本田さんが考慮されていたのはこのことだったのかと知った。

このように本田さんは、まわりの人たちに行き届いた気配りをされた方であった。

ファッション・ファクトリー・ブティック
各　位

中　村　秀一郎

「みなとみらい21」にオープンした国際展示場「パシフィコ横浜」で、世界テレポート連合総会メインイベント「ファッション・ファクトリー・ブティック」が、11月20日から三夜開催されました。主催者側のねらいは、情報社会におけるファッション産業のあり方を示すことにありましたが、それは催しの中で見事に演出されたといってよいでしょう。

この催しは3つの場面から成り立っていました。その第一は、若手デザイナーのポープ田山淳朗のパリのアトリエでのファッションショーを宇宙衛星経由で会場の大画面に映し出し、その中から会場で参加者である市民（女性3人子供1人）が自分の好みのジャケット、パンツ、水着、ニットウェアを選出したことでした。その第二は、ファクトリー・ブティック。選ばれたデザインによるモノづくりが直ちにスタートし、約50分でこの会場で完成したことです。そのため最先端のCG、CAD－CAMをはじめとする生産設備が舞台に設定され、オペレーターたちの仕事が演示され、工場と店とがそこでは完全に統合されたのです。その第三は、参加者に話題を提供するファッショントークショー。第1日目には本学の望月照彦教授が、3日目には、私が（財）衣服研究振興会理事長の肩書で、ゲストの一人としてこれに出演しました。

この催しの衝撃は極めて強烈だったと信じます。それは、アパレル産業がまさにコンピューターとメカの塊となり、働く人々は3Kに全く拘りない技能者となっていることを示してくれるとともに、ファッション・ファクトリー・ブティックのオーガナイザーとして田山氏のような新しい地球型デザイナーが世に登場したことを、私たちに知らせてくれたからです。

コミュニティ・カレッジの明日

各　位

中　村　秀一郎

「新しい市民文化の創造」を掲げ多数市民の参加のもとにすすめられた今年度のコミュニティ・カレッジも、12月7日で全日程を終了しました。

翌8日、早速新しい運営委員会がスタートしました。受講者の方々のご意見を踏まえ、来年度は企画段階から市民の側より、安西綾子、市川周、及川裕史、中村琴美の4氏に参加戴くことにしました。同時に学生からも委員を公募した結果、伊藤裕史、小田部拡史、島尻剛、七尾賢太郎の4君が名乗り出てくれました。それに大学（総研）側から椎木哲太郎所員ほか1名が加わり、10人の運営委員で企画・運営を進めます。

公開講座を行う大学は増えていますが、市民委員・学生委員の参加による運営方式は前例がなく、今後、公開講座における「多摩大方式」として注目を浴びるに相違ありません。

早速、今年4月に静岡理工科大学が開学した袋井市から視察がありました。市民、学生、大学人、それぞれの異質な発想が相互に影響を及ぼし合い、より高次の知的エネルギーの台頭が期待されます。試行錯誤の中から、長期的に大学と地域・市民との新しい“創造的な関係”を創り上げたいものです。

委員会では来年度は「豊かなライフスタイルと社会」（4～5月）、「地球環境問題を考える」（6～7月）、「企業と市民の新しい関係」（9～10月）、「家族する時代」（11～12月）の4つのテーマに沿って、一方的な講演形式ではなく、受講者と講師の対話を重視する“参加型”の講座をめざしています。

これまでの既存の類似の催しとは一味違った、国際性・専門性・学際性の高い講座として、地域市民生活に無くてはならない存在にしたいと願っています。講師やテーマについて、是非とも運営委員会宛にご意見をお寄せ下さい。（TEL0423-37-7185）

栄華の巷・偸安の夢

各　位

野　田　一　夫

年末の渋谷の喧騒の中を人波にもまれて歩いている時、ひょっと思いがけない言葉が心に浮びました。「……偸安（とうあん）の夢に浸りたる、栄華の巷低く見て……」、古い世代の日本人なら誰でも知っている、旧制一高の寮歌の一節です。40余年ぶりにこの歌を独り小声で口ずさみました。歌詞の随所に、戦前の旧制高校生の鼻もちならないエリート意識がにじみでている一方、現在の日本人が失ってしまった何かが一貫して流れているように感じました。その何かとは、強いて表現すれば“憂国”です。“憂国”という言葉は、戦後打ちつづいた平和の中で、空前の経済的繁栄を謳歌している日本人には、も早死語と化してしまっています。元来天下国家を考えることも論ずることも好きでない僕が、よりによって盛り場の雑踏の中で、このことに思い至るとは、やはり今年ならではです。

イラクに対する米・多国籍軍の電撃作戦で幕が開き、ソ連邦の崩壊で幕が閉じられたことが象徴しているように、今年は国際情勢が文字通り激変をつづけました。世界の多くの国々では、国民がこの激変を重く受けとめ、リーダーはその対応に懸命な努力を傾けたのに、ひとりわが国だけは、リーダーは国際適応能力の驚くべき欠如を天下にさらしたのみか、国民は国民で、嵐の世界をはた目に、ひたすら飽食とエロ・グロ・ナンセンスの日々を送ってきたとしか思えません。コメにせよPKOにせよ、政治家も国民も、どれ程真剣にそれに対したのでしょうか？。卓越した経済力にふさわしい国際的責務を積極的に果たす気の全くないこの国を、世界がいつまで容認しつづけるでしょうか。“バブル”がはじけ、たのみの経済の行方にも黄信号が灯って、平成３年が終ろうとしています。より厳しい環境の中で、来年こそ日本人の真価が世界的に問われる年でしょう。

第2の創業期

各　位

野　田　一　夫

新年おめでとうございます。

多摩大学にとって、今年はひとつの区切りの年です。2月の入試で4期生が決まり、4月からは初めて4年生が生まれ、春から夏にかけて第1回卒業生のための就職活動が本格化します。

約3年前、新設認可を受けた大学のひとつとして新聞の片隅にささやかに掲載された多摩大学は、世間的には全く無名の大学でした。しかし、平成元年4月開学後本学が次々に実施していった教育上の施策は、久しく日本の大学に定着していた因習を打破するものとして多くのマスコミの注目するところとなり、本学独自の教育理念ともども広くいろいろな形で報道がなされつづけた結果、今日では本学の知名度は予想外に上り、幸い世間的評価も大いに高まりました。

今年も新年早々、13日（月）の朝8時35分からNHK総合テレビ「くらしのジャーナル」で、本学が昨年実施した「学生による講義評価制度」のことが報道されます。時間の許す限り皆様にも是非ご覧いただきたいと願っておりますが、かといって私は、マスコミによってつくり上げられていく本学のイメージを過度に重視してはおりません。むしろ、えてしてこのような場合、イメージは実態を離れて独走するものだということを常に肝に銘じ己を戒めております。

本学には、今年もやるべきことが山積しています。大学院の新設、新学部ないし学科の増設、寄付講座の開設、コミュニティ・カレッジの拡充、多摩大総研の活動の本格化……これらはどれもこれも、それを見事に完成させるには、関係者の卓越した知恵と努力を必要とします。だからこそ私共は、今年を本学にとっての“第2の創業期”と位置づけ、教職員一体となって所期の理想の実現をはかりたいと念願致しております。

レニ・リーフェンシュタール

各　位

野　田　一　夫

目下、渋谷Bunkamuraで「レニ・リーフェンシュタール展」が開催されています。昨年暮、僕は彼女の監督作品『青い光』を観ての帰り立ち寄ったのですが、何よりも、若い人が圧倒的に多かったのには驚きました。展示されている写真の中で一段と鮮やかな色彩を放っていたのは海中の生物たち。解説によると、彼女が海中に魅せられ、止むに止まれず、スキューバダイバーの資格をとったのは、何と71歳のときのこと。

彼女の名前はあのベルリン・オリンピックの素晴らしい記録映画『民族の祭典』『美の祭典』と切り離せません。ダンサーから女優へ、女優から映画監督へ、彼女のイメージは常に、あふれる知性、鋭い感性、そして輝く美貌でした。その彼女ももう89歳。会場に掲げられた大きなポートレートをじいっと見つめながら、僕は思わず過去の彼女の面影をさがし求めました。

ありました！ 何事にもそして何者にも屈しない精神の強靭さが、今の彼女の顔の中に昔通り、いや昔よりも魅力的ににじみ出ていたのです。そういえば彼女は、第二次大戦後ナチ協力者として逮捕投獄されながら、数十回に及んだ訴訟をことごとく冷静に勝ち抜き、遂に無罪を獲ちとりました。すでに42歳になっていた彼女は、この頃アフリカ文化に興味を抱くや、一念発起して芸術写真家を志し、独特な文化を伝承するヌバ族と起居をともにしながら、やがて万人瞠目の作品集を作り上げ、欧米社会にセンセーションをまき起こしました。

何という多彩な才能、いや何という強靭な意志でしょう。僕はつねづね若者たちに接していて、彼らに共通して欠けているものは、才能ではなくて精神力だと信じてきました。だからこそ僕は、「レニ・リーフェンシュタール展」を熱心に観ていた多くの若者たちに、一層心を打たれずにはおられませんでした。

親の心子知らず

各　位

野　田　一　夫

…1年間の履修内容をすべて盛り込んだ分厚い履修要項をつくったり、年2回の授業評価アンケートの実施など、「学生の知的好奇心を満足させるサービス業」としての大学を目指してきた。学生の中には「学長はマスコミ受けばかり狙う」という声もあるが、野田氏は意欲のありそうな学生を見つけ、直接面接しては、やる気のある“エリート学生”を捜し求めている。そうした学生が中心となり、昨年、学生新聞を創刊した。彼らが学内全体を活性化するまでにはまだ時間がかかる…。

先週金曜の「日経産業新聞」は「少産化時代の学校経営」という特別記事の中で本学をとりあげ、このように論評しました。もちろん私自身にも取材した上ですが、なかなかいい点をついています。私は開学以来、本学設立の理念をいかに実現しようかと、あらゆる施策を次々に実施してきました。これらに対してマスコミの評価は予想外に高かった結果、本学の世間的知名度は今や、新設大学としては“破格”とまで言われるようになりました。もちろん私は、このことをいささかも得意には思っておりません。むしろ、実態が世間的評価や知名度ほどでないことに、誰よりも責任を感じています。

しかし私はまた、このことにいささかもたじろいではいません。精神の健全な人間は誰でも、自分の属す集団や組織の社会的評価や知名度が高いことに誇りを感じ、だからなおさら仲間と協力して、実態を改善するための前向きの努力をつづける気になるものだ、と信ずるからです。学生の中にはたしかにシラケ者もスネ者も少数いますが、こうした連中も就職ともなれば青くなって会社間を駆けずり廻り、その時こそ、われわれの努力の結果である多摩大の評価と知名度の有難味を、改めて感じてくれることでしょう。

“いき”と“獣性”

各　位

野　田　一　夫

電通がつくった「生活大予言 1992」によると、われわれの生活にとって、今年のキーワードは“いき”だそうです。1991年にバブルがはじけてみると、日本人には「金で買えないモノへの猛烈な飢餓と、際限のない浪費ゲームの疲弊」が残り、その結果として改めて見直されてきたのが、古来わが国で“いき”と呼ばれてきた美意識である、というわけです。

“いき”という言葉で懐かしく想い起こしたのは、旧制高校生の頃僕が読んだ『“いき”の構造』という本のことです。先輩に手渡されてその題名を見た時には、率直に言って何のことだかさっぱりわかりませんでしたが、読み進むうちに、単に日本人の間で感覚的に認識するほかはない現象を、古今東西の膨大な文献・資料を引用しつつ、これほど理路整然と解明できる九鬼周造の知性と教養と文章表現力に舌を巻いたものです。

九鬼によると、“いき”とは、“媚態”が基調となり、その上に一方では武士道に通ずる“意気地”と、他方では仏教思想の影響である“諦め”と三者が一体となって形成され洗練されて社会的に定着した日本民族独特の美意識です。この中で最も重要な要素である“媚態”を説明するのに、九鬼は永井荷風の『歓楽』の中から「得ようとして、得た後の女ほど情無いものはない」という文章を引用しています。

こうした状態の人間の気持ちは“いき”とは正反対、つまり男女双方の間に介在していた“媚態”は完全に自己消滅しているのです。戦時中に“従軍慰安婦”を必要としたのも、平和が来て懐が暖かくなると大挙“売春ツアー”に出かけたのも、日本の男達です。こうした“獣性”の恥ずかしげもない露出は、日本人の心の中で、“いき”という高度な自制心の産物である洗練された美意識と、果してどう共存できるのでしょうか？

新しいトビウオ

各　位

野　田　一　夫

貴花田が優勝しました。私はそれを“時の勢い”と思っています。貴花田を優勝させたいという圧倒的多数の日本人の希いが、“時の勢い”となって貴花田の身体にのり移り、相手力士はその勢いに呑まれて、あたかも八百長のごとく次々に敗退していったのです。それにしても、貴花田が絶えざる稽古のつみ重ねによって心身を鍛えぬいていたからこそ、彼自身は“時の勢い”を重圧と感ぜず、むしろそれを無意識的に活用しえたわけで、実に見上げたものです。

千秋楽の彼の相撲を視ていて、私は昭和24年のロスアンゼルス・全米男子屋外選手権の時の古橋廣之進選手のことを、懐かしく想い起こしました。あの頃はまだ終戦後の経済・社会的混乱期。大部分の日本人はヤセこけてボロを身にまとっていましたが、長い苦しい戦争の後だっただけに、心の中ではみな明るい未来を懸命に模索していました。しかし明るい未来を約束してくれるような兆しを何ひとつ見出せなかった時に、突然、若き青年“フジヤマのトビウオ”が現れ、米国の強豪を抜きさり、世界新記録まで樹立することによって、われわれ日本人に自信とやる気を与えてくれたのです。

今の日本は、あの頃とは比べようもない程の経済的繁栄の中にあります。しかし暖衣飽食の日々を過ごす日本人の心の中には、寒い風が吹いています。国内では気の滅入る事件がつづき、国際社会の中での孤立感は高まる一方です。自国の明るい未来を求めながら暗い現実を打開する材料のない時、日本人には何かのキッカケを掴もうとする国民性が伝統的にあります。貴花田の優勝こそ、日本人にとって正にそうしたキッカケになるのではないでしょうか。新しいトビウオの出現が、日本の明るい未来を拓くキッカケとなることを祈らずにはおれません。

リーダーの今日的条件

各　位

野　田　一　夫

先日NHK総合テレビで放送された『狙われた政権』は、実に見ごたえのある作品でした。

選挙の結果、大方の予想を裏切って、左翼の闘士ハリー・パーキンスが英国首相の座を射止めます。組閣を終った彼は、早速急進的な内・外政策を矢つぎ早やに実施に移そうとします。これに脅威を感じた旧体制派は、米国を巻き込み、これら政策の実施を必死で阻むとともに、彼自身を失脚させようと、あらゆる謀略をはりめぐらせます。この謀略は徐々に成功を収めてパーキンスを追いつめ、遂に彼は、デッチあげられた醜聞によって、退陣を迫られます。健康を理由に退陣の決意を全国民に伝える筈のテレビカメラの前に座った彼は、しかし、予め秘書官が用意した原稿をワキに置き、自分に仕掛けられた謀略の全貌を冷静に、雄弁に、そして実に説得的に語って行くのです。

驚きました。感動しました。考え込みました。政治家はもとより経営者もそうですが、今日大衆を相手にリーダーとして成功するためには、単に“頭が切れる”とか“人柄がいい”といった人間的属性では足りません。むしろパーキンスのように、謀略には謀略をもって打ち勝つ“したたかさ”とか、決定的瞬間において“大向うをうならせる”雄弁力といった属性こそが貴重なのです。この属性は、古来わが国の学校教育の中では、徹底して軽視され、むしろ否定さえされてきました。宮沢首相はそうした学校教育が生み出した“優等生”といえましょう。

このところやたらに目立つ謝罪と弁解、原稿のギゴチない棒読みに終る公式スピーチ……首相のこういう痛々しい姿を毎日見ていると、大衆が何者をも恐れることの無くなった今日のような時代には、日本にも新しいタイプのリーダーが一日も早く出現しなければ、とつくづく感じさせられます。

「学ぶコミュニティへの発信 ── 自由人・専門人そして市民」

各　位

中村　秀一郎

TIMIS － 141でご紹介しました市民と学生、大学人による1992年度のコミュニティ・カレッジは、3カ月にわたり運営委員会で活発な議論を重ね、ようやく企画決定を見ました。大学にとっても、また、平素市民との交流の少ない学生たちにとっても、いい刺激となっているようです。4～7月は、上記の統一テーマの下、通常講義13科目の公開の他に、「市民講座」と銘打って以下のような連続講座を行うことになりました。新しい多摩の街に豊かなコミュニティと市民文化を創るための情報発信基地としての役割を担いたい、との思いを込めたものです。そのためには、「よき自由人」、「よき専門人」であると同時に「よき市民」となることが求められているのではないでしょうか。

「豊かなライフスタイルと社会」（4～5月：土曜2～4時）

4／11　野田一夫（学長）「新しい時代　新しい発想」

4／25　正村公宏（専修大学教授）「持続可能な豊かさ」

5／9　齋藤裕美（多摩大学助教授）「多摩のまちづくりを考える ── ニュータウン・ウォッチング」（朝日生命ビル集合）

5／23　本間正人（松下政経塾）「多摩から日本を変える」

「地球環境問題を考える」（6～7月：同上）

6／13　小沢徳太郎（スウェーデン大使館科学部環境保護オブザーバー）「『治療志向の国』から『予防志向の国』へ」

6／27　シンポジウム「多摩の都市環境を考える」・パーティ、

7／11　岩崎駿介（筑波大学助教授・92国連ブラジル会議市民連絡会代表世話人）「地球サミットからの報告」

講演は1時間程度で、参加者と講師、参加者間の対話を大切にします。申し込みは4月7日まで。受講料は1テーマ3,000円（1回1,000円、全5,000円）です。詳細については、運営委員会事務局宛にお問い合わせ下さい。（☎0423－37－7185）

Other People's Money

各　位

野　田　一　夫

宮沢首相の発言によって触発された多くの米国民の怒りと反日的行動が、ニュース記事となってまだ連日新聞の紙面をうめています。日本人の車が傷つけられたとか、家に銃弾が打ち込まれたとなると、宮沢首相は“業務上過失……”で起訴されてもいい位の罪を犯したような気がしますが、テレビに出て来る本人の顔はケロリとしたもので、余計シャクにさわります。

新聞紙面を丹念に読むかぎり、宮沢首相の例の発言は、米国人記者によって部分的に誇張されて伝えられたということは、納得できます。しかし、誤解されそうな発言を首相としてこんな時期にした責任は、問われて当然でしょう。ところで、たとえば彼が「……日本でも米国でも、志あるすぐれた青年の多くが、ローレンス・ガーフィールドのような成功を目ざすとすれば、やはり正常な社会とはいえません。いろいろ問題はあっても、私はむしろ、アンドリュー・ジョーゲンソンのような人物に心魅かれるのです……」というふうに言ったとします。

質問した武藤議員が目をパチクリさせたら、ニッコリ笑い「……失礼しました。もう『アザー・ピープルズ・マネー』をご覧になっていると思って……」と前置きして、簡潔にしかも気のきいたこの映画評でもしたら、これは確実に明るいニュースとして米国に伝わり、多くの米国人の共鳴を呼び、宮沢首相ひいては日本人に対する悪感情氷解のキッカケにすらなったかも知れません。首相とはそうした教養と機知と洗練されたスタンドプレーの持ち主であって欲しいというのが、私の希いです。

因みにノーマン・ジュイソンの傑作「Other People's Money」は、今全国の映画館で上映中です。名優ダニー・デヴィートとグレゴリー・ペックの企業倫理をかけての対決は、“バブル崩壊期”の日本人にとって、真に教訓的で心にしみます。

多摩大はまだ目覚めない

各　位

野　田　一　夫

先週末僕の手元に本学学生から一通の手紙が届きました。レポート用紙9枚に細かい字でびっしり書きつづられた本学の現状に対する慨嘆文。送り手は1年生の内田純一君でした。

同君は受験生の頃から、勉強のかたわら本学に関する本や雑誌記事を読み漁り、期待に胸ふくらませて本学を受験して見事合格したのです。しかし残念ながら、入学してみると現実は、講義も設備も同級生も、同君の期待を大きく裏切るものでした。入学後同君と親しくなった敬愛できる友人の中2人は、同じく本学に失望してやがて大学に姿を見せなくなりました。マスコミであれ程喧伝された“多摩大学の理想”は一体どうなったのか……悩み抜いた末、止むに止まれぬ気持に駆られて、同君は学長である僕に直訴状を書き送ったわけです。

一読して心打たれた僕はその夜すぐ同君に電話し、日曜午後には新宿で会い、同君が連れてきた同じ本学1年の畠山晋一君も加わって、昼食を食べながら実に約3時間喋りつづけました。「……去るか、諦めるか、踏み留って一緒に理想を目指すか、選択は3つしかない。どれを選ぶも君達の自由だが、創立者の僕にはそんな自由はない。現実がどんなに予想外のものであったとしても、それが建学の理念の責任にはならない。諸君は他人の築いた実績にあやかりたかったのか、それとも自分達で築き上げた実績で後進に恵みを遺したいのか。不満を言うより建設的策を練れ。今を嘆くな未来を夢みよ……」

時が経つにつれ、語る者も聞く者も熱っぽくなり、やがて多摩大学の現状を何としても創立の理想に一歩一歩近づけねば、というほのぼのとした共感が生まれました。年は親子以上に違っても、別れぎわに交わした男と男の握手には、確かな暖かい血が通っていました。真に教師冥利を味わえた1日です。

希わくは惜しまれつつ

各　位

野　田　一　夫

いよいよ3月となりました。入試を全て終えて新入生が決まると、多摩大学は初めて1〜4年生が揃い、来年第1回卒業生を出した時点で文部省認可の“完成年”を迎え、やっと一人前の大学となるわけです。毎週皆様にお送り申し上げてきたTIMISは創刊3周年間近です。TIMISの前身Rapportは71号でTIMIS 1号にバトンタッチされましたから、このハガキ通信は4年数カ月、一週も欠かすことなく書き送られてきたことになります。この間読者は数十名から1,600名へと拡がりました。執筆者として有難さの極みです。

しかし、執筆者として私は常に、このハガキ通信をいつ終らせようかと考えつづけてきました。物事はみな、有形無形を問わず、無理に長く続けようとすると、何時しか当初の趣旨から逸脱し、関係者から疎んぜられ、やがて恨みの残る終末を迎えがちです。ですから、このささやかな通信文も、初心を忘れぬよう、マンネリ化におちいらぬよう、毎回毎回私自身は心をこめて執筆してきたつもりですが、それでも、これもどうやらひとつの幕引きの時を迎えつつあるような気がしてなりません。

完成年度を迎える来年3月末までとも考えましたが、思い立ったら、早いに越したことはありません。1年早く、この3月末155号をもって最終号とさせて頂きたいと存じます。こうした一方的宣言を抜打ち的に行うことは、読者の方々に対してあるいは無責任かつ失礼かと思い、1カ月前のこの号で予告を申し上げる次第です。今後多摩大学責任者から皆様へのメッセージをどのような形で行えば良いかにつき、もし各位にご提案なぞございましたら、過去のTIMISへのご感想をも含め、ご一報頂ければ幸甚に存じます。希わくは、TIMISが皆様に“惜しまれつつ”終わりを全うできますように……。

一流ホテルで一流の講義を

各　位

野　田　一　夫

経済雑誌『週刊ダイヤモンド』が、広汎な企業アンケート調査に基づき、今週号で「人事部が評価した役立つ大学」という特集をしていますが、驚いたことに「今後注目すべき大学」の中で慶應、早稲田、上智、国際基督教（ICU）につぎ、阪大と並んで本学が5位にランクされています。あとには法政、亜細亜、東大…が続いていることでもお解りのように、本来新設大学は対象とはならない調査の筈です。

産業界の本学への熱い期待を示す意外なこの数字を前にして、率直に申すと、私は誇りよりはむしろ、ずっしりと重い責任を感じてなりません。であればこそ、私共は教職員一体となって、世間の過分の期待に応えるだけの実態の形成に今後一層の努力を傾ける必要があります。この努力のひとつのあらわれが今年5月より発足する“多摩大学公開講座”です。

これは、3年前の開設時に打ち出した教育方針「社会人を相手にできる大学」に基づくものです。しかしこの方針を実施に移すためには①交通至便、かつ快適な居住性をもつ場所の確保、②時代性があり、かつ他大学が開設していない授業科目の選択、③最高の講師陣の編成、④在来の大学では実施困難な革新的教育方法の開発、⑤受講者の経済的負担の軽減策…等々、現実的に幾多の困難がありました。

しかし幸い、⑤に関しては大和ハウス工業（株）、（社）日本フードサービス協会、（株）イトーキ3機関より合計5つの寄付講座を頂戴でき、また①に関しては新宿京王プラザホテルのご協力申し出があったことによって、いよいよ懸案のプロジェクトは陽の目を見ることとなりました。会場は上記ホテル47階の大会議室、日時、授業科目、講師陣、その他細目については近く皆様方にプロッシュアをお送り申し上げます。乞御期待！

鈴屋の入社式

各　位

野　田　一　夫

来る4月10日、本学は第4回入学式をパルテノン多摩で挙行します。今年の入学式の特徴は2つです。ひとつは新入生が何と約400名に激増したことです。意図的に学生を多数合格させたのではありません。例年の経験に基づいて控え目に合格ラインを設定し発表したのですが、手続き率が予想外に高かったのです。喜ぶべき現象とはいえ、頭をかかえざるをえません。

第2は、入学式と同時に在校生のうち、学業その他で特筆すべき実績を収めた学生を表彰することです。受賞者の正式名称はThe Most Outstanding Student of the Class, 略称MOSC、新入生の何よりの励みとなり、今後在学中何回MOSCを獲ったかがひとつの目標となるに違いありません。

さて、入学式というと、私の頭に浮かぶのはファッション業界の最大手㈱鈴屋の入社式です。東京、大阪をはじめ全国の都市の盛り場に店舗網をもつ鈴屋のことですから、買物に入られた方々は多いと思いますが、店員一人一人の接客態度のすがすがしさには定評があります。私はその源泉が同社の入社式にあると信じます。毎年ご招待を受けますが、伝統的様式に則ってしかもモダンに、厳粛さが漂いながらしかも暖かく、もりだくさんの内容でしかも快テンポに……といった演出の巧みさは、正に“入学式”のモデルといえます。

本学の入学式の今年の特徴は前述のMOSCの表彰を行うことと、ゲストに三浦雄一郎氏を迎え、新入生諸君に対し“リスクに挑戦する”精神について語って頂くことです。そして今ひとつ、少しでも鈴屋の入社式に近い雰囲気を出したいこと。新入生諸君が、大学生として単に勉学のみならず、礼儀作法、態度物腰、言葉遣い、目つき顔つき歩き方まで、素晴らしい青年に育っていく門出にしたいと、私は念願しています。

小さなスペース、大きな友垣

各　位

野　田　一　夫

すでに151号で予告申し上げましたが、TIMISは次号をもってひとまず終結と致します。この数週間多くの方々から数々の惜別のお言葉を頂戴し身に余る光栄と感じております。そのひとつ、高田和雄氏の一文を謹んで掲載させて頂きます。来週は皆様へ私のご挨拶文をお送り申し上げるつもりでおります。

「創設4年目の多摩大が次々に打ち出している新しい人材づくりの教育施策は、活字・映像・電波を駆使した広報活動の効果というより、実際にはもっと素晴らしい内容があると世間が高く評価しています。しかしその反面、学内ではイメージと現実に大きなギャップがあることを認識し、ハガキ通信は再三にわたって“多摩大の敵は多摩大の内部にいる”と自らを戒め、地道な努力の実践を強調していたのが印象に残っています。

あと1年経てば、初めての卒業生を送り出します。彼らは社会人の仲間入りをしますがその時、世間はどんな反応を示すでしょうか、その時の答えこそが多摩大の真価を示すでしょう。今まさに前評価が高いだけに、このまま神話では終わらせたくありません。ゼロからスタートした多摩大の歩みは、新しい事業を立ちあがらせるビジネスの世界と共通するものを感じ、自分のビジネスにも活用させて頂きました。

ハガキ通信にあった忙しい中でのゆとりの見つけ方は早速実行しました。ダリ展、レニ・リーフェンシュタール展などに足を運び、更にブリスベンまで出かけて壮大な落日を眺めつつ、人脈ネットワークづくりは、これからの課題があることを痛感したのはその一例です。ハガキはタテ15.4センチ、ヨコ10.4センチという小さなスペースしかありませんが、その中に盛られた新鮮な数々は、この3年間で私にとっては計り知れない程の大きさの連続でした。」

けふもまたこころの……

各　位

野　田　一　夫

「けふもまたこころの鉦をうち鳴らしうち鳴らしつつあくがれて行く」、“漂泊の詩人”と言われた若山牧水の代表作です。学生の頃から歌は詠みませんが、万葉集から俵万智まで好んで歌を読みつづけてきました。だから、少なくとも百首以上はそらんじている筈です。こんな僕にとって歌は単に趣味といったものではなく、時に処世の武器となり、時に心の支えとなってくれました。

冒頭の牧水の歌をこの人生で何回口にしたことでしょう。僕なりに目標や理想を追い求めては厚い現実の壁にぶつかり悪戦苦闘している時なぞ、身も心も疲れはてて夜遅く家へ帰り、何もかもぶんなげたくなる自分を励ますために、この歌を念仏のように唱えたものです。牧水がどういう状況下で何を言いたくてこの歌を詠んだのかは知りませんし、また知りたくありません。しかし、この歌を口にする時、僕の心には牧水いや歌人いや文学そのものに対する深い敬愛の念が沸きおこってきます。

多摩大学の創設、これは僕の人生の中では比較的苦労の少なかった事業です。多くの信頼できる協力者に恵まれて事業を推進できたからです。とくにヒデさんこと中村秀一郎氏と毎日のように相談し、激励し合い、喜びと悲しみを共にしてきた想い出は常に僕の心に暖かく、終生忘れえないでしょう。

それでも、僕は過去5年間、少なくとも月に何回かは、牧水の歌を唱えながら眠りにつきました。高い理想を求めて事業を推進しつづけるかぎり、責任者に安らぎはありません。4年4カ月にわたって毎週皆様に読んで頂いたハガキ通信は、実はその時々の僕の心の叫びであり、ボヤキであり、訴えであったのかも知れません。そう想い返しつつ、長い間のご愛読に対し、改めて心からの感謝を申し上げます。ありがとうございました。

おわりに

野田一夫

TIMISは156号をもって終了いたしました。ご承知のごとくTIMISの前身は、多摩大学設立以前に関係者および本学設立に特別関心を寄せてくださっていた方々に対して、小生が毎週書き送らせて頂いたハガキ通信Rapportです。Rapportは昭和62年12月第1週から、第1回の入学式の行われた前の週まで71号つづけられたのち『多摩大学設立の歩み』と題する小冊子に集成されました。これに因んで私共は、TIMIS1号～最終号までを『多摩大学の1000日』として集成し、皆様方のお手元にお贈りすることにしました。

多摩大学の第1回入学式がパルテノン多摩で行われた週から、時々中村秀一郎氏にも加わって頂き、教学責任者としてのおりおのの所感、提案、ご報告等などを毎週書きつづったものです。過ぎ去ってしまえば、1000日はあっという間だった気がします。しかし、この小冊子のページをくりながら来し方をふり返ると、多摩大学に関してはこの間実にいろいろなことが思い出されます。幸いにして、私共がこの理念に沿って打ち出した教育上の方法や措置は世間から予想外に高い評価を受け、マスコミはほとんど間断なく実にさまざまな形で多摩大学をとり上げてくれました。結果として今や多摩大学は、新設大学としては前例のないほど“知名度”を高めたといえます。

しかし自重せねばならぬことは、知名度の高まりは必ずしも実体の質的向上をいささかも意味してはいないということです。私共は今後も地味な努力をつみ重ね、知名度にふさわしい実体を備えた大学をつくり上げていくつもりです。何卒今後とも、多摩大学に対して変わらぬご指導ご鞭撻をお願い申し上げる次第です。